天理市埋蔵文化財調査概報

平成２・３年度（1990・1991年）

1993

天理市教育委員会

序　　文

文化財は、わが国の歴史や文化などを正しく理解するためには、欠くことのできないものであります。しかし、一方、住みよい豊かな社会生活を創造するためには、開発行為が必要であります。

私たちは、開発と埋蔵文化財の保存との調和を図りつつ、発掘調査を進め、より多くの遺産を次の世代へ継承していくという大きな使命をもっているのです。

本書は、平成２年度および３年度に実施しました国庫補助事業以外の民間事業と公共事業に伴う発掘調査の概要をまとめたものです。本書が多くの方々の目にふれ、広く天理市の歴史解明に役立つことを願っています。

最後になりましたが、調査にご協力頂いた原因者の方々をはじめ、調査期間中にご協力頂きました研究者や関係諸機関の各位に心よりお礼申し上げます。

平成５年３月

天理市教育委員会

教育長　金澤　運

例　　言

1. 本概報は、天理市教育委員会が平成2年度および3年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。本概報には、平成2年度実施の寺山遺跡、別所塚山古墳、布留遺跡、嘉幡古墳、下池古墳外堤、柳本遺跡群竹ノ尻地点、柳本遺跡群べべノ木地点、柳本藩邸（第5次）と平成3年度実施の石上・豊田古墳群狐ケ尾6・7号墳、別所遺跡（第2次）、平等坊・岩室遺跡（第8～10次試掘）、海知遺跡のそれぞれの調査の概要を収録している。
2. 調査については、社会教育課文化財係の泉　武、松本洋明、青木勘時が分担した。分担詳細は目次に明記した。また、遺物の整理にあたっては芳村信芳、巽信子、滝本富美子、小池香津江、前田雪恵、伊藤恵理子、岩崎しのぶ、西山陽子が補佐した。
3. 本概報の執筆は、それぞれの調査担当者および調査参加者が分担し、文末にその文責を明記した。なお、編集は青木がおこなった。

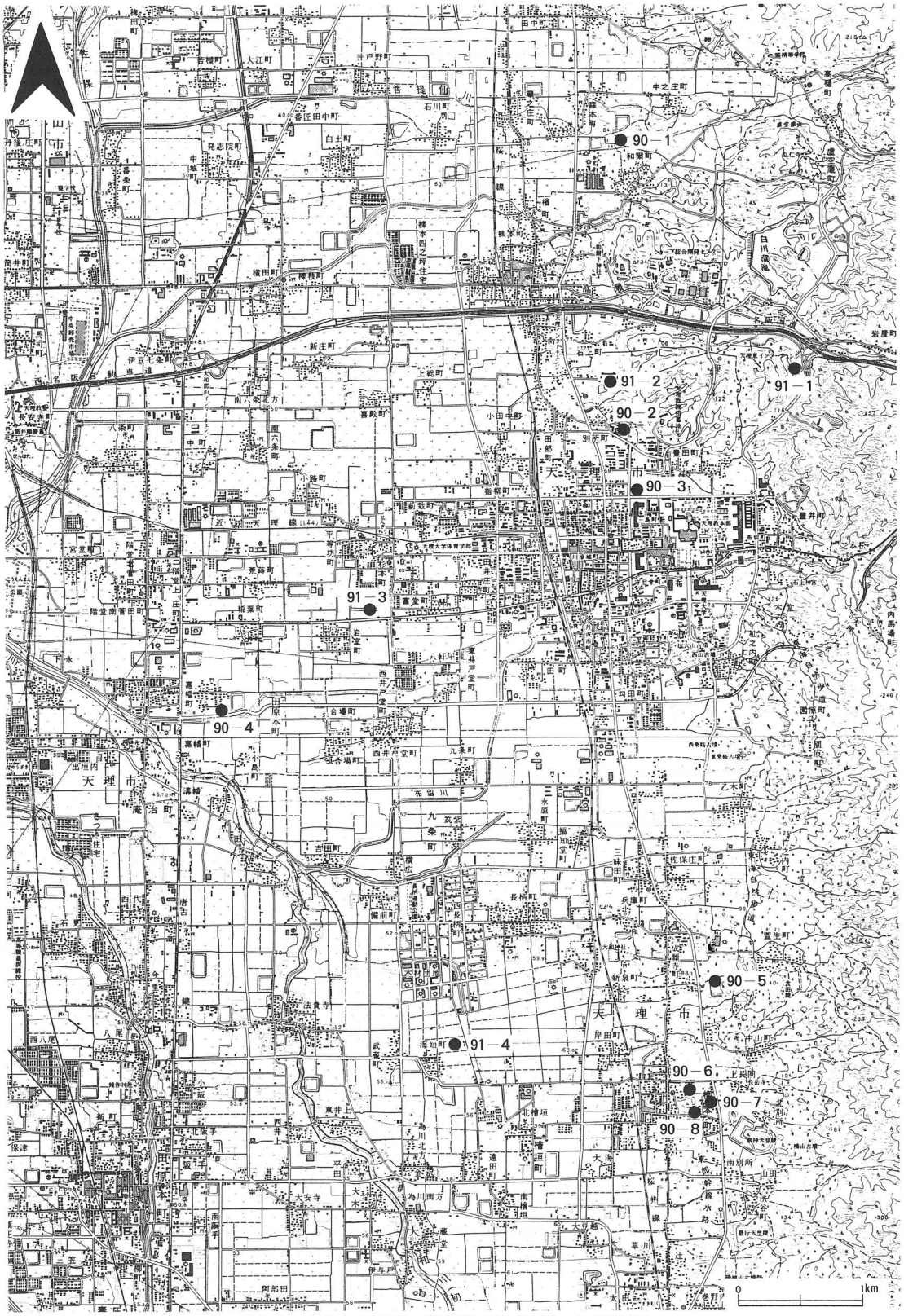
目　　次

平成2年度（1990）

1. 寺　山　遺　跡 …… （松本）… 1
2. 塚　山　古　墳 …… （ 泉 ）… 7
3. 布　留　遺　跡 …… （ 泉 ）…11
4. 嘉　幡　古　墳 …… （青木）…21
5. 下池山古墳外堤 …… （青木）…31
6. 柳本遺跡群竹ノ尻地点 …… （青木）…37
7. 柳本遺跡群べべノ木地点 …… （ 泉 ）…39
8. 柳本藩邸遺跡（第5次） …… （松本）…43

平成3年度（1991）

1. 石上・豊田古墳群狐ケ尾6・7号墳 …… （ 泉 ）…45
2. 別　所　遺　跡（第2次） …… （ 泉 ）…51
3. 平等坊・岩室遺跡（第8～10次試掘） …… （青木）…53
4. 海　知　遺　跡 …… （松本）…55



平成２年度、３年度　遺跡調査地点（S＝1／50000）

平成2年度
(1990年)

寺山遺跡（第５次）――森本・和爾・中ノ庄町

Ⅰ　はじめに

(1) 遺跡の位置

天理市の北部に位置する寺山古墳群は、森本・和爾・中ノ庄町にかけて所在する遺跡である。同遺跡は、奈良盆地の東山麓から連なる比高 20m ほどのなだらかな台地丘陵上の先端部にあり、北辺に菩提仙川、南側には楢川を隔て東大寺山丘陵が広がり、古墳時代前期の大型古墳群を形成した東大寺山古墳群が展開している。比高 30～60m で高くそびえ起伏の激しい東大寺山丘陵に比べ、寺山古墳群が所在する台地丘陵はなだらかな水田地帯が広がり谷筋の起伏も緩やかな地形をなしている。険しい地形に規制されながら展開した東大寺山古墳群に比べて、同一の尾根筋上に多数の古墳が密集するところは寺山古墳群の特徴といえる。

ところで、東大寺山丘陵の山麓（和爾下神社古墳）から西方に延びたなだらかな台地上には長寺遺跡が所在する。近年の調査では古墳時代中期を中心とする古墳群の存在が明らかになりつつある。特に長寺遺跡の場合、前期の大型古墳を主体とする東大寺山古墳群との関係が注目され同古墳群の展開を占う遺跡である。地形的な景観が寺山古墳群と類似し、その比較において興味深い資料である。

(2) 調査の契機と経過

寺山古墳群が所在する台地丘陵上で墓地造成の計画が起こり、昭和 57 年度に第 1 次調査として試掘を橿原考古学研究所がおこない。昭和 58 年度に第 2 次調査として同研究所が本調査を実施した。昭和 61 年度には墓地の拡張が計画され、第 3・4 次調査として天理市教育委員会が、さらに平成 2 年度には再び拡張計画が起こり、同市教委が第 5 次調査を実施したものである。

第 1・2 次調査についてはすでに概要報告がなされているが、市教委の調査についてはこれまで報告の機会が無く未報告のまま現在に至っている。そのため本概報では第 3・4・5 次調査を含めて、簡単ではあるが調査の内容を報告しておきたい。また、これまでの調査で検出した古墳について、その全体を図 2 と表 1 で示した。

Ⅱ　調査の概要

(1) 第 1・2 次調査

古墳時代中期の竪穴式住居 6 棟、中期後半の円墳 1 基（寺山 13 号墳）、後期の円墳 14 基・方墳 2 基・墳形が不明なもの 2 基、埴輪円筒棺 1 基、奈良時代の井戸 1 基、溝 2 条（調査区の南側には奈良時代の寺院跡推定地がある。）を調査で検出している。また、古墳の間を利用して中世墓が 9 基出土している。古墳はいずれも開墾から墳丘がすでに削平されており、現状では古墳の存在を認めることができなかった。調査ではかろうじて攪乱を免れた墳丘の基底部や石室の下部を確認したもの

図1　遺跡の位置図（S＝1／1000）

1. 上殿古墳（前期）　2. 野田古墳（後期）　3. 寺山30号墳　4. 和爾下神社古墳（前期）　5. 東大寺山古墳（前期）　6. 赤土山古墳（前期）　7. 東大寺山25号墳（前期）　8. 東大寺山26号墳　9. 櫟本墓山古墳（中期）
A. 寺山古墳群　B. 東大寺山古墳群　C. 東大寺山古墳群・シギ山支群　D. 東大寺山古墳群・高塚支群
E. 寺山古墳群・上殿支群　F. 寺山古墳群・野田支群　G. 寺山古墳群・寺ノ北支群

である。調査区の西半部が台地丘陵の先端に向かって傾斜を強めて行くのに対して、古墳が調査区の東半部に集中し、群集墳の形成が地形的な条件によっていることが推測される。

(2) 第3次調査

第1・2次調査地点の北側で谷筋を隔てて、寺山31号墳を検出したところである。墳丘は一段高い島畑で残っていたが石室とともに激しく削平を受けていた。石室に伴う積み石の抜き取り跡があり西向きに開口した横穴式石室の古墳と推測される。墳形はかろうじて残っていた基底部からおよそ径20mの円墳と思われ、開口部に面した西面の基底に幅2m、長さ1mの造り出しを区画していた。また、残っていた周濠部からV期の埴輪片が出土し、石見型の盾形埴輪片も見られる。時期は後期前半。第1・2次調査で出土した小型の墳丘をもつ古墳やその群集は、同地点で認められなかった。

(3) 第4次調査

第1・2次調査地点の東側に接して22号墳から29号墳を検出した地点である。第3次調査地点とは対照的で、古墳が群集し第1・2次調査で検出した群集墳の続きである。径16mの円墳をもつ26号墳はすでに積み石を抜き取られていたが、床面を偏平な石敷で築き南向きに開口した横穴式石室である。床面の石敷から須恵器、土師器、馬具類の部品が出土している。後期後半から終末期の古墳と思われる。また中世の段階には同古墳の開口部を墓地に利用していた可能性がある。他に径5〜8mの小型の墳丘をもつ古墳が目立つ。22・23号墳は一部を検出しただけで内容が定かでない。24号墳は径8mの小円墳で、北西・南東方向に主軸をもつ全長2.2m、幅0.9mの竪穴式石室をもち金環2個と須恵器坏が出土している。時期は後期後半と思われる。25号墳は、径5mの小円墳で東西方向の主軸をもつ全長1.8m、幅0.6mの竪穴式石室で、石室内から須恵器坏、土師器坏が出土している。時期は後期中葉と思われる。27号墳は径7mの小円墳で、東西に主軸をもつ2基の石室がある。北・主体部は全長2.5m、幅0.6mの横穴式石室で、須恵器蓋が出土している。南・主体部は攪乱が激しく、石室の規模は定かでないが、全長2mほどの竪穴式石室と思われる。28号墳は攪乱が激しく、かろうじて墳丘と石室が残っていた。径8.5mの小円墳で西向き開口の横穴式石室と思われる。29号墳は、南東方向に開口した横穴式石室をもつ径8mの円墳で、全長2.5m、幅1.1mの石室である。石室内から土師器坏・壺、小刀1振り、鉄鏃1本が出土している。時期は後期後半と思われる。

ところで、22・23号墳と24〜28号墳の間、24〜28号墳と29号墳との間で南北に延びる落ち込みが認められた。地形的な落ち込みと考えられる。他に、墳丘の間を利用して中世墓8基を検出し、白磁椀1個、青磁椀2個、瓦器1個がそれぞれ4基の墓壙から1個体ずつ出土している。

(4) 第5次調査

第3次調査区の東側で検出した32・33号墳、第4次調査区の東側で検出した30号墳が、第5次調査で調査した古墳である。30号墳は全長がおよそ30mの前方後円墳で、調査では後円部の北半部から前方部にかけて検出した。墳丘はすでに開墾によって激しく削平をうけ基底部を残すのみで

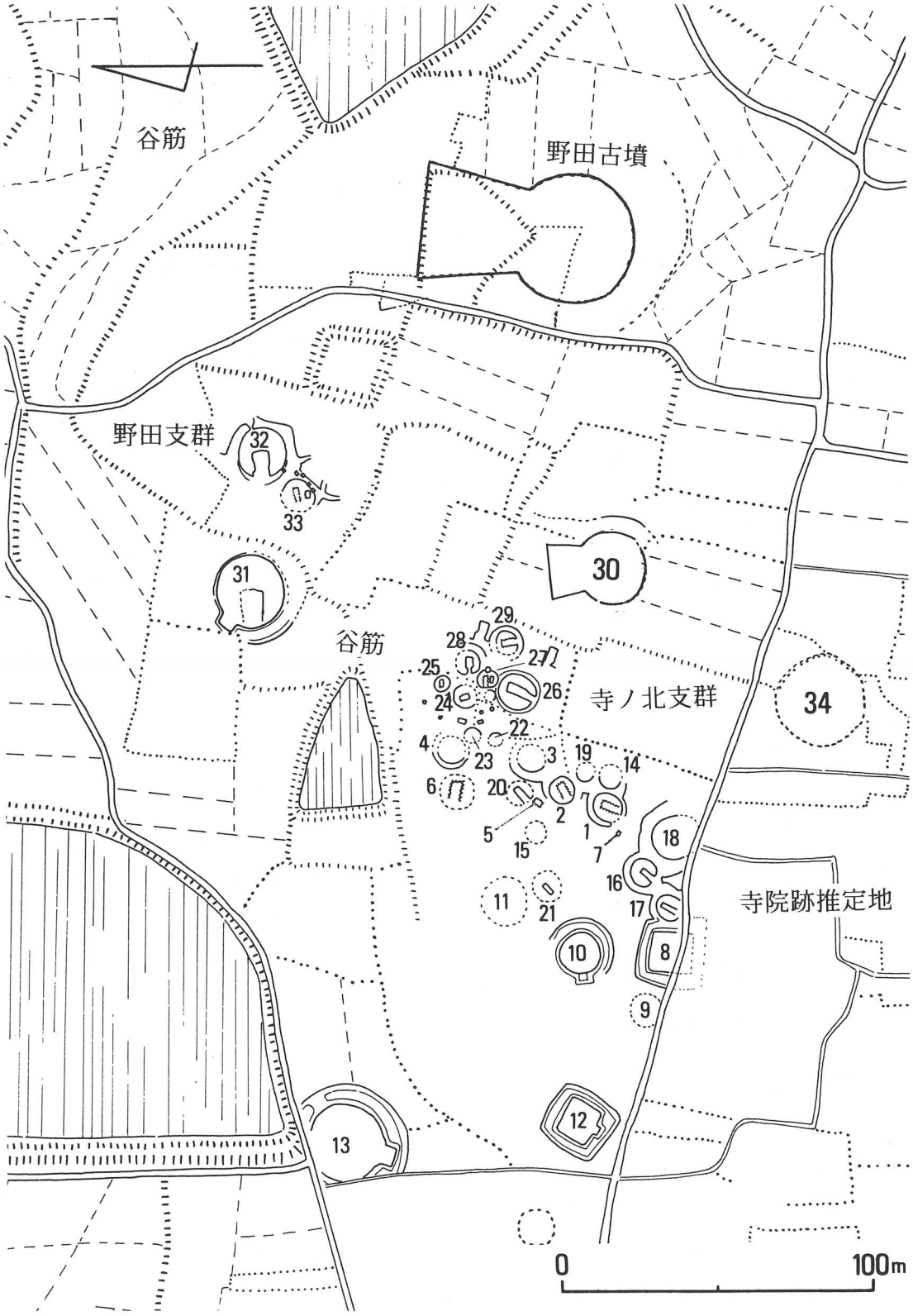


図２　寺山古墳群の古墳位置図（S＝1／2000）　※数字は古墳番号を表す。

支群	図番号	古墳名	時期（埴輪）	墳形（規模）	埋葬施設（規模）	出土遺物・備考	調査次数	調査年度
寺ノ北支群	1	寺山1号墳	後～終末期（無）	円墳（径約10m）	横穴式石室（全長8.1m、幅4m）	6c中頃～7c初頭の須恵器	1・2次	昭和57・58年度
	2	〃 2号墳	後期（〃）	〃（径 8.8m）	〃 石敷（全長3.1m）	6c中頃の須恵器坏身1・金環2		
	3	〃 3号墳	（〃）	〃（径 10m）				
	4	〃 4号墳	（〃）	〃（径 8m）				
	5	〃 5号墳	（〃）	不明	小石室（全長1.5m、幅0.8m）	無し		
	6	〃 6号墳	後期（無）	円墳（径10m）	横穴式石室（全長5.2m、幅2m）	6c中頃須恵器高坏・金環2・刀1		
	7	〃 7号墳	後期（V）	埴輪棺	埴輪棺（1本）			
	8	〃 8号墳	（無）	方墳（一辺12m）		17号墳に周濠が切られている		
	9	〃 9号墳	（〃）	〃		周濠から土師器出土		
	10	〃 10号墳	後期（V）	円墳・造り出し（径15m）		周濠から埴輪、須恵器、土師器、ガラス管玉が出土		
	11	〃 11号墳	後期（無）		組み合せ木棺直葬｛2棺並葬｝	1号棺から5c末～6c初土師器・鉇1		
	12	〃 12号墳	後期（V）	方墳・造り出し（一辺10m）	粘土木郭の可能性あり	周濠から須恵器、土師器、円筒、埴輪、形象埴輪出土		
	13	〃 13号墳	中期（IV）	円墳・造り出し（径20m）	陪葬墓・配石木棺墓	陪葬墓から刀1		
	14	〃 14号墳	（無）	円墳（径9m）				
	15	〃 15号墳		墳丘状の高まり（径9m）				
	16	〃 16号墳	（無）	円墳（径10m）	横穴式石室（掘り方、全長3.5m）			
	17	〃 17号墳	後期（〃）	〃（〃）	〃（掘り方、全長 3m）	須恵器片・銀環2		
	18	〃 18号墳	〃（V）	〃（径12m）		周濠から埴輪		
	19	〃 19号墳	（無）	〃（径7m）				
	20	〃 20号墳			横穴式石室（全長10m）			
	21	〃 21号墳	（無）	円墳（径10m）	木棺直葬（長さ10m、幅0.6m）	棺内から管玉12、刀子1、棺外から須恵器		
	22	〃 22号墳	（〃）	〃（径 7m）			4次	昭和61年度
	23	〃 23号墳	（〃）	〃（〃）				
	24	〃 24号墳	後期（〃）	円墳（径8 m）	竪穴式石室（全長2.2m、幅0.9m）	石室内から須恵器、金環2		
	25	〃 25号墳	後期（〃）	〃（径5 m）	〃（全長1.8m、幅0.6m）	石室内から須恵器、土師器坏		
	26	〃 26号墳	後～終末期（〃）	〃（径14.5m）	横穴式石室（全長 6m、幅 2m）	石室内から須恵器、土師器、馬具類片出土		
	27	〃 27号墳	後期（〃）	〃（径7 m）	横穴式石室（全長2.4m、幅0.6m） 小石室（全長2m）	横穴から須恵器出土		
	28	〃 28号墳	〃（〃）	〃（径8.5m）	横穴式石室	須恵器出土		
	29	〃 29号墳	〃（〃）	〃（径8 m）	〃（全長2.5m、幅1.1m）	土師器坏、壺、刀1、鉄鏃1		
	30	〃 30号墳	〃（V）	前方後円墳（全長30m）		周濠から円筒、形象、埴輪出土	5次	
野田支群	31	〃 31号墳	〃（V）	円墳・造り出し（径20m）	横穴式石室	周濠から埴輪	3次	
	32	〃 32号墳	〃（無）	円墳（径17m）	〃	須恵器片出土	5次	平成2年度
	33	〃 33号墳	〃（〃）	円墳（径11m）	横穴式石室（全長4.4m、幅0.9m） 小石室（全長1.3m、幅0.6m）	横穴式石室から須恵器、鉄鏃2、管玉1、小石室掘り方から須恵器甕1		
	34	〃 34号墳		円墳（径20m）				
		野田古墳	〃（V）	前方後円墳（全長51m）	横穴式石室	周濠ら円筒・形象埴輪		

表1　第1～5次調査の古墳

あった。北西方向に前方部を向ける古墳で、くびれ部付近から多量のⅤ期の埴輪が出土している。破片には動物などの形象埴輪も含まれる。30号墳を境に尾根筋の先端部側（西側）で古墳が群集し、逆に山側（東側）には同古墳群で最大の野田古墳まで古墳の痕跡が認められない。30号墳とは尾根筋を違えて所在する32・33号墳は31号墳に近接している。32号墳は径17mの円墳で、すでに墳丘と石室は削平されていた。しかし石室を破壊した際の石材が散乱し、また積み石の抜き取り跡が認められ、西向きに開口した横穴式石室であった可能性が強い。石室の跡から須恵器の破片が出土している。31号墳のように埴輪は伴わない。時期は後期後半。33号墳は径11mの円墳で東西に主軸をもつ石室2基が平行して並ぶ。北・主体部は西向きに開口した横穴式石室で全長4.4m、幅0.9mあり、石室の床面から割竹形木棺の痕跡を検出している。木棺に伴って須恵器杯、壺、鉄鏃2本、管玉1個が出土している。南・主体部は全長1.3m、幅0.6mの小竪穴石室で、須恵器甕の破片が多量に出土している。時期は後期後半。または野田古墳の周濠の一部も検出している。遺構は前方部先端を示す周濠の北西コーナを検出し、野田古墳が前方部を北向きにおいた前方後円墳であることを確認した。後円部は高圧線の鉄柱工事によってすでに失われているが、横穴式石室の存在が地元の方々から指摘され、墳頂部からも馬形埴輪の出土が指摘されている。周濠内からⅤ期の埴輪片が多量に出土し、動物や楯形など形象埴輪も含まれる。時期は後期後半。中世墓は7基検出している。その内、4基の墓壙では白磁椀と青磁椀が2個出土、青磁椀1個が出土、13世紀後半の土師皿2個が出土したもの、短刀が出土したものがある。

Ⅲ　ま　と　め

第1・2次調査から第5次調査を総括して古墳時代中期の竪穴住居6棟、中期後半から後期～終末期の古墳33基、奈良時代の井戸2基・溝2本、中世の墓24基を検出した。特に古墳群は野田古墳を盟主墳として南北の尾根筋に別れて支群を形成し、南の尾根筋に30号墳と34号墳が主となる寺ノ北支群（1号墳～30号墳）、北の尾根筋に31号墳を主とする野田支群（31・32・33号墳）が立地している。ところで、野田古墳の東には谷筋を隔てて上殿古墳が立地した上殿支群の尾根筋があり、(図2)、同尾根筋の先端に径20mの円墳も見られる。中期の13号墳を含めて前期から中期にかけての古墳は径20m前後の円墳を主体に数箇所の尾根筋に別れて古墳を立地させ、広範囲に古墳群を展開させている。それに対して野田古墳を盟主とする後期～終末期の古墳は支群形成をおこないながらも局地的な群集をなし、前・中期の古墳とは立地の様相が違う。第1・2次調査地点の南側には奈良時代の寺院跡が推定されている。寺域については定かではないが、第2次調査で出土した井戸は寺院に伴う遺構である可能性が強い。寺域の形成が古墳群とどのような関係をなすのか興味深い。また多くの中世墓を検出している。総括して白磁椀6個、青磁椀5個、土師皿3個、瓦器1個、ガラス小玉、刀子2本、短刀1本が出土している。本概要では中世墓について十分な説明ができなかったが、その具体的な内容については報告書で明らかにしたい。

塚山古墳――別所町

Ⅰ　調査の契機と経過

当古墳の調査は、市立山の辺小学校の校舎増改築に伴う事前調査である。

塚山古墳は現在全くその姿を留めていないが、大正２年発行の『山辺郡誌』中巻には、「塚山民有原野ニシテ南北二十間東西二十七間アリ東南北ハ池ヲ以テ周ラシ北ハ人家ニ接シ西ハ耕地ナリ四十五六年前開墾ノ際百四五十貫の石十三個提出セリト云フ」とある。山辺郡誌の編纂当時は前方後円墳との認識は無かったようであるが、東西約 49m、南北 36m の規模をもち、周囲は池状になっていた状況が判明する。昭和 52 年発行の天理市史別冊古墳墓一覧では南東から北西に主軸をもつ前方後円墳が復元図として描かれているのである。

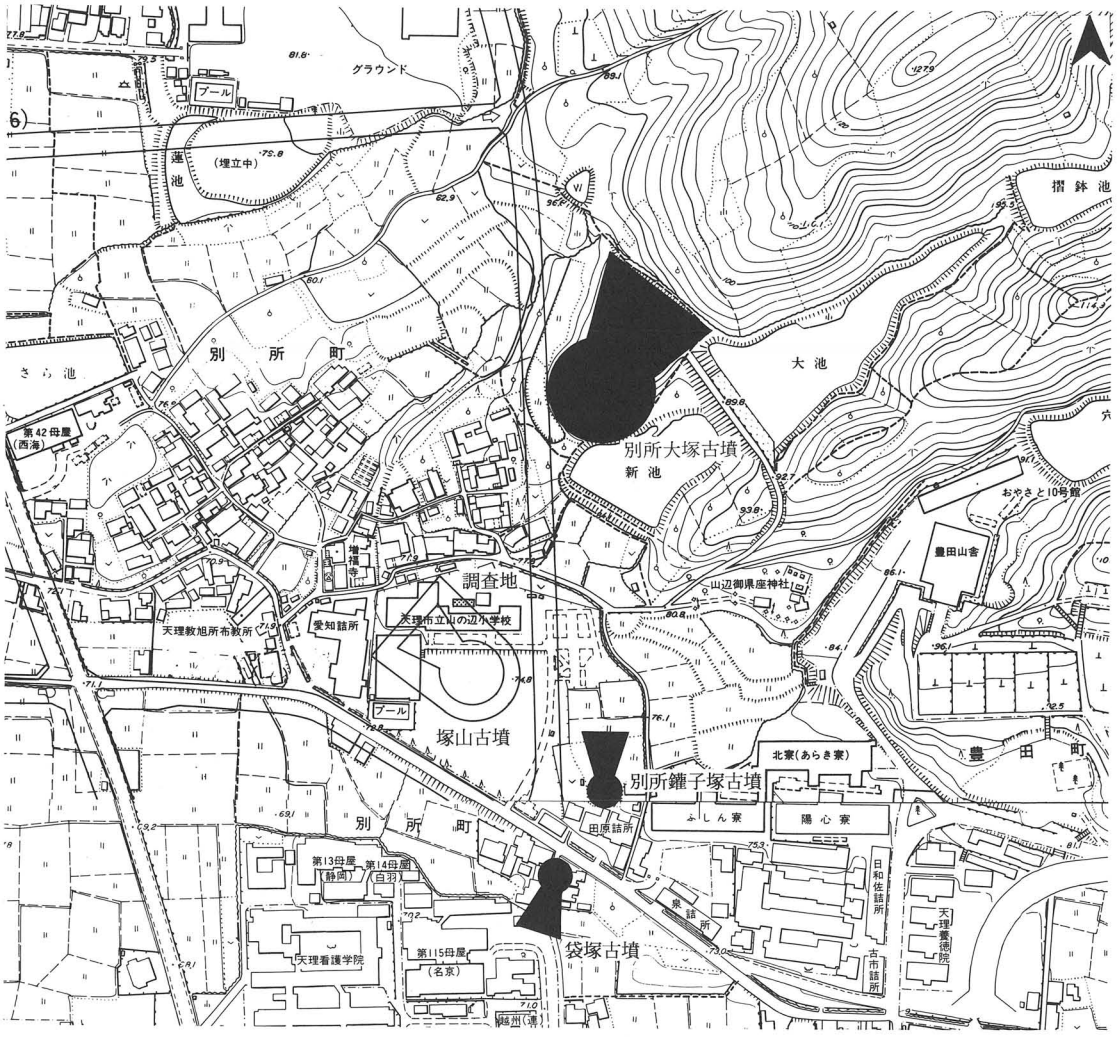


図１　塚山古墳調査地と周辺部の古墳分布図（S＝1／5000）

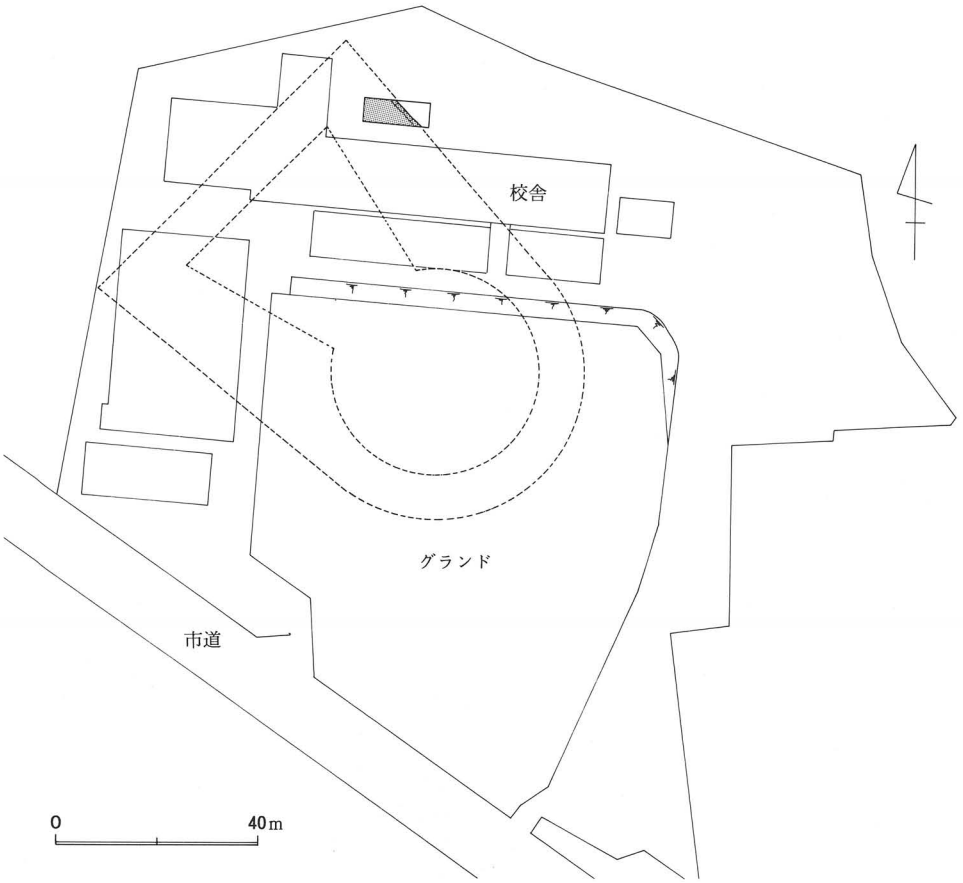


図２　塚山古墳調査遺構と推定復原図（S＝1／500）

以上のような文献史料によっても古墳の存在していたことは確実なため、事前調査を実施したわけである。調査は校舎の北側に当たり、東西 13m、南北 5m、面積にして 65㎡のトレンチを設定した。そして平成２年５月 22 日に調査を開始し、６月８日に終了した。

Ⅱ　歴史的環境

この地域は天理市街地の北にある豊田山丘陵の一角である。市立山の辺小学校の北側には、丘陵が南西に延びてきた端部に最大の別所大塚墳古墳がある。全長 115m で前方部幅約 90m、高さ 8m、後円部径 75m、高さ 15m の前方後円墳である。後円部を南西方向に向けて、西側には周濠跡も確認されるが東側は新池があり不明である。内部主体は横穴式石室であったが、石材はすべて持ち出され、大きな盗掘口が開口している。

また、塚山古墳の東側に隣接して、南北に主軸をもつ前方後円墳の別所鏟子塚古墳がある。墳丘規模は全長 47m、後円部径 22m、高さ 4.5m である。周濠の痕跡も認められる。そしてこの南には完全に破壊されていたが、昭和 60 年の調査により、後円部を北に向けた前方後円墳である別所袋塚古

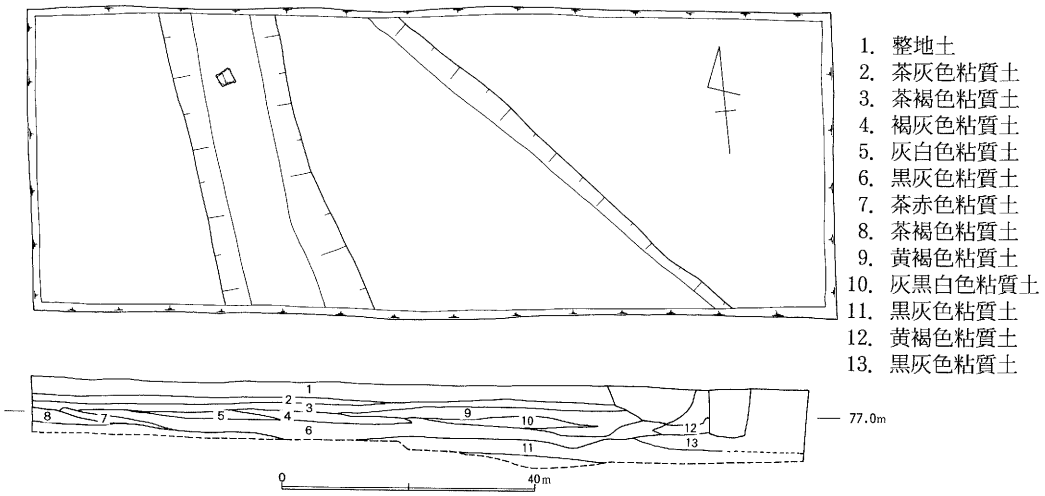


図３　検出遺構－濠外肩部－と南面土層図（S＝1／40）

墳を検出した。全長約 50m、後円部径約 12m と前方部の細長い型式である。周濠部も検出され、この内より、円筒埴輪、盾形埴輪、家形埴輪などが出土した。そして築造時期は 6 世紀前半頃と推定されている。

以上のようにこの地域には 50～120m の後期の中型の前方後円墳が 4 基集中して築造されていることが判明したのである。

Ⅲ　調査の概要

校舎の北側に東西 13m、幅 5m のトレンチを設定した。表土下より約 30㎝は学校建築のための整地土であるが、約 50㎝下部で周濠の肩部と地山面を検出することができた。

南側では、トレンチ東端から約 2m の地点で肩部を検出し、北側では東端から 6.9m で肩部を検出した。肩部は西側への落ち込みの法面である所から濠外側のラインであることが確認された。肩の検出方向は西へ約 45 度偏している。延長は約 7m 分にすぎない。深さは、肩部で約 17㎝であるが、中央部では約 46㎝である。そして中央付近には幅 1.7m、深さ 10㎝の溝状遺構が検出された。この溝自体は肩方向とは一致していないが、同一時期のものと考えられる。

トレンチ西側は暗渠排水工事により、遺構は破壊されていた。

溝内の堆積状況は黒灰色粘質土（6・11）によって覆われている。遺物は濠底にやや大きい円筒埴輪が 1 点出土したが、他はすべて小破片であり、量も少ない。

円筒埴輪 1 は口縁部径約 27.5㎝あり、突帯までの間隔は 10㎝である。口縁部は角頭形でやや外方へ開く。突帯は幅 1.3㎝あり突出度もしっかりしている。外面調整は横ハケであり 4㎝程度の間隔の断続ハケが認められる。内面は口縁部付近に横方向のハケが認められるものの内部はナデによる仕上げである。円形透しも部分的に見られる。

円筒埴輪2は、口縁部径は29㎝あり、口縁部は外上方へひろがり気味である。厚みは1㎝以上あり、突帯までの間隔は約8㎝である。突帯は下方気味であるが突出度はある。外面調整は突帯付近に縦ハケがあるが口縁部はナデにより消されている。突帯の下部は横ハケであるが、断続ナデであるかは不明である。

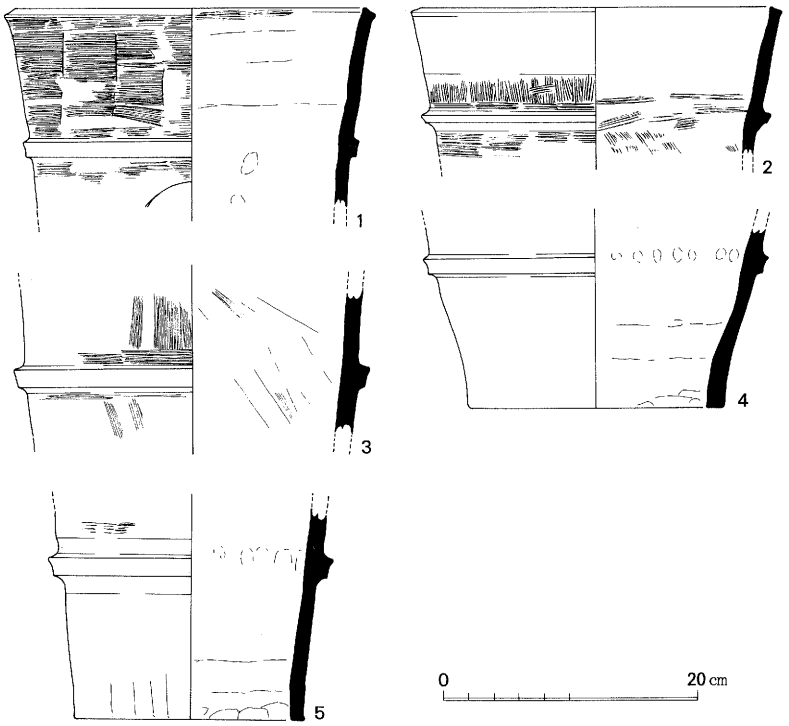


図4　濠内出土埴輪（S＝1／6）

円筒埴輪4は、底部から第1段の突帯の資料である。底径は約20㎝あり、第1段突帯までは10.5㎝の間隔があいている。外面調整は右下がりのややゆるいケズリ調整が施されている。

円筒埴輪5は、4と同様底部の資料である。底径は約18㎝である。4が第1段突帯近くでゆるく屈曲するのに対し、外上方に直立気味のつくりである。外面調整はケズリの後にナデ調整によって消されている。第1段突帯までは約11㎝の間隔がある。2段目の調整は横方向のハケ調整が部分的に残存している。

以上のように実測の可能な資料は5個体にすぎない。また円筒埴輪以外には出土していない。

Ⅳ　ま　と　め

以上今回の調査は小面積であったが、塚山古墳の周濠肩部を検出することができた意義は大きい。古墳の主軸方向は、天理市史別冊で示された方向とよく一致し、北西から南東方向に主軸があることが確認された。ただ、濠幅など古墳の完全な復元を行うための数値は得られておらず、今後の課題である。グランド部分は破壊されているであろうが、校舎部分には埋没している可能性が強いようである。また、出土した埴輪は、外面横ハケを基本とするところから、5世紀後半に比定され、袋塚古墳に先行することは明らかであろう。

布留遺跡――別所町

Ⅰ　調査の契機と経過

本市教育委員会は、宗教法人天理教教会本部より届出のあった天理市別所町１番地に所在する布留遺跡の取り扱いについて、埋蔵文化財天理教調査団より発掘調査に関する依頼を受けた。

このため、両者の協議により当該地の試掘により、遺構と遺物の確認を行い、その成果によって本調査を行うという方法が決定された。

調査対象面積は17.800㎡あり、７月５日に試掘結果を報告した。試掘面積は約2560㎡である。そして本調査地区を東側約2400㎡に決定され、同年12月12日にすべての調査を終えた。

Ⅱ　調査の概要

調査地は天理市街地の北側に位置し、都市計画道路北大路線と、同勾田・櫟本線の交差点の東北

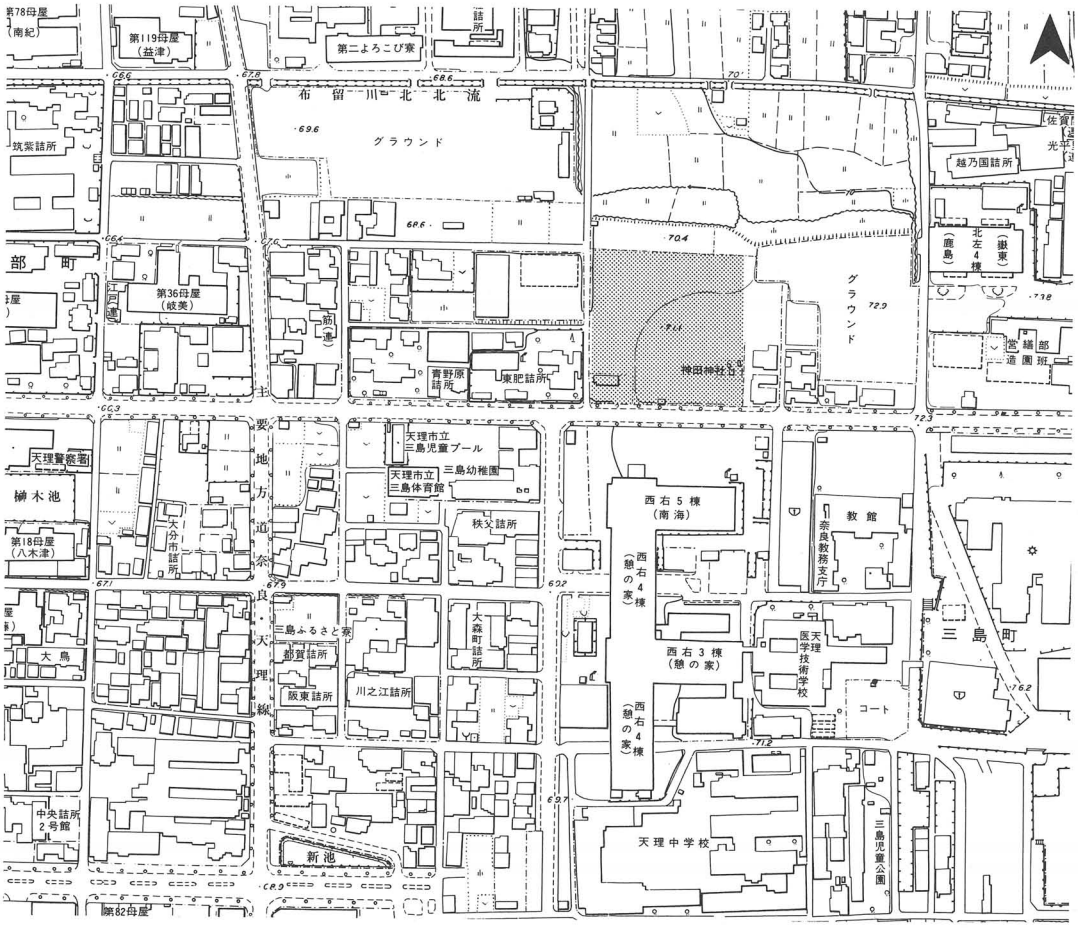


図１　布留遺跡三島地区調査位置図（S＝1／5000）

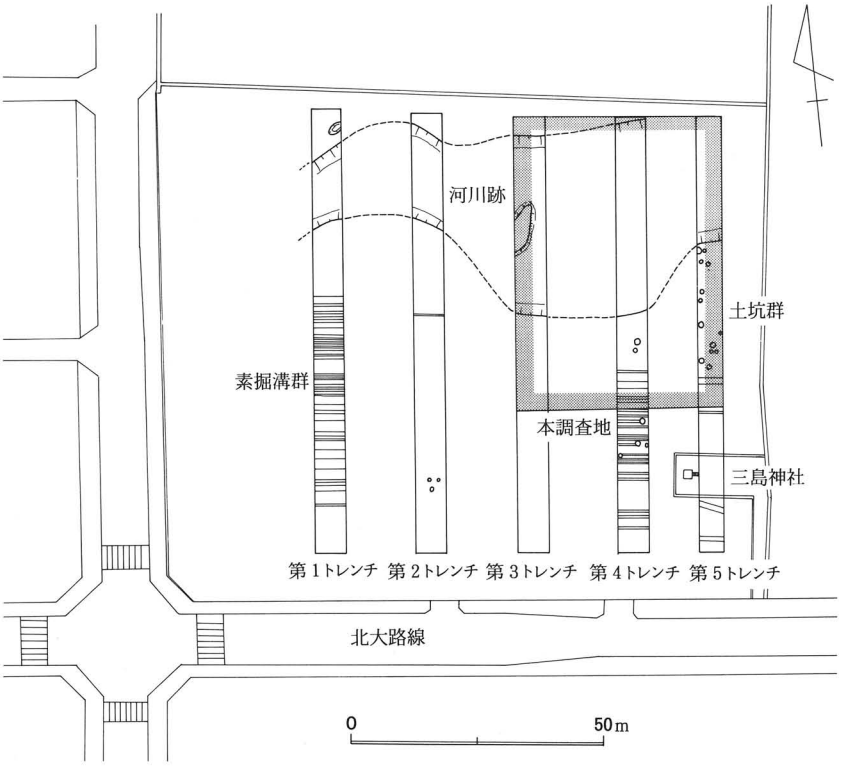


図2　布留遺跡試掘トレンチと本調査範囲　(S＝1／1500)

隅にあたる。発掘前は天理教の駐車場として使用されていた。また敷地内にあった神田神社はこの時石上神宮の西側へ移された。

調査区は、試掘調査トレンチのうちNo.3・4・5にまたがる東西40m、南北60mである。この地区は試掘で検出した古墳時代の流路と、土坑群がひろがっているものと予想された。そして調査区の中央部に南北方向のあぜを残して、西側1区、東側を2区として1区より調査を行った。

調査区の土層は、現地表面から遺構検出面まで約1.5mあるが、大半が整地層であり、耕作土を取り除くと遺構面が露出するという本来的には浅いことが判明した。

そして基本層序は、床土下部は茶褐色砂質土があり、これにはNo.4トレンチでは若干土器、サヌカイト片を包含している。この下部は黄褐色粘質土、砂礫土となりこれは地山層と推定される。遺構面は黄褐色粘質土を基盤として形成されている。

遺構

河川跡（SD1・SD2）：調査区の中央部を大きく蛇行しながら、東から西へ流路をつくっている。中央あぜ付近から1区にかけては、流路の中程に中洲を形成したことが判明した。そして1区西端では2本に分流するようである（北流をSD1、南流をSD2とする）。

2区東端での流路は南北幅は約24m、深さ1mである。中央部底は水流による凹凸が激しく、豊富な流水のあったことが知られる。そして1・2区ともに流れのやや遅い所には木杭による柵（しが

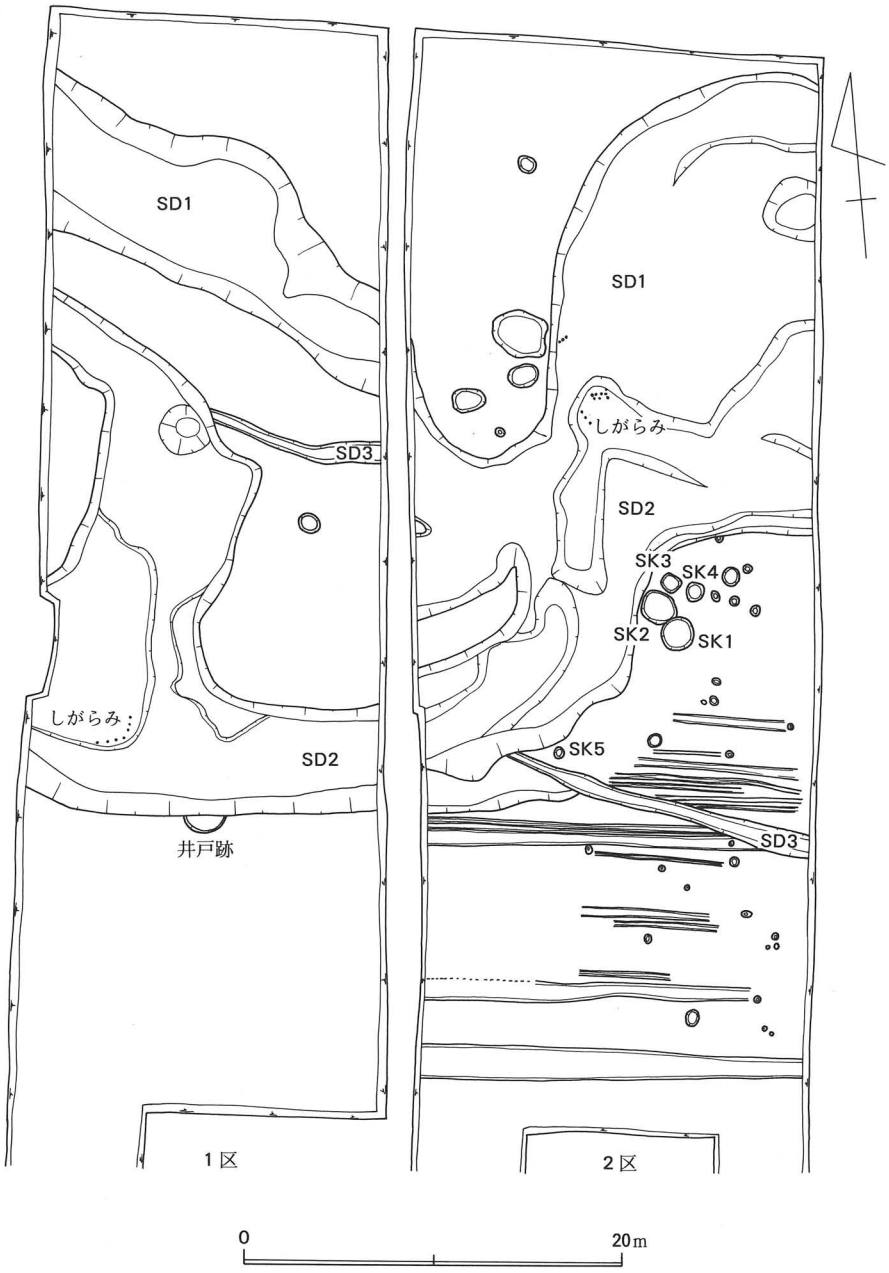


図3　1・2区遺構平面図（S＝1／400）

らみ）を各々1ケ所検出した。

SD1は西端での規模は幅15m、深さ1.6mあり上層は茶褐色粘質土で布留式土器を多量に包含している。中層では約80㎝の堆積があり、有機質を多く含む。土器は少量であるが、木製品が出土する。下層は10～30㎝の砂礫層である。ここにおいても布留式土器が少量認められ、また弥生土器、縄文土器、石器などが出土した。

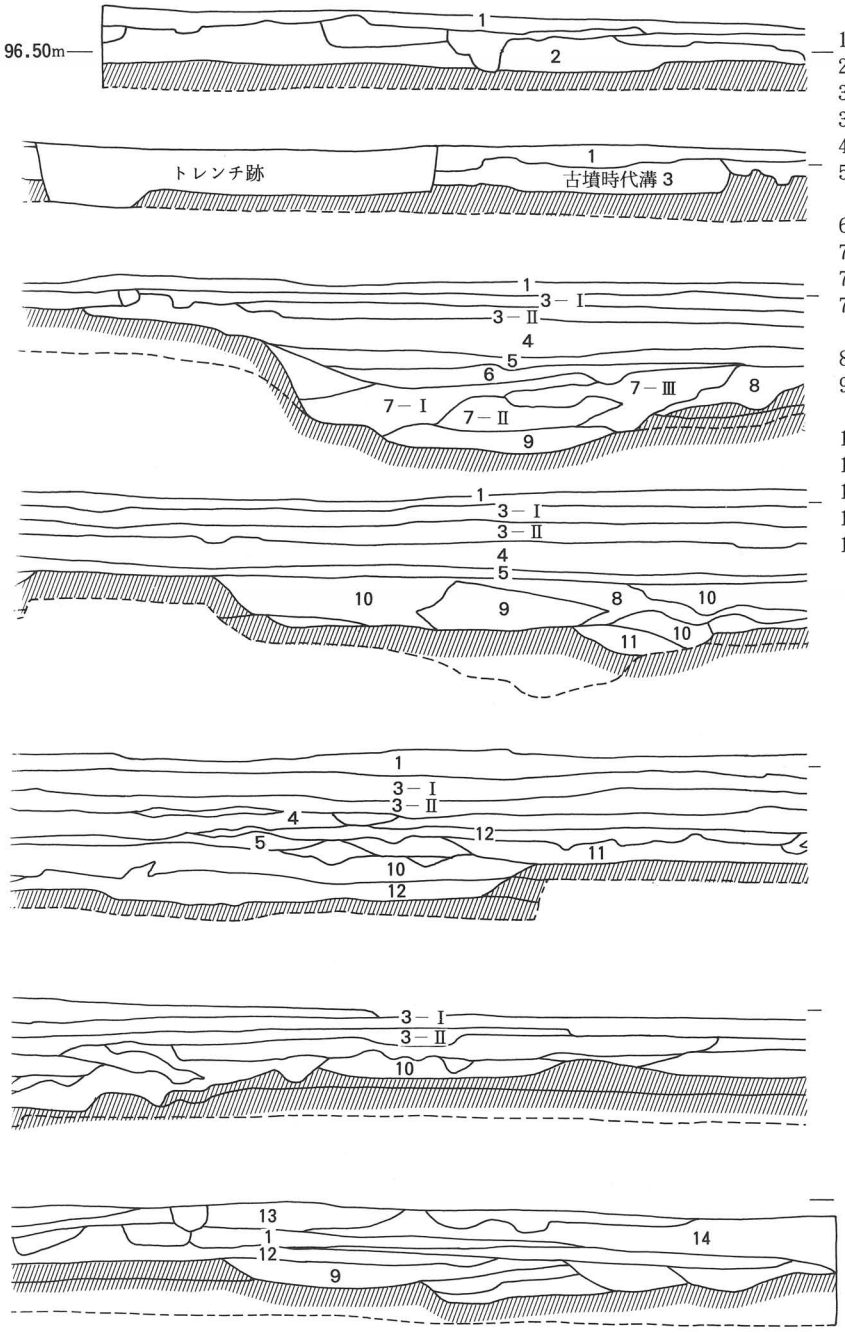


図４　中央あぜ西壁土層図（S ＝ $\frac{1}{40}$）

SD2 は SD1 と基本的には同じ流れである。SD3 は２区で検出した。幅 1.4m、深さ 30㎝あり西北部で SD1 に切られているが古墳時代の溝である。

土坑：主として２区の SD1 の南岸から南にかけて検出された。10 基以上あるが、遺物を出土し

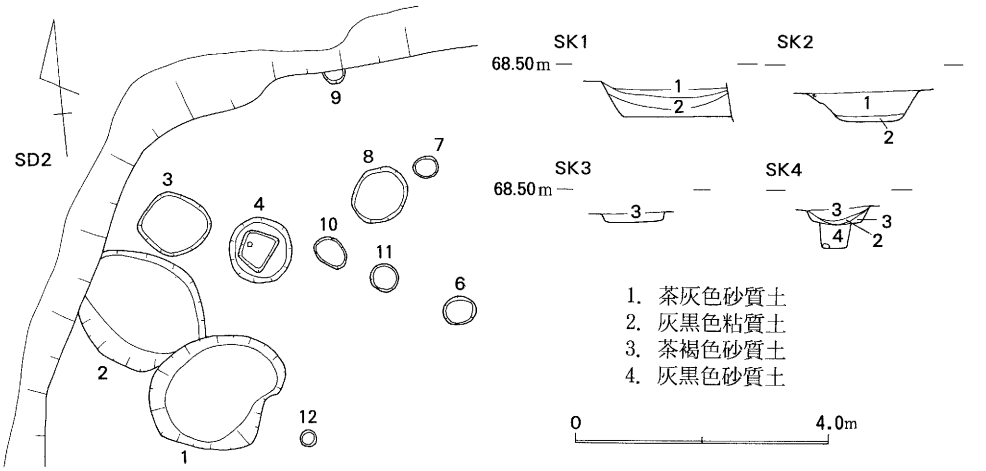


図5　SD2 南岸検出の井戸・土坑

た土坑は5か所である。一部 SD1 を切っており、埋没後まもなく掘られた土坑である。直径は 1.7m から 30cm程度の小形のものまである。

井戸跡：1区 SD2 の南岸において検出した。SD2 の岸部を検出する際に掘り方を破壊したが、井戸枠は完存している。井戸枠は一木を刳り抜いたもので、底部径約 1m、厚みは 20cm以上である。上部は腐食が激しいが底部は直接砂層に達している。土器は出土せず時期を決定しがたいが、古墳時代から奈良時代に多く見られる井戸枠の造り方である。

この他2区において雨上がりの後に碧玉、グリーンタフ、滑石などのチップ、碧玉製管玉、滑石製臼玉などが採集された。このためこの部分を精査したものの玉作工房に関わるような遺構は検出できなかった。

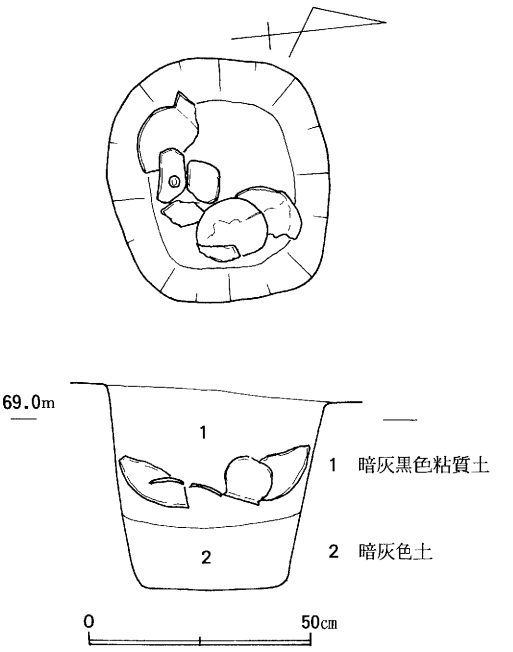


図6　土坑5遺物出土状況

また同地区を一辺 5m の方形区画を 17 区設定して約 200 袋の土を採取してすべて水洗いした。この結果碧玉片 50、グリーンタフ片 36、滑石片 2 などが出土した。

出土遺物

土師器（小形丸底壷、高坏、鉢、甕など）、須恵器（蓋坏、壷、甕など）、玉製品（管玉 1、臼玉 5、未成品、石など 98 点）、石製品（石鏃 5、石包丁 2、スクレイパー 1）、木製品（鍬 1、棒状加工品 2、板状加工品）などである。土器類は一部実測図を載げたが、詳細については本報告に記述する予定である。

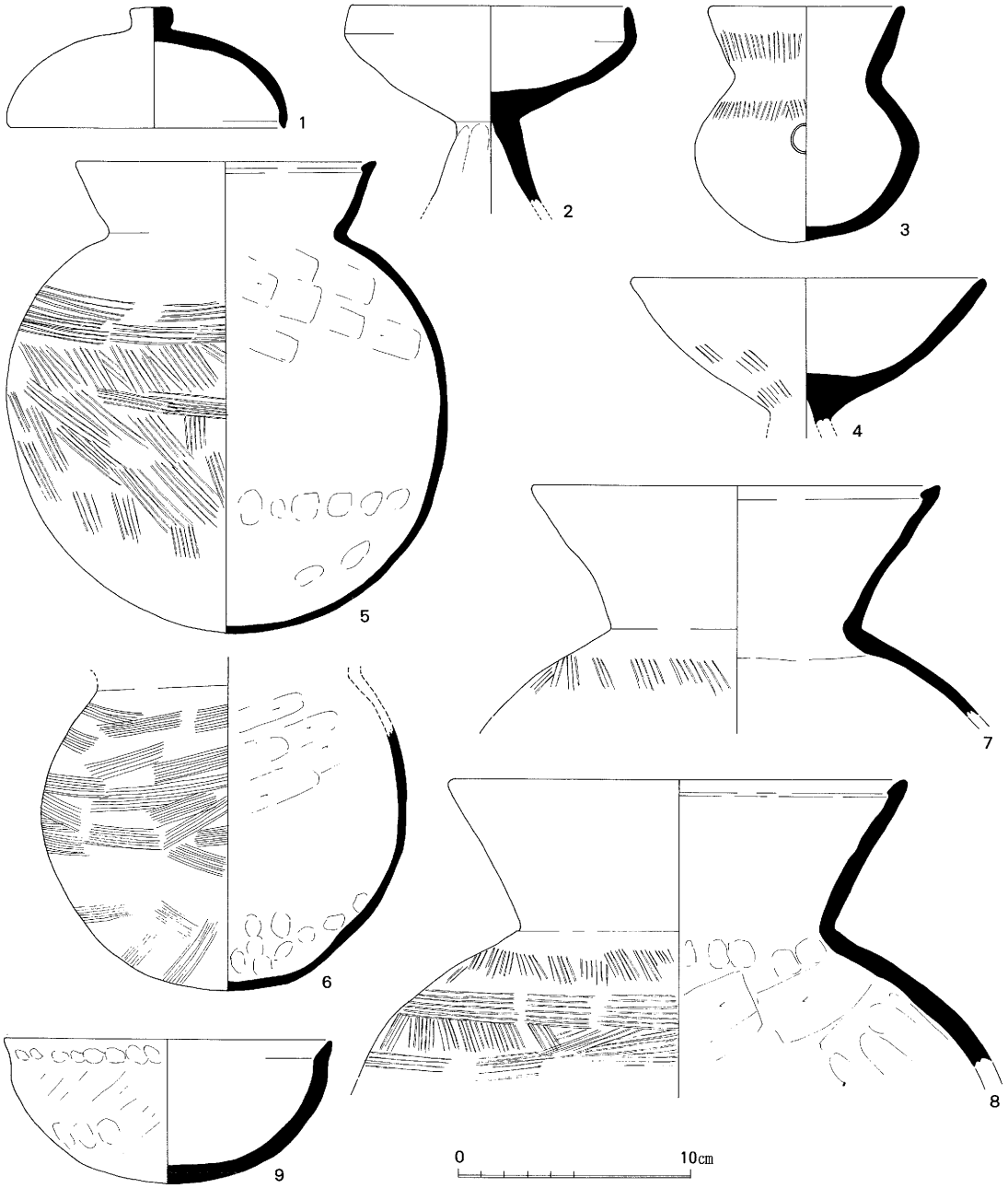


図7　土坑出土土器（SK1－1、2　SK4－3、4　SK5－5～8　SK7－9）（S＝1／3）

Ⅲ　ま　と　め

1. 今回の調査区においては、古墳時代中期から後期にかけて大きく蛇行する自然河川を検出した。中層の堆積が厚く、よどみになっていた期間が長かったことをうかがわせる。

2. 土坑群は2区に集中するが、まとまりはなく、調査区の東側が中心と考えられる。

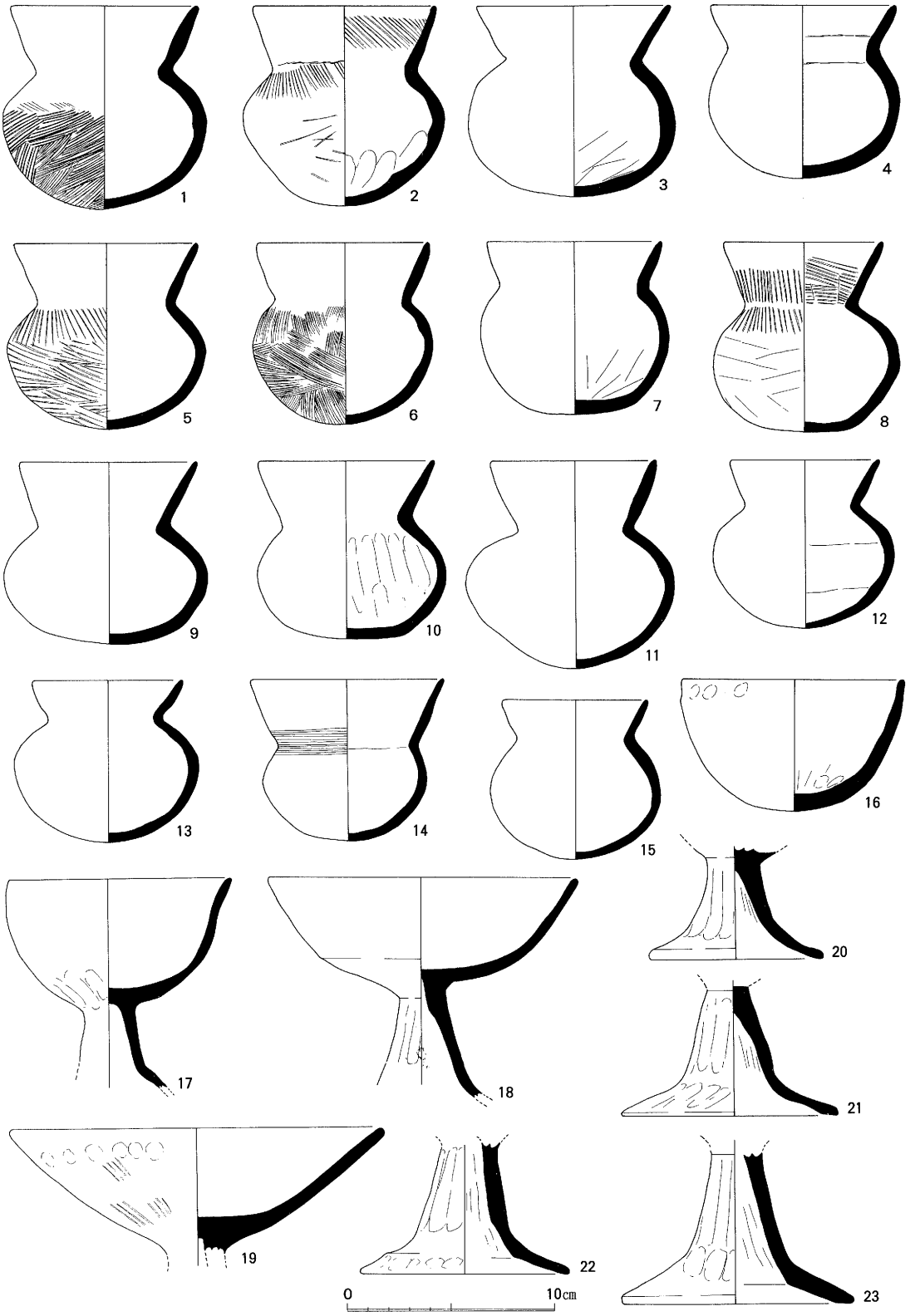


図8　自然河道出土土器（1）（S＝1／3）

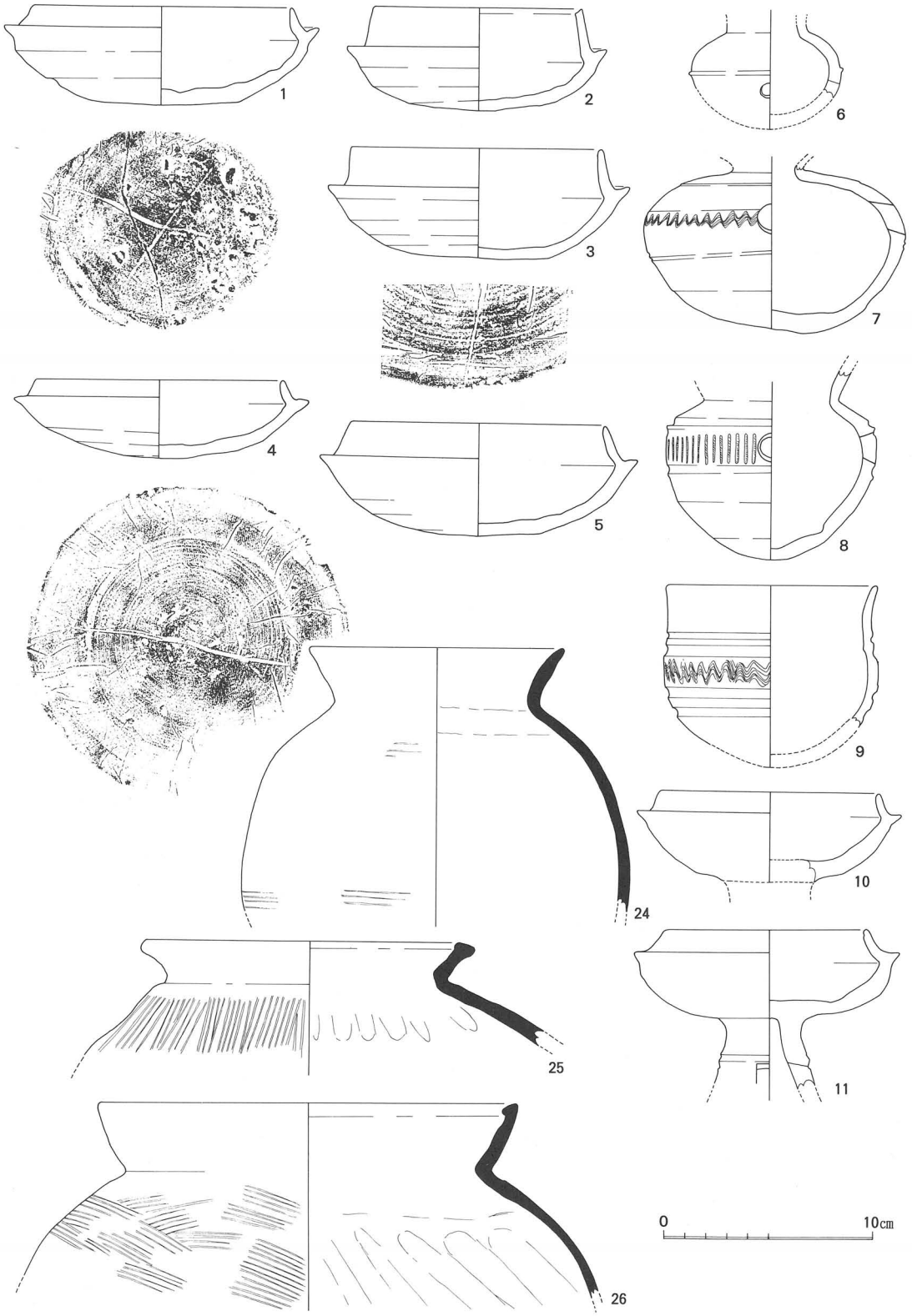


図9　自然河道出土土器（2）（S＝1／3）

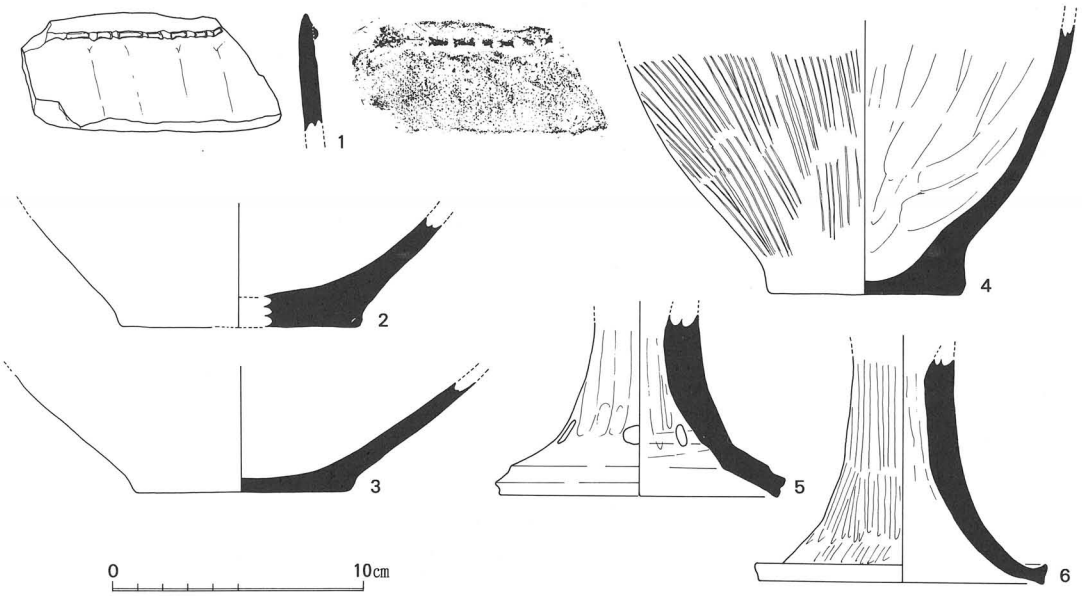


図10　自然河道出土土器（3）（S＝1／3）

3. 出土遺物の中には縄文時代前～中期の土器や石鏃あるいは弥生時代中期の土器が出土した。小破片で表面の摩擦が激しいため、上流の東方から流されたものであろう。

土器番号	器種	口径（cm）	胴部径（cm）	器高（cm）	外面調整 内面調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土
1	土師器 蓋	11.9	—	5.3	ナデ 〃	にぶい橙色 〃	良好	きめ細かい
2	高杯	12.0	—	8.5 （残高）	〃 〃	橙色 〃	〃	きめ細かいが細砂粒含む
3	小型 丸底壷	8.4	—	10.3	ハケ ナデ	〃 〃	〃	〃
4	高杯	15.6	—	6.2 （残高）	ハケ、ナデ ナデ	〃 〃	〃	〃
5	甕	13.0	—	20.5	ハケ ケズリ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	〃	〃
6	〃	—	15.7	13.6 （残高）	〃 ナデ、ケズリ	〃 にぶい橙色	〃	〃
7	〃	17.6	—	10.0 （残高）	ナデ ケズリ	にぶい赤褐色 橙色	〃	〃
8	〃	19.8	—	12.4 （残高）	ハケ ケズリ	明褐灰色 灰白色	〃	〃
9	鉢	14.0	—	6.0	ナデ 〃	にぶい赤褐色 〃	〃	〃

表1　土坑出土土器観察表

土師器

土器番号	器種	口径(cm)	胴部径(cm)	器高(cm)	外面調整 内面調整	外面色調 内面色調	焼成	胎土
1	小型 丸底壷	9.0	9.8	9.8	ハケ目・指ナデ 指ナデ	にぶい橙色～褐灰色 褐灰色	良好	きめ細かく、砂粒をほとんど含まず良い。
2	〃	8.9	9.7	9.6	——	にぶい黄橙色	〃	きめ細かいが、0.5㎜～1.5㎜大の石英・長石を含む。
3	〃	9.3	10.0	9.2	指ナデ，板小口 〃　〃	淡黄色	〃	きめ細かいが、少量の0.5～3.0㎜大の長石を含む。
4	〃	8.9	9.2	8.4	指ナデ 〃　底はりつけ有り	灰黄褐色	〃	きめ細かく砂粒をほとんど含まない。
5	〃	8.8	9.6	9.0	指ナデ・ハケ目 指ナデ	にぶい褐色	〃	〃
6	〃	8.3	8.7	8.8	ハケ目・指ナデ 指ナデ・ケズリ	にぶい黄褐色	〃	〃
7	〃	8.4	9.1	8.3	指ナデ 板小口　底はりつけ有り	にぶい黄褐色	〃	〃
8	〃	7.7	9.0	8.2	ハケ目・ケズリ 指ナデ・タタキ	にぶい褐色	〃	〃
9	〃	8.5	9.8	8.8	指ナデ 〃	淡黄色～灰白色	〃	きめ粗く、砂粒を多く含む。
10	〃	8.5	9.1	8.6	——	淡黄色	〃	きめ粗く、最大4.0㎜程度の長石などを含む。
11	〃	7.9	10.0	10.0	指ナデ	橙色	〃	きめ細かく、砂粒や石をほとんど含まない。
12	〃	7.1	8.8	8.1	指ナデ・ケズリ	にぶい橙色	〃	きめ粗く、最大20㎜大の長石を含む。
13	〃	7.2	8.9	7.8	指ナデ・ケズリ	橙色	〃	きめ細かく、少量の0.2㎜～2.0㎜大の長石や石英を含む。
14	〃	9.3	7.9	7.8	指ナデ・首部分はハケの後ナデ・ケズリ 指ナデ	にぶい橙色	〃	きめ細かく砂粒をほとんど含まない。
15	〃	7.0	8.2	7.7	指ナデ 指ナデ・下部ケズリ	明赤褐色	〃	きめ粗く、0.5～1.5㎜大の多量の長石や石英を含む。
16	鉢	10.6	—	6.4	指ナデ・横ナデ 〃指おさえの後横ナデ	橙色 にぶい橙色	〃	きめやや細かく0.5～7.0㎜大の長石や石英を多量に含む。
17	高杯	10.7	—	10.0	指ナデ・横ナデ 横ナデ・ナデ	にぶい橙色	〃	きめ細かく0.5～1.0㎜大の石英・長石を少量、黒雲母小片を少量含む。
18	〃	19.8	—	10.4	指ナデ・ヘラミガキ 横ナデ・横ナデ	にぶい橙色～橙色 にぶい橙色	〃	きめ細かく、石英0.5～1.0㎜、長石1.0～2.0㎜大を少量含む。
19	〃	18.2	—	6.1	ナデ・横ナデ・ハケ後ナデ・指おさえ ナデ・横ナデ	にぶい黄橙色	〃	きめやや粗く、混石多くて、石英0.5～3.0㎜、長石2.0～3.0㎜多量に含む。
20	〃	—	—	5.6 底径13.4	指ナデ・横ナデ 指ナデ・指おさえ後ナデ	赤褐色～にぶい橙色 淡橙色～にぶい橙色	〃	きめやや細かく石英・長英・赤色石を少量混入。
21	〃	—	—	6.2 底径10.4	指ナデ・横ナデ 指おさえしながら横ナデ	明赤褐色 にぶい橙色	〃	きめやや細かく混石物多い。長石0.3～1.0㎜・石英0.5～1.0㎜を含む。
22	〃	—	—	6.3 底径6.3	指ナデ・指おさえしながら横ナデ 指ナデ	灰褐色～にぶい橙色 にぶい橙色	〃	きめ細かい。石英0.2～1.0㎜、長石0.5～1.0㎜を中量3.0㎜以上の混石物もあり。
23	〃	—	—	9.3 底径14.2	ヘラミガキ・横ナデ 指おさえしながら横ナデ 指ナデの後横ナデ	明褐灰色 にぶい黄橙色	〃	きめやや細かく石英0.5～2.0㎜、長石1.0～2.0㎜を含む。
24	甕	12.2	—	12.7	指ナデ・横ナデ ナデ	にぶい橙色	〃	きめ細かく0.5～2.0㎜大の長石・石英を含む。
25	〃	16.0	—	5.1	横ナデ・ハケ目 ナデ・指おさえ後ナデ	灰色～橙色 にぶい橙色～褐色	〃	ややきめ粗く、1.0～4.0㎜大の石英・長石を中等量含む。
26	〃	20.0	—	9.4	横ナデ・ハケ目 円周にそってナデ・指ナデ	灰褐色 明褐色～灰褐色	〃	きめ細かく0.2～1.0㎜大の石英と長石、3㎜以上の長石1つ雲母片少量。

須恵器

1	須恵器 杯身	12.3	—	5.4	回転ナデ・つまみナデ 指ナデ	灰色～紫灰色 灰色	良好	きめ細かく0.5～1.0㎜大の石英・長石を含む。
2	〃	10.0	—	5.0	〃	青灰色～明紫灰色 紫灰色	〃	きめ細かく長石・石英0.5～2.0㎜大の混石物少量。
3	〃	12.1	—	5.4	〃	明紫灰色～灰白色 青灰色	〃	きめ細かく0.5～2.0㎜大の混石物少量。
4	〃	1.9	—	3.8	〃 〃　軽く指おさえあり	灰白色～明青灰色 灰白色	〃	きめ細かく長石・石英0.5～1.0㎜大の混石物少量。
5	〃	12.3	—	5.4	〃 〃	灰色 〃	〃	きめ細かく0.5～1.0㎜大の石英・長石少量。
6	甕	—	7.4		〃 〃		〃	〃
7	〃	—	12.5	8.0 (残高)	〃 〃	青灰色 〃	〃	〃
8	〃	—	10	9.3 (残高)	〃 〃	灰色 〃	〃	〃
9	鉢	10.1	—		〃 〃	〃 〃	〃	〃
10	高杯	10.4	—	4.3 (残高)	〃 〃	〃 〃	〃	きめ細かい。
11	〃	9.8	—	7.6 (残高)	〃 〃	〃	〃	〃

表2　包含層出土土器観察表

嘉幡古墳――嘉幡町

Ⅰ　はじめに

嘉幡古墳は、奈良県遺跡地図第２分冊 11－Ａ－51 の記載では方墳とされている小規模な古墳である。現状では、四周をコンクリートブロックで囲まれた一辺約 10m、高さ約 1.5m の墳丘で、墳頂部は平坦面を成していた。戦前に皇居あるいは伊勢神宮を向いて拝むための遙拝所としての場に利用されていたらしく、地元の古老の中には現在も東方に手を合わせて拝む人も見られる。そのため当初は古墳ではなく、近代の構築物である可能性も考えて調査を実施した。

今回の調査は、 都市計画道路天理・王寺線改良工事に伴い平成２年７月５日より同月 31 日まで実施し、当古墳周辺における遺構、遺物包含層の有無確認もその目的として調査を進めた。総調査面積は約 95㎡であった。

なお、当古墳の周辺では、北西に嘉幡遺跡、北に稲葉遺跡（11－Ａ－49 遺物散布地）、南に小島遺跡（11－Ａ－53 遺物散布地）、東に合場遺跡が所在し、いずれも弥生後期から古墳後期、中世にかけての遺物の散布が認められる。

Ⅱ　調査の概要

調査は、墳丘全面およびその東西に調査区を設定して実施した。また、調査の進行状況から一部調査区の追加、拡張をしながら調査を進めた。以下、各調査区の調査概要を記述することにする。

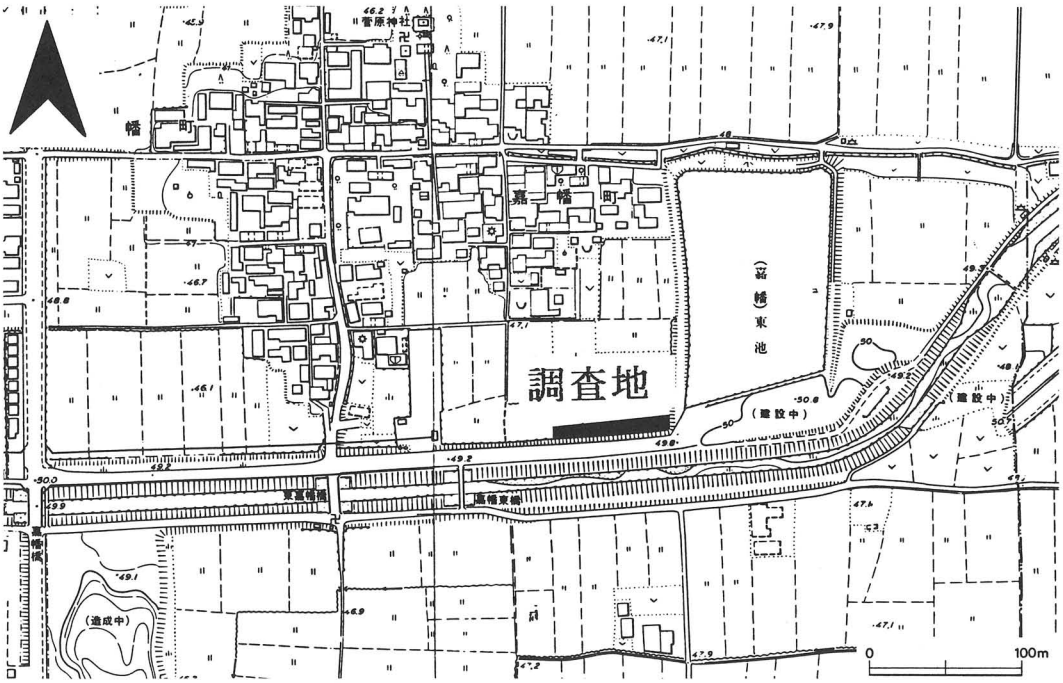


図１　調査地位置図（S＝1／5000）

(1) 墳丘部分調査区

層序および検出遺構: 現状の盛土（第Ⅰ層）の直下で近世段階の盛土面を検出している。この盛土面の最上部には厚さ約40cmの粘土ブロック混じりの褐～暗褐色砂質土が積み上げられており、概ね18世紀代の伊万里、瀬戸・美濃等の国産陶磁器や土師器小皿、瓦質土器や瓦片が数多く包含される状況を呈していた。これらの盛土面は、積み上げ状況の観察から近世土壇盛土1～4に区分が可能であり、それぞれの層毎に近世段階の盛土あるいは土壇の形成過程を示しているものと考えられる。

近世土壇盛土1（第Ⅲa層）は、先述の最上部の堆積土層であり、土壇形成の最終段階から、用途の変化に伴い積み上げられたものと考えられる。近世土壇盛土2（第Ⅲb層）は、褐色の砂質土の積み上げが看取できる。遺物の出土は少なく、おそらく、周辺より掻き集められた畑の土を客土としたものと思われ、土壇の修繕のためのものと考えられよう。近世土壇盛土3（第Ⅳa層）は、灰黄褐～褐色の粘質土と砂質土からなる盛土層である。一時期の間になんらかの施設として利用されていた状況がうかがえ、その上面より径1m、深さ約15cm程の浅く掘り込まれた土坑を検出しており、土師器小皿の完形品が出土している。また、この直上で寛永通宝（新寛永）が出土していることも興味深い。その下部にあたる近世土壇盛土4（第Ⅳb層）は、にぶい黄褐～褐灰色のシルトや砂混じりの粘質土であり、土壇構築初現期の盛土として理解できる。

これらの上部における堆積土を除去した後、墳丘部分東半では、第Ⅲb層直下で暗褐～黒褐色の黄褐色および黒色の粘土ブロック混じり粘質土を呈する古墳の墳丘面（第Ⅴ層上面）を確認している。墳頂部は後世の削平を受けており、埋葬主体部等は見られない。また、西半を近世土壇構築時に追加して第Ⅳa層および第Ⅳb層からなる盛土がなされている。その古墳墳丘の下層では、黒褐色の粘質土～シルトとなっており、弥生後期～古墳初頭の遺物包含層（第Ⅵ層）として捉えられるものである。

(2) 東トレンチ・東拡張区・東端トレンチ

層序および検出遺構: 層序は、後述する西トレンチとともに基本的に大きな差は無く、灰色砂混じり粘質土の耕作土（第Ⅰ層）およびにぶい黄褐色砂質土の床土（第Ⅱ層）が共通する上部堆積土壌となっている。東トレンチでは、にぶい黄褐～灰黄色砂質土の近世遺物を若干量含む遺物包含層を介在して、その直下では西半で古墳墳丘の盛土（第Ⅴ層）を、また東半では古墳に伴う周濠相当の落ち込みの西肩部分をそれぞれ確認している。周濠相当の落ち込みは検出面より最深部までが約1mの深さとなっており、埋土は上下2層に区分可能であった。上層は、暗灰黄～褐灰色の砂礫混じり粘質土であり遺物はまったく含まれていない。下層は、黒褐色の粘土ブロックを含む黄灰～にぶい黄褐色を呈するシルト混じり粘土であった。水性を帯びた土壌であることから、周濠内は常に水が入っていた状況であったと考えられる。なお、この埋土下層より須恵器の破片が多く出土している。また、周濠相当落ち込みの底面では淡緑灰色シルト質粘土の地山（第Ⅶ層）となっていた。

東拡張区でも、東トレンチと同様の層序であったが、北端では第Ⅱ層上面より掘削された近代の暗渠排水路を検出している。

東端トレンチは、東トレンチ東半で検出した周濠相当の落ち込みの東肩を検出する目的で掘削を実施したが、東端で落ち込みの東肩上面へ傾斜する法面を確認したのみで周濠の外縁部を確認するには至らなかった。層序は基本的に東トレンチ東半部と同様の状況であった。

(3) 西トレンチ

層序：第Ⅰ層および第Ⅱ層の層順は東側の各調査区と同様であるが、東半部では近世土壇盛土1（第Ⅲa層）および同盛土3（第Ⅳa層）、同盛土4（第Ⅳb層）の裾部を成す隆起部分が見られた。また、西半部では第Ⅳb層の裾を覆うように堆積する第Ⅱ層を確認し、その直下では、第Ⅵ層の弥生後期～古墳初頭の遺物包含層をベースとする南北方向の素掘り小溝を検出している。同方向の素掘り小溝は、東トレンチにおいても同レベルで検出しており、出土した瓦器小片より中世の耕作に伴う遺構として理解できよう。つまり、中世段階には古墳周濠は埋没していたと考えられ、墳丘上面の削平もその頃と思われる。

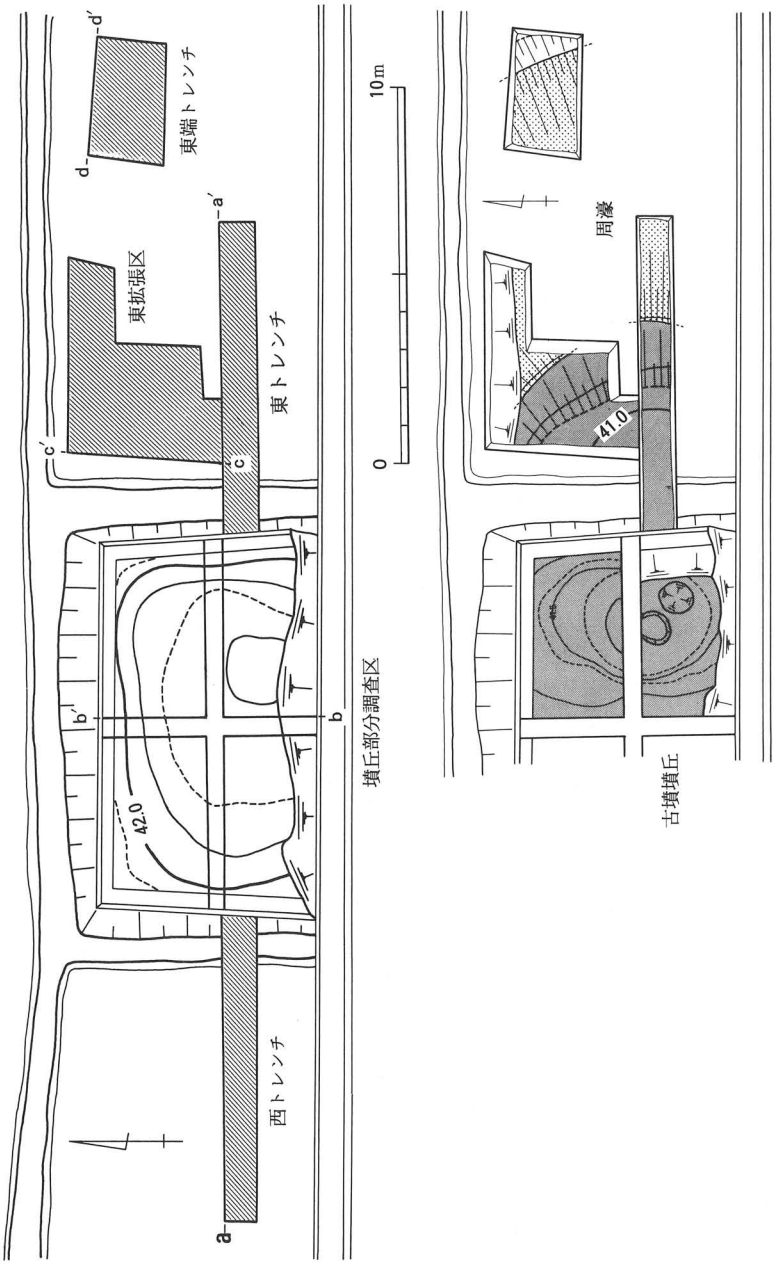


図2　調査区の配置および墳丘測量図（S＝1／200）

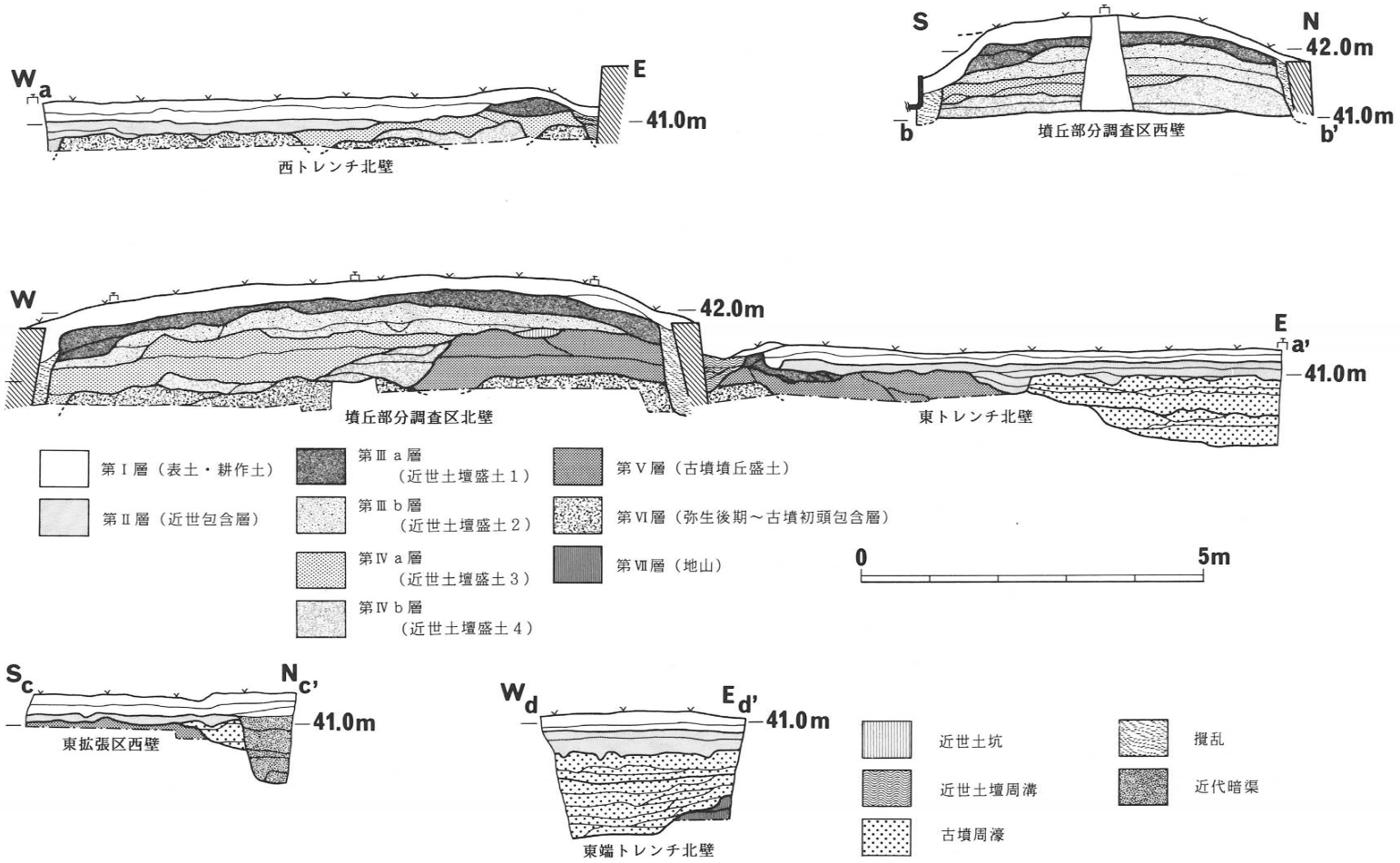


図３　各調査区土層断面図（S＝1／100）

Ⅲ　出土遺物

今回の調査では、下層包含層から弥生後期～古墳初頭の土器片、古墳周濠からは須恵器片が、また、近世土壇盛土より陶磁器、瓦質土器、瓦器等の土器片と鉄製品、貨銭が出土している。以下、それぞれの帰属時期毎に概観し、出土地点、層位については文章中に明記することにする。

(1)中・近世の遺物

1～10 は磁器である。いずれも肥前系と考えられるものであり、18 世紀から明治期に至る時期に帰属するものが含まれる。

1・2 は、端反り形の碗である。1 は外面には草花文（竹林か？）口縁部内面には四方襷文の変形かと思われる文様帯が巡る。肥前陶磁Ⅴ期（19 世紀前～中葉、幕末）に帰属する。

3～7 は丸碗である。4 はやや厚手のいわゆる「くらわんか手」で二重網目文を描く。網目文は 17 世紀後半から見られるが、二重となるのは 18 世紀代に入ってからである。5 も「くらわんか手」で、見込み蛇の目釉ハギ、コンニャク印判による五弁花文が見られる。五弁花文はかなり簡略化されている。外面文様は丸文である。肥前陶磁Ⅳ期に帰属し、18 世紀後半頃と思われる。

8 は広東碗である。見込みには「寿」の文字を手描きしている。肥前陶磁Ⅴ期に帰属する。

9 は端反り形碗で明治期の印判手である。外面には丸形と剣菱形の区画の中に草花文を描き、間を鹿子文で埋めている。内面は口縁部に輪宝繋文帯、見込みには外面と同様の草花文をいずれも型紙摺で描いている。

10 は段重である。外面文様は鹿子文を描く。段重が増加するのは 18 世紀後半以降である。

11・12 は産地不明の陶器である。11 は灰白色の灰釉を内面と口縁外面に施釉した小碗もしくは湯飲み碗である。12 は内面に断面三角形の突帯を巡らした灯明皿である。突帯の一部分は半円形に切り込まれている。

13 は信楽系の摺鉢である。

14～16 はいずれも瓦類である。14 は軒丸瓦片で、外区切の殊文帯と内区の巴文の末端のみが残る。小さな殊文と内外区間の圏線等の特徴から鎌倉時代後半期頃のものと考えられる。15 は唐草文軒平瓦の瓦当片である。瓦当面の周縁側片が幅広くなっており、室町時代後半～江戸期に位置付けられる。16 は桟瓦片である。軒丸部分には菊花文、軒平部分にはおそらく均整唐草文がそれぞれ見られる。

17 は鉄製品で、包丁あるいは刀子のような刃物類の茎の残片かと思われる。

18 は寛永通宝である。全体の約 4 分の 1 を欠損するが、「寛」の文字の細部の特徴からいわゆる「新寛永」であることがわかる。時期は江戸時代でも後葉に属するものである。

19～28 は土師質小皿である。法量、形態から a～d 類の 4 種類に分類できる。a 類（19～22）は口径が 7cm 前後で、やや平坦な底部から口縁部が屈曲して斜め上方に直線的に立ち上がる。19、21 には口縁に油煙が付着し、灯明皿としての使用が想定できる。b 類（23・24）は比較的厚手で、丸味を

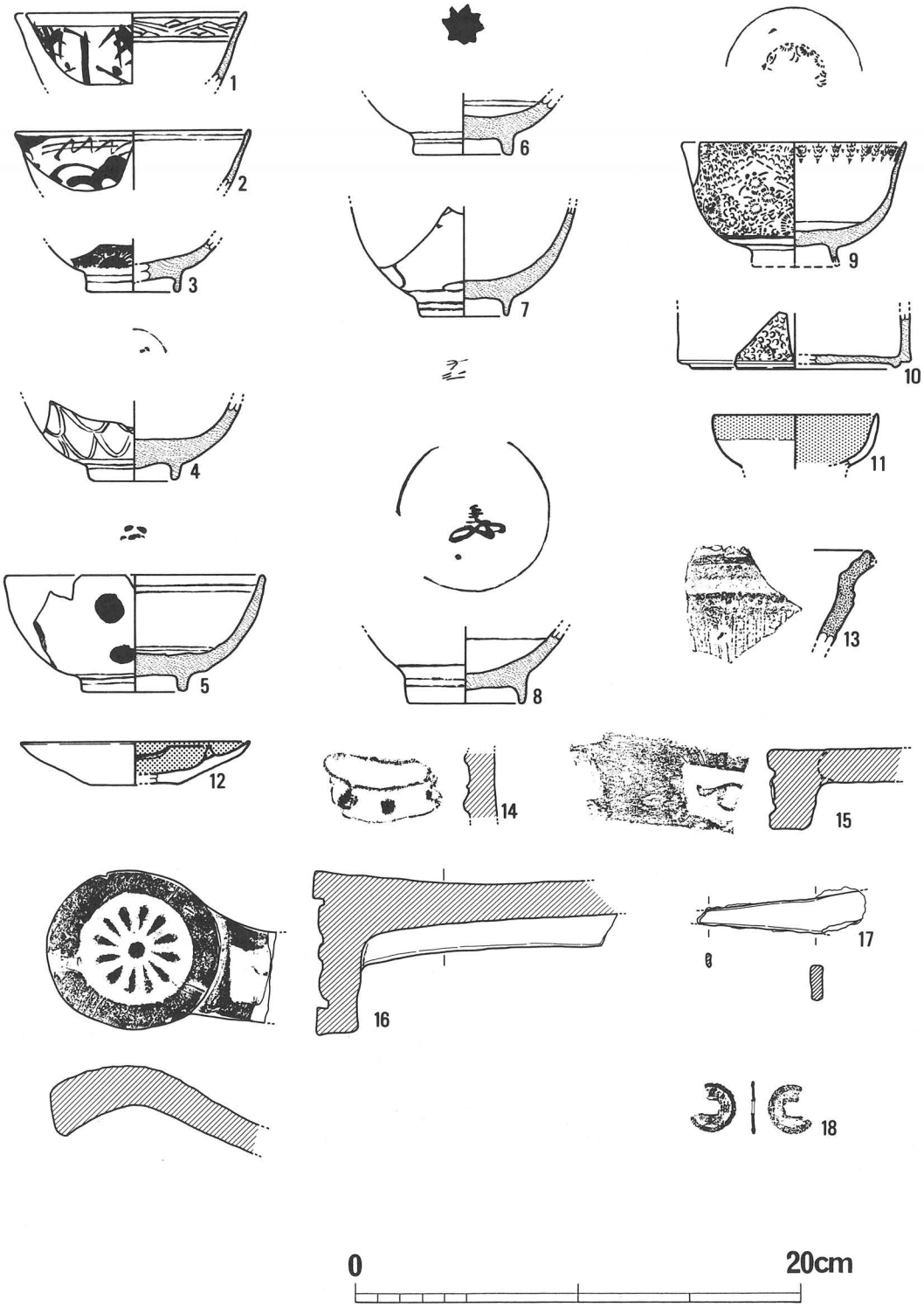


図４　出土遺物実測図１（S＝1／3）

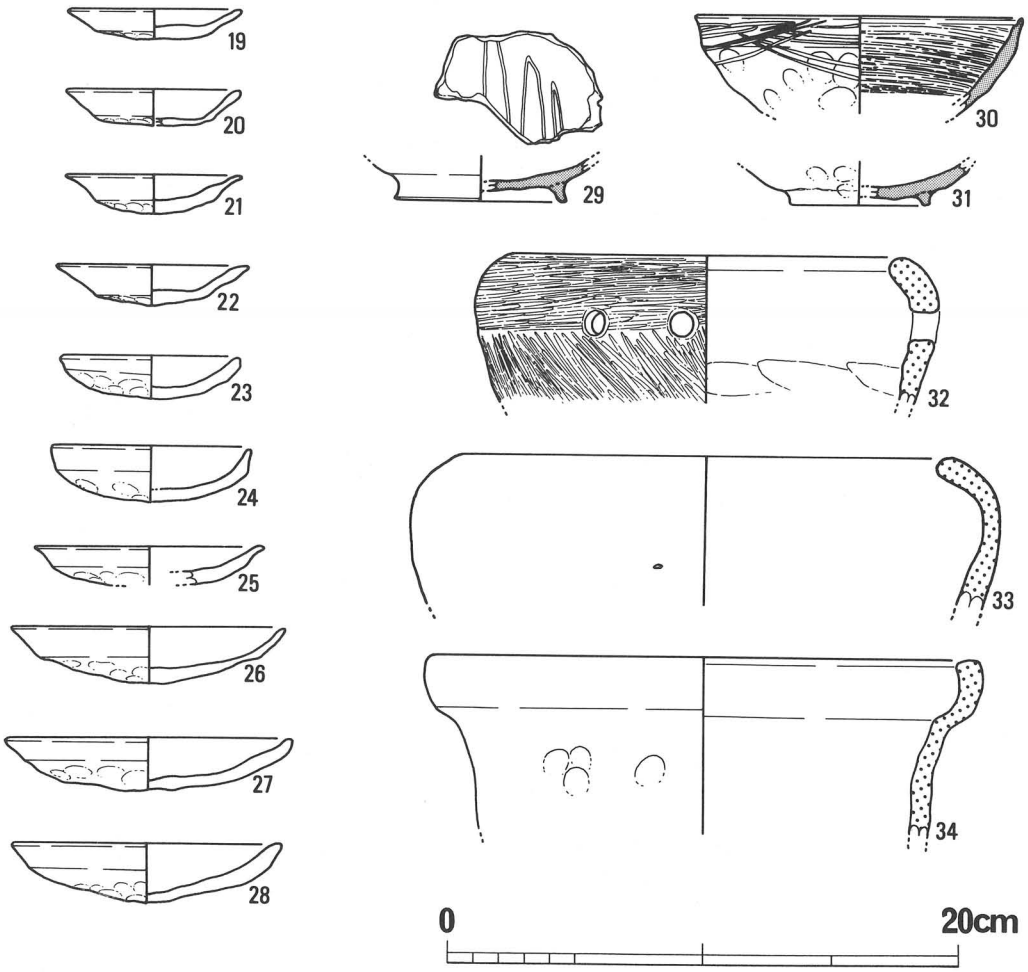


図５　出土遺物実測図（S＝1／3）

帯びた底部を有する。口径 7～8cm。灰白～淡橙色を呈し、精良な胎土をもつ。c 類（25）は外上方に短く外反する口縁部をもち、復元口径 8.8cm と中型品である。底部と口縁部との境にはヨコナデによる明瞭な稜が見られる。破片資料のため底部形態は不明。浅黄橙色を呈し、胎土は精良である。d 類（26～28）は、口径 10cm 以上の大型品である。体部と口縁部との境は明瞭ではなく全体に緩やかな弧を描く形態を呈する。いずれも浅黄橙色を呈しキメ細かい精良な胎土を用いて作られている。底部外面に無数の指頭圧痕が観察でき、焼成状態も良好なものが多く丁寧な作りである。

29～31 は瓦器椀である。29 は高くしっかりとした高台をもち、見込みにジグザク状暗文が残る。30 は外面に連弧文状に暗文を施し、内面には丁寧なミガキ調整が見られる。31 は断面逆台形の高台をもつ。内外面とも摩滅が著しい。

32～34 は瓦質土器である。32・33 は火鉢であろう。32 は外面に丁寧なミガキ調整を施し、灰黒色の色調を呈する。33 はにぶい黄橙色を呈し、炭素吸着の見られない土師質に近い焼成状態である。

このような焼成の違いはそれぞれの用途差に起因するものと考えられている。なお、33の外面には製作時に付着した籾の圧痕が看取できる。34は土管であると思われる。

以上の遺物の出土点・層位は1・3・7・15・22・25・32が墳丘西半部第Ⅲ層、9・11・12・16・21・23・24・26・28・33が墳丘東半部第Ⅲ層、19・20が墳丘西半部第Ⅳa層、17が同地点、第Ⅳb層、6・8・14・34が墳丘東半部第Ⅳb層、18・27が第Ⅴ層直上土坑、4・5が東端トレンチ古墳周濠埋土上部、29・30・31が東トレンチ古墳周濠埋土上部、13が西トレンチ第Ⅱ層である。

古墳時代以前の遺物

古墳時代後期の須恵器、弥生後期末～古墳時代初頭の土器（古式土師器）がある。これらの土器

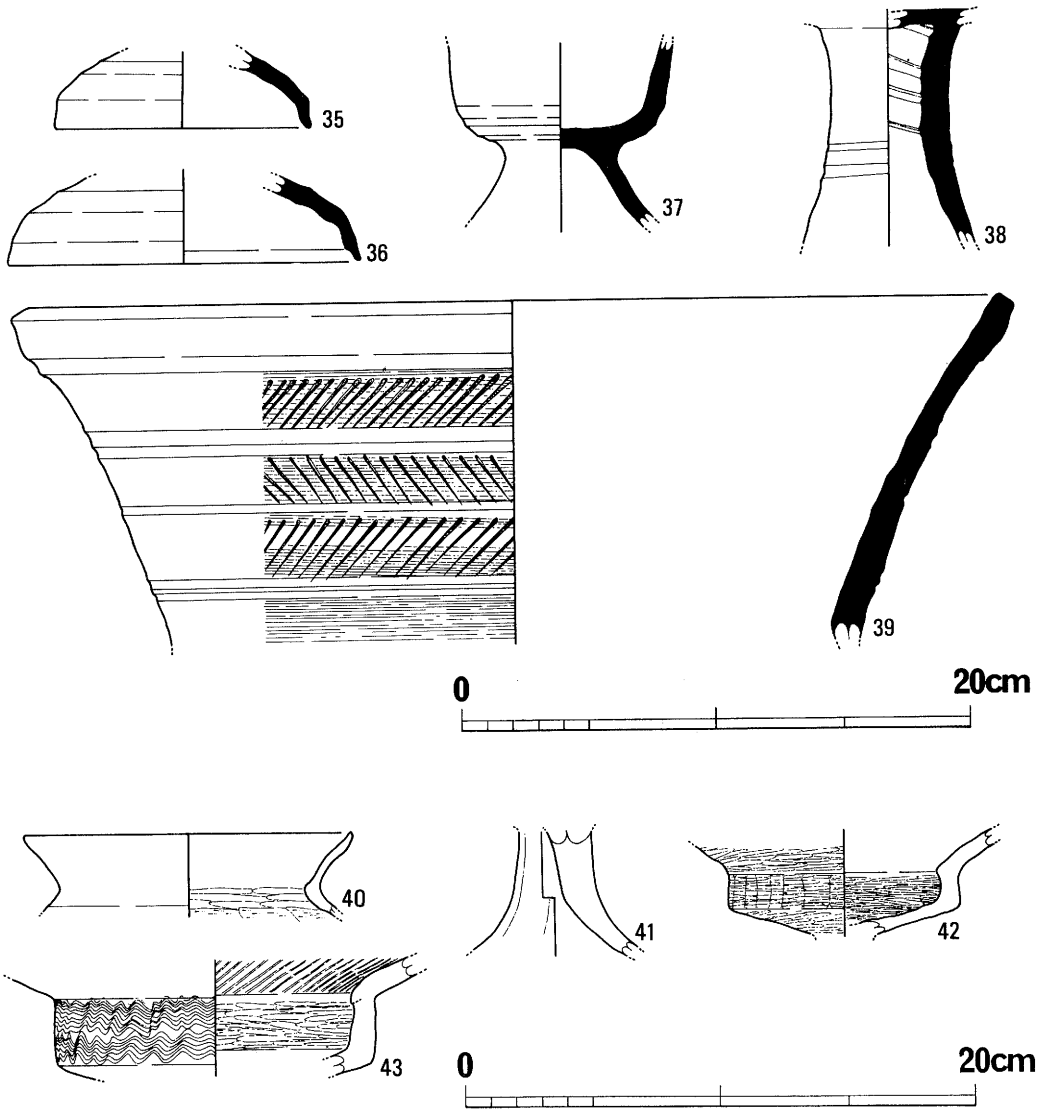


図6　出土遺物実測図（S＝1／3）

は、中近世の遺物と混在して出土しているものも含まれるが、須恵器は古墳周濠下層、古式土師器は古墳墳丘下の遺物包含層等からそれぞれ出土している。

35～39 は須恵器である。35・36 は蓋であるが、35 は復元口径 10.0cm とやや小型で、台付長頸壺などの蓋と思われる。東拡張区第Ⅱ層より出土。36 は坏蓋で、復元口径 14.0cm を測る。口縁部内面には鈍い段をもつ。二点とも天井部は丸みをおび、回転ヘラケズリを施す。東端トレンチ古墳周濠埋土下層より出土。37・38 は高坏である。37 は深い坏部をもち、脚部は大きく八の字に開く。坏部底部には回転ヘラケズリがみられる。現存高 7.5cm。端トレンチ古墳周濠埋土上層より出土。38 は長脚の脚部で、透かし部分は残存していない。脚部の中央に沈線が二条巡る。内面には螺旋状にヘラ状工具の圧痕が残る。現存高 9.5cm。東端トレンチ古墳周濠埋土より出土。39 は大甕の口縁部である。口縁はやや外反気味にのび、端部は面をもつ。外面は沈線で区画した中にヘラによる刺突およびカキ目の装飾を施す。内面には灰降着がみられる。復元口径 39.0cm と大型品である。東端トレンチ古墳周濠埋土の上層および下層から出土している。これらの須恵器はいずれも 6 世紀後半代の時期が考えられる。

40～43 は弥生時代後期末～古墳時代初頭に位置付けられる土器群である。40 は庄内大和型甕あるいは布留傾向甕の口縁部片である。口縁はやや外反気味にのび、端部をわずかにつまみ上げる。頸部以下の外面調整は不明であるが、内面は頸部の屈曲よりもやや下がる位置まで左回りにヘラケズリが施され、頸部には横法方向のヘラミガキ調整が看取できる。復元口径 13.0cm、現存高 3.3cm。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。東拡張区第Ⅲ層より出土。41 は高坏の脚柱部である。脚端部へ向かって緩やかに広がる形態で、明瞭な屈曲はみられない。外面をタテ方向のヘラナデで仕上げている。現存高 5.0cm を測る。墳丘東半部第Ⅲ層出土。42・43 は高坏の坏部である。ともに坏底部から一旦屈曲して垂直に立ち上がり、さらに屈曲して外上方に開く、二段に屈曲する高坏である。42 は縦方向のヘラナデによって器壁を整えた後、内外面ともに横方向の細かいヘラミガキが施される。現存高 4.3cm。墳丘東半部第Ⅲ層出土。43 は外面の垂直に立ち上がる部分（一次口縁）に二条の櫛描波状文による装飾を施し、内面の上半には斜放射状に暗文風の細かいヘラミガキ調整を、また下半には横方向のヘラミガキ調整が施される。胎土はやや粗く粗製品である。現存高 4.7cm を測る。墳丘西半部の盛土層以下に存在する第Ⅳ層（遺物包含層）より出土している。（小池）

Ⅳ　まとめ

今回の調査は、小面積の発掘調査ではあったが結果として以下のような多くの事柄が判明した。

1. 現状の墳丘盛土面は、江戸時代後期以降は民間信仰の対象としての塚として利用され、近代に至っては遙拝所としても使用される場所となっていた。
2. 近世盛り土面の前段階ではもともと古墳の墳丘であった高まりに中世以降の新田開発にともない、信仰の場としての土壇状の塚が二次的に築かれ始めていることが出土した瓦器椀の時期（13

世紀前後）から窺えることができた。

3. 古墳の規模は、西側半分を中世段階に著しく破壊されているため不明であるが、直径 10m 以上の円墳ないしは前方後円墳の後円部に相当し、幅約 6m の周濠が巡る古墳であることが判った。古墳の時期は、周濠埋土より出土した須恵器の年代観より概ね 6 世紀の中葉～後葉頃の時期が考えられよう。

4. 近世土壇および古墳墳丘下で確認した下層遺物包含層（第Ⅳ層）は、約 40cm 程度の厚さで遺存する弥生後期～古墳前期初頭の良好な遺物包含層であり、当古墳周辺に所在する嘉幡遺跡および稲葉遺跡等の範囲におさまる可能性があるが、いずれの遺跡についても面的な広がりの把握がなされていないため、今回の地点については仮に嘉幡東遺跡として捉えておきたい。

以上が今回の調査で得られた成果であるが、盆地内には未確認の埋没古墳がまだまだ多く存在すると思われ、当古墳と同様の土地利用の変遷に組み入れられたものも多いと考えられる。考古学的な対象としてよりも民俗学的な対象として考えられがちな「塚」であるが、その下層には未確認の古墳が存在するものも多いかも知れない。今後もこうした調査の際には「塚」とその下部遺構の両者について注意を払う必要があるであろう。

下池山古墳北側外堤――成願寺町

Ⅰ　はじめに

下池古墳は、大和古墳群萱生支群に含まれる前方後方墳である。この古墳の北から西方にかけて「下池」、南東に「新池」という溜め池が所在し、周濠の名残りとも考えられている。今回、後方部北側の下池の堤（成願寺町 174 番地所在）において天理市農林課による溜め池整備事業に係る土木工事が計画され、事前の調査として古墳北側外堤部の状況確認を目的とした調査を実施した。調査は、平成２年１月 23 日より開始し、同年２月３日に終了した。総調査面積は約 40㎡であった。

Ⅱ　調査の概要

当初は、前方部北側正面において、現状の堤に直交する 1m 幅を基調とした南北方向のトレンチを６ケ所設定し、必要に応じて各トレンチ間を拡張した調査区２ケ所設けたため結果的には西から

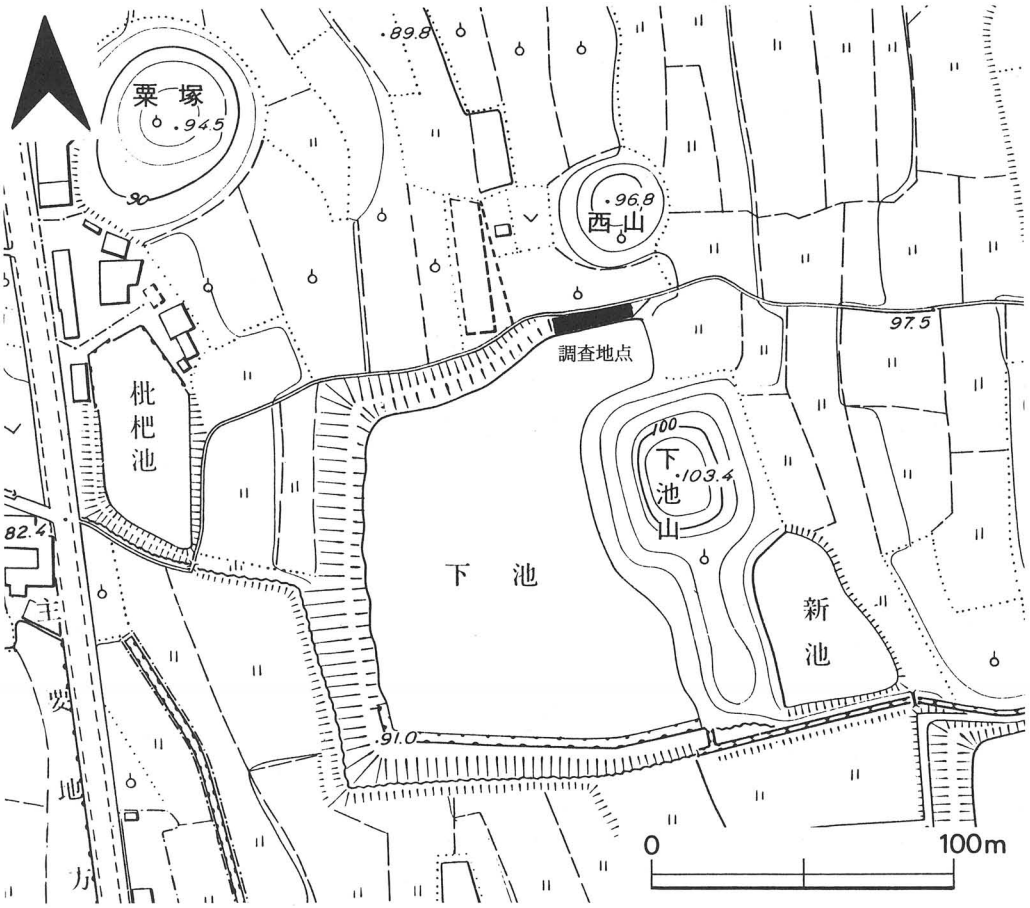


図１　調査地位置図（S＝1／2500）

A～Dトレンチとした4つの調査区に留まった。以下、各トレンチの調査により得られた知見について、まとめておく。

(1) 層序

Aトレンチ：1～4層は、いずれも灰色を基調とした砂質土壌および外堤上の里道から崩壊、転落したブロック状の粘質土の堆積を示している。5～7層は現状の「下池」の底面直上に流入した土砂の堆積であり、黄灰色砂礫土の地山面を覆うように堆積している様子がうかがえる。これらの各層からは著しく近年に近い新しい遺物が出土しているに過ぎない。外堤側のA～E層は、いずれも先述の地山面を基底面として砂混じりの粘質土を積み上げた状況が看取できるが、目立った遺物の出土は無く時期の限定は容易ではない。

Bトレンチ：1～8層の上部堆積土は、Aトレンチの1～4層と同様に近年の堆積土である。若干外堤土からの崩落土や上部よりのゴミ穴等の撹乱を被っているが堆積状況はさほど変わらない。外堤側の盛土は、黒褐色および黄灰色の砂質土を積み上げたもので下部は砂およびシルト質の土壌を介在しながら基底の地山面に至っている。ここでも顕著な遺物の出土はない。

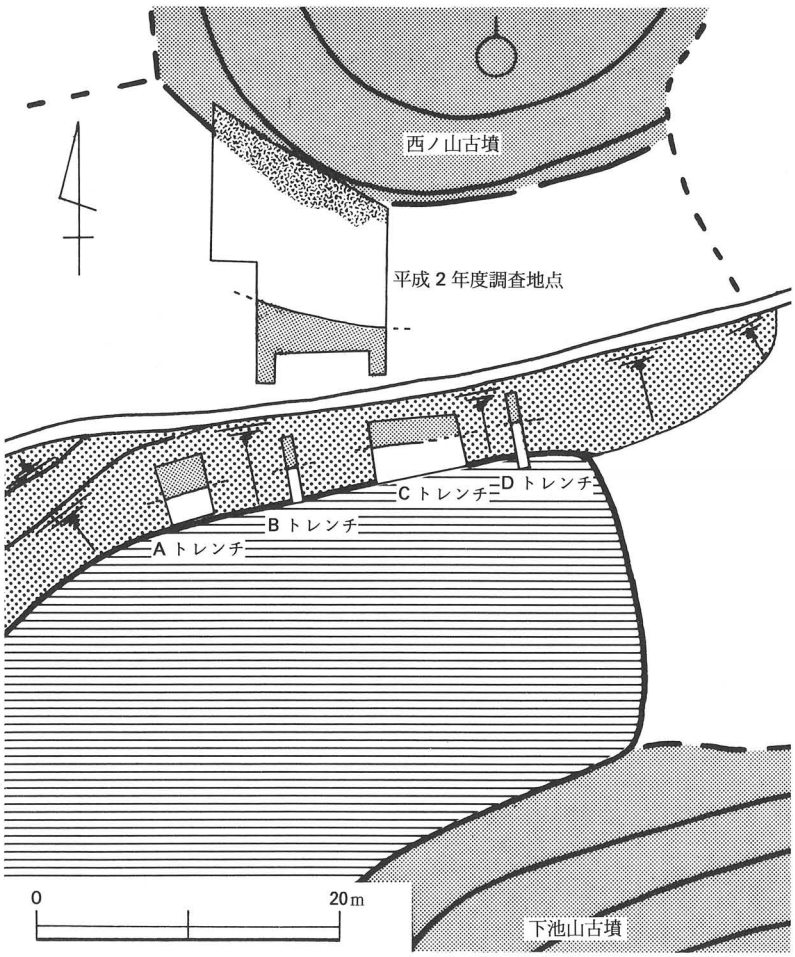


図2　調査区配置図（S＝1／500）

Cトレンチ：西壁および東壁の土層堆積状況は、上部より掘削された遺構を伴うためにそれぞれ異なる堆積状況を呈している。西壁では、上部堆積土壌である1・2層除去後は後述する中近世の遺構埋土となり底面が地山面となっている。東壁は、上部より最近の撹乱土坑が掘り込まれ、その下方で中近世の溝状遺構が見える。外堤の盛土面は、この溝のベースとなっている。

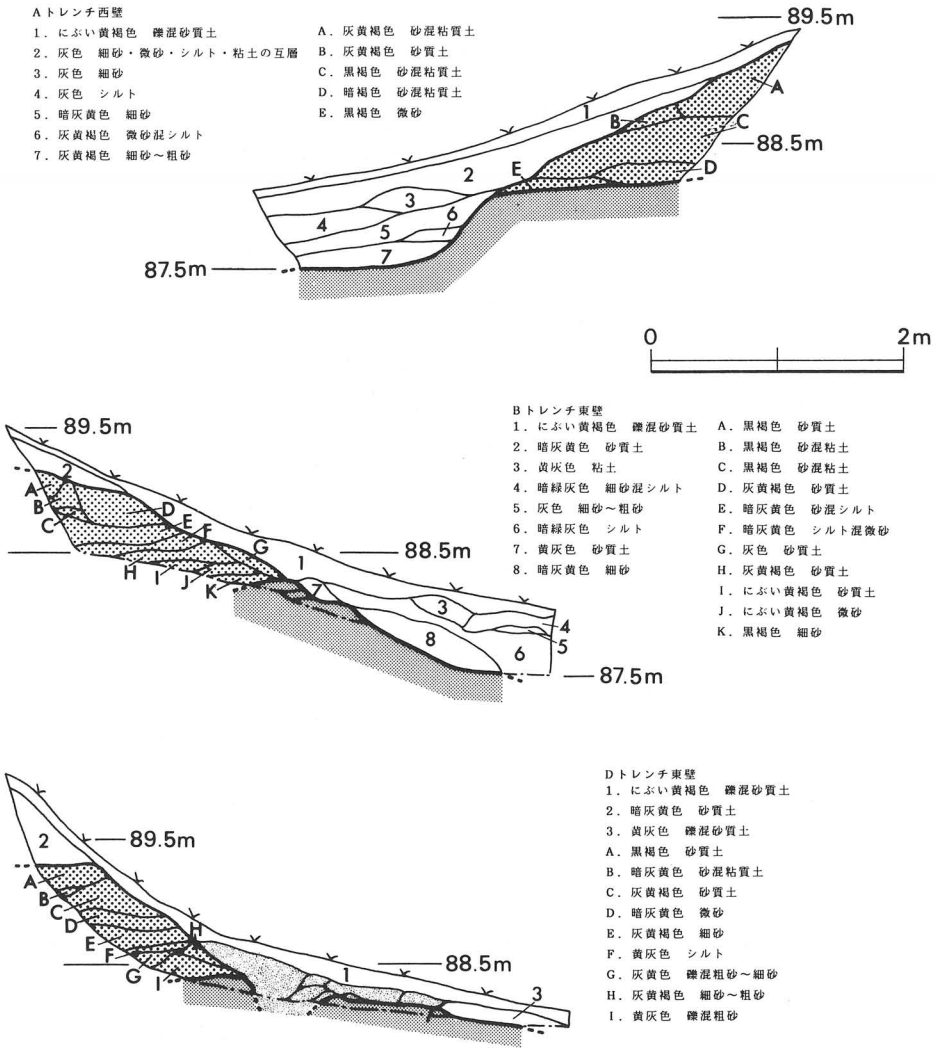


図３　A・B・Dトレンチ土層図（S＝1／60）

Dトレンチ：1・2層は他のトレンチと同様に最近の上部堆積土である。3層は黄灰色の礫混じり砂質土で、これを掘り込み面として黄褐色～暗灰色の礫混じりの粗砂層を埋土とする近世～近代の暗渠が見られる。完掘はしていないが、底面は完全な岩盤層を成す基盤層となっている。外堤の盛土は、砂質土と細砂、粗砂からなる積み上げが看取できる。

(2) 検出遺構

各トレンチの調査を実施した結果として、下池山古墳に伴う明確な遺構については今回検出することができなかった。しかしながら、各トレンチで見られた外堤相当の盛土については遺物の出土

図4　Cトレンチ平面図（S＝1／50）

はないものの北側に近接する西ノ山古墳周濠の調査成果（青木　1991）から検討すると古墳に伴うものである可能性も残る。ここでは、外堤相当の盛土の検討とCトレンチ検出の中近世遺構についてまとめておく。

外堤相当の盛土：外堤相当の盛土は前述の層序の項でも記したように、いずれも砂質土を基調として粘土や砂を介在した状況で水平な積み上げを看取することができる。そして、地山直上を水平に整形した後に盛土をすることがうかがえ、北側の里道の地下に続くものと考えられるものである。平成2年度調査の北に隣接する西ノ山古墳の南側では、同様の盛土と考えられる積み上げ土が確認され、西ノ山古墳の外堤相当施設と認定した。今回検出した下池山古墳と西ノ山古墳の両者を比較した場合、それぞれ盛土の基底面となる地山面のレベルが88.5m前後と89.0m前後となり、若干の

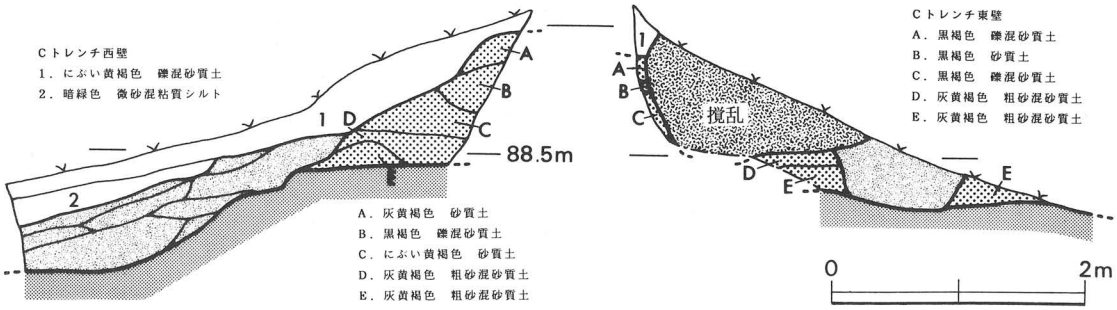


図5　Cトレンチ土層図（S＝1／60）

高低差をもって北側から両古墳間の里道を挟んで緩斜面を成す原地形が予想できる。両古墳の前後関係を考えた場合、現状の編年研究の成果から西ノ山古墳が後出することは明白であり、当然両古墳が外堤部を接していたか、あるいは共有していた時期があったものと推定できよう。両古墳の位置関係を考えると、下池山古墳の中軸線の延長線上に西ノ山古墳が位置しており両者が近接した時期の築造として考えることも可能である。今回の外堤部盛土が同時期ないしは後に積み上げられたものかどうかは判断し難いが、今後も注目されるべき点であると言えよう。

Cトレンチ検出の中近世遺構：Cトレンチでは、外堤部斜面上で素掘りの溝状遺構および石組みの集水施設を検出している。素掘り溝はトレンチ北東隅に位置し、埋土は淡灰色の微砂混じりシルト質土を呈する。幅約50㎝、深さ約25㎝の規模で東西に傾斜をもち下方の集水施設と連結するように存在することから、一連の施設に付随する溝と考えられる。集水施設と考えられる石組み遺構には、上部に拳大の礫の散乱が見られ、石敷きの存在を想定できるものである。下部は、幅30～50㎝程度の面取りを施した石材を用いた石列を成し、その内部に直径約20㎝前後の丸太材を数本横組みに重ねている。この囲みの内部地山面上に10数本の杭が打ち込まれており、堤の上部から池の内側に向かう水の流れを制御する目的で構築された施設として考えられるものである。埋土は明褐灰色および淡青灰色の砂、シルトからなる互層であり、上部は暗灰褐色の砂質土により埋没している様子がうかがえる。これらの埋土中からは、弥生土器、須恵質埴輪、中近世の陶磁器や土師器小皿の破片が出土しており、遺構の時期については概ね中世末～近世に機能していたものと思われる。

(3) 出土遺物

今回の調査では、下池山古墳に伴うと考えられる遺物はほとんど見られず、埴輪、土師器、須恵器や陶磁器等の古墳築造以後の土器類が若干量（コンテナ約1箱）出土している。そのほとんどは器面の著しく摩滅した細片であり、二次的に濠内へもたらされたと思われる破片が極めて多い。特筆すべきものに須恵質埴輪片があり、近傍に所在した後期古墳より流入したものと考えられる。以下、図化することのできた10点の土器について記しておく。

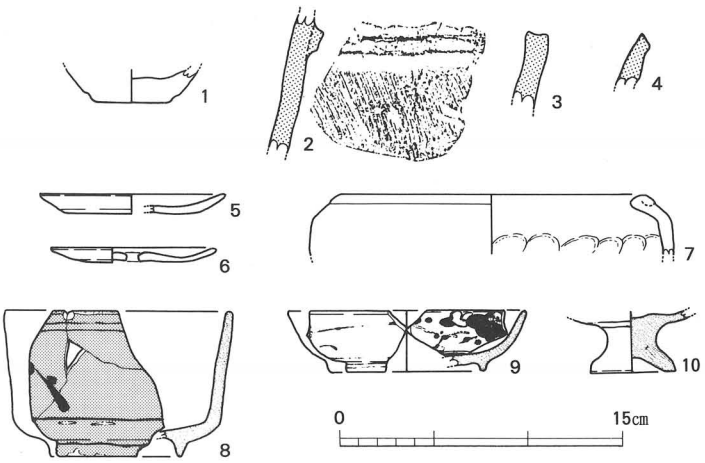


図6　出土土器実測図（S＝1／4）

1は弥生後期の壺の底部である。内外面ともに摩滅のため調整手法は看取できない。2・3は円筒埴輪である。2は須恵質の埴輪である。外面は一次調整のタテ・ナナメハケ、内面を指頭ナデで仕

上げている。また、低く不整形なタガを貼り付けたのちヨコナデし、内面側では指頭圧痕がみられる。3は摩滅のため、口縁部のヨコナデ以外の調整は不明である。

4は大きく外反する口縁から朝顔形埴輪と考えられるが、小片のため具体的な形状は不明。

5・6は土師質小皿である。いずれの皿も平坦な底部をもち、体部は斜上方へ立ち上がる。うち6は底部中央部を肥厚させ、焼成後に穿孔を施している。

7は土師質羽釜の口縁である。口縁はゆるやかに内弯し、端部を外側に折り返したのち丸く整えている。

8〜10は近世の陶磁器である。8は唐津の碗である。口縁端部は丸く、体部は直口し、やや高い高台をもつ。外面に草花文様を施した後、高台内面を除き全体に施釉し、口端部は口紅を施す。また、高台部にはハナレ砂の痕跡と思われる砂粒が付着している。9は伊万里の皿である。口縁部は丸く、体部は斜上方に立ち上がる。高台は低く、面をもつ。内外面に草花文様を施した後、口縁端部を除き内外面とも施釉する。10は伊万里の仏飯具である。脚部はゆるく広がり、端部には面をもつ。坏底部は平坦で、体部を欠くが、斜上方へのびると思われる。外面の脚部と坏部の境目には圏線を巡らせ、全体に施釉するものの、外面部は部分的に近代以降の二次焼成が見られる。

これらの遺物は、周濠内北西部採集の3と前方部採集の9を除き、他はすべてCトレンチの遺構より出土したものである。(岩崎)

Ⅲ　まとめ

今回の調査では、下池山古墳に伴う遺構、遺物の出土はほとんど無く、調査区も極めて小面積であったためかさほど成果は得られなかった。しかしながら、当古墳の外堤部を形成する盛土を確認したことから、今後も周辺部の調査に際して留意すべきであろう。

参考文献：青木 1991 「西ノ山古墳・成願寺遺跡」天理市埋蔵文化財調査概要報告　1990年度

柳本遺跡群竹ノ尻地点―― 柳本町

Ⅰ　はじめに

柳本遺跡群竹ノ尻地点は当初、条理界に隣接する地点での建て売り住宅建設に伴う確認調査としておこなった試掘調査時に古墳前期初頭の土器が出土したことから、再度原因者との協議を経て面的な調査を実施して確認された遺跡である。

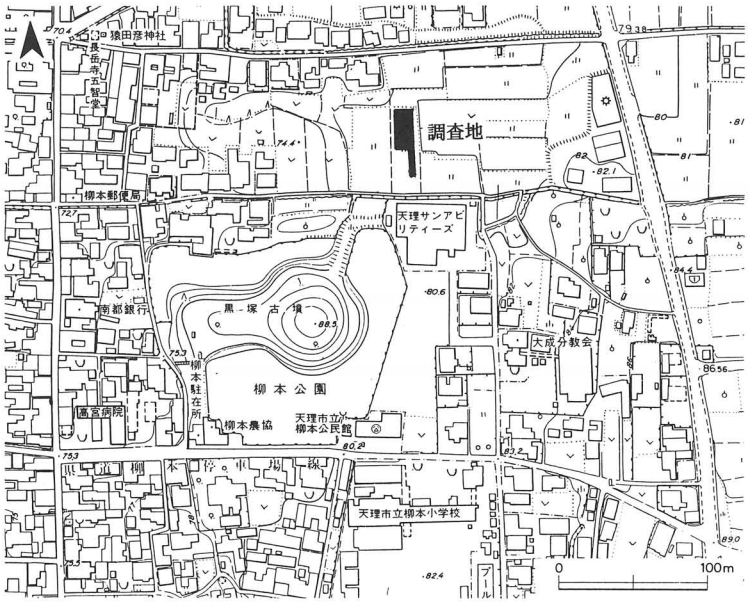


図１　調査地位置図（S＝1／5000）

これまでの周辺地区の調査では、南側に所在する天理サンアビリティーズ建設の際確認の黒塚東遺跡、黒塚古墳周縁の擁壁工事に伴う墳丘裾の確認調査等で弥生後期終末～古墳前期初頭の遺構、遺物が出土している。また、黒塚東遺跡では、縄文後期の土器片も出土している。なお、今回の調査地の南側に所在する黒塚古墳の周辺一帯は江戸時代の柳本藩邸遺跡となっており、これまで５次にわたる調査が実施されているが、前述の各地区のような弥生後期終末～古墳前期初頭の遺構や遺物は確認されていない。

今回の調査は、平成３年２月４日より開始し、同年３月19日にすべての作業を終了した。総調査面積は約420㎡であった。

Ⅱ　調査の概要

今回の調査では、弥生後期終末～古墳前期初頭の竪穴住居、土杭、溝等を調査区の北半部を中心に検出している。また、これらに重複して中・近世の土杭や耕作に伴う中世以降の段差、それに縄文後期の土器片を含む自然流路も確認している。以下にその概要を記しておく。

(1)層序

調査区内における基本的な層序は次に記すような状況となっている。**第Ⅰ層**（耕作土）は灰～黄灰色粘質土（やや砂質）で層厚約25㎝である。次に**第Ⅱ層**の暗灰黄色砂質土が層厚約15㎝前後で続き、若干の縄文土器片を含む。この第Ⅱ層の上面では弥生後期終末～古墳前期初頭の遺構や中・近世の素堀り小溝、土杭等の遺構検出面となっている。調査区の南半では、この第Ⅱ層の直下で縄文

後期の土器片を含む自然流路となるが、北部では推積状況が異なり第Ⅲ層のにぶい黄褐～褐色細砂・砂礫土が西方に傾斜面をもつ第Ⅳ層（基盤層・地山面）の上部に推積する。なお、現地表面下約50～70㎝で第Ⅳ層の基盤層となるが、調査区の南北で推積土壌がそれぞれに異なり、北端では第Ⅳb層の黒色砂礫混じり粘質土（硬質）、そのほかでは自然流路の底面に至るまで第Ⅳa層の褐～暗黒褐色の細砂・シルト混じり砂礫層（下部は明赤褐色の岩盤層）の地山となる。

(2)検出遺構と出土遺物

ここでは弥生後期終末～古墳前期初頭に帰属する遺構のうちでは土杭1および竪穴住居1、縄文後期では自然流路1～3についてそれぞれ概観しておく。

土杭1：調査区の中央やや北寄りで検出した隅丸方形に近い平面形態を呈する土杭である。直径約1.3m、深さ約0.45mを測る。出土遺物はほとんどが土器片であり、埋土上半に集中するが、若干の間層を挟み底面直上で東海系の小型精製高坏、その上部では北陸系の小型精製丸底鉢が出土している。なお、上部の破片資料中には古相を示す形態の庄内大和型甕や弥生後期型甕、高坏等が含まれる。

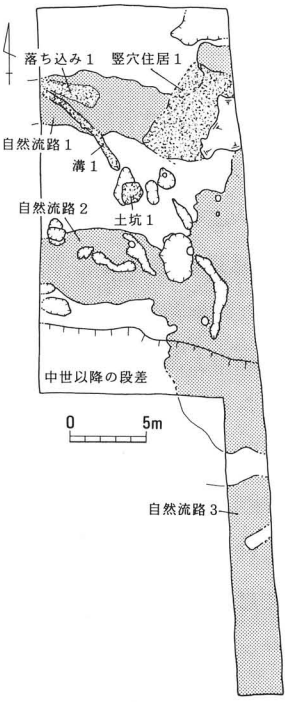


図2　調査区平面図（S＝1／500）

竪穴住居1：調査区の北東辺で検出した方形の住居である。後世の攪乱および上部の削平のため明確な平面規模は不明であるが、一辺約7m前後と推定できる。埋土中および床面直上で二重口縁壺、タテハケ調整の甕、小型器台の坏部、有段屈曲鉢等が出土している。

自然流路1～3：現在の地形からも調査地が東から西へ向う傾斜上にあり、南へ下降する谷地形を示していたが、前述の遺構のベース面で埋没した谷筋を3条確認している。調査区北部の大半では基盤層となる第Ⅳ層が北にのび、南半のトレンチ部分では多少の凹凸を示しながらさらに地面（自然流路底面）が下降するのが窺えた。自然流路1～3はそれぞれ灰褐～暗灰色の砂、シルトを含む砂礫土を基調とした土壌で埋没しており、擦消し縄文や沈線多用の見られる縄文後期の土器片が少量出土している。調査期間の制約もありすべての流路を完掘していないが、いずれも1m前後の深さで基盤層となる。自然流路3のみ南端で急激に落込んでおり、1m以上の深さを確認できなかったが地形的に考えても原地形の谷筋へと移行するものと思われる。

Ⅲ　まとめ

本調査では、密度は低いながらも古墳前期初頭までの集落遺構を確認することができた。今後も周辺における尾根筋の緩斜面上の調査の際には留意する必要がある。

柳本遺跡群　ベベノ木地点――柳本町

Ⅰ　調査の契機と経過

柳本町字ベベノ木の柳本遺跡について出口工務店より発掘届が申請された。これを受けて平成２年９月13日に工事予定地を試掘調査したところ、地表下約1.5mで遺物包含層を検出した。そして平成３年３月５・６日の両日にわたって東西7m、南北3mのトレンチを設定して発掘調査を実施した。

Ⅱ　調査の概要

調査地は、柳本町字ベベノ木であるが、主要地方道天理・桜井線の西側であり、行燈山古墳（現崇神天皇陵）が東側に隣接している。また、西には黒塚古墳が所在し、いわゆる柳本古墳群の域内の遺跡である。

調査地内は住宅建築敷地内であり調査面積も最小限に留まった。

土層断面は、地表下約1.2mで地山の砂層に達する。この間は中世土器を包含し、暗灰青色微砂土の無遺物層を挟んで縄文土器を含む茶褐色砂層になる。さらにこの砂層を約40㎝掘り抜いた所で土

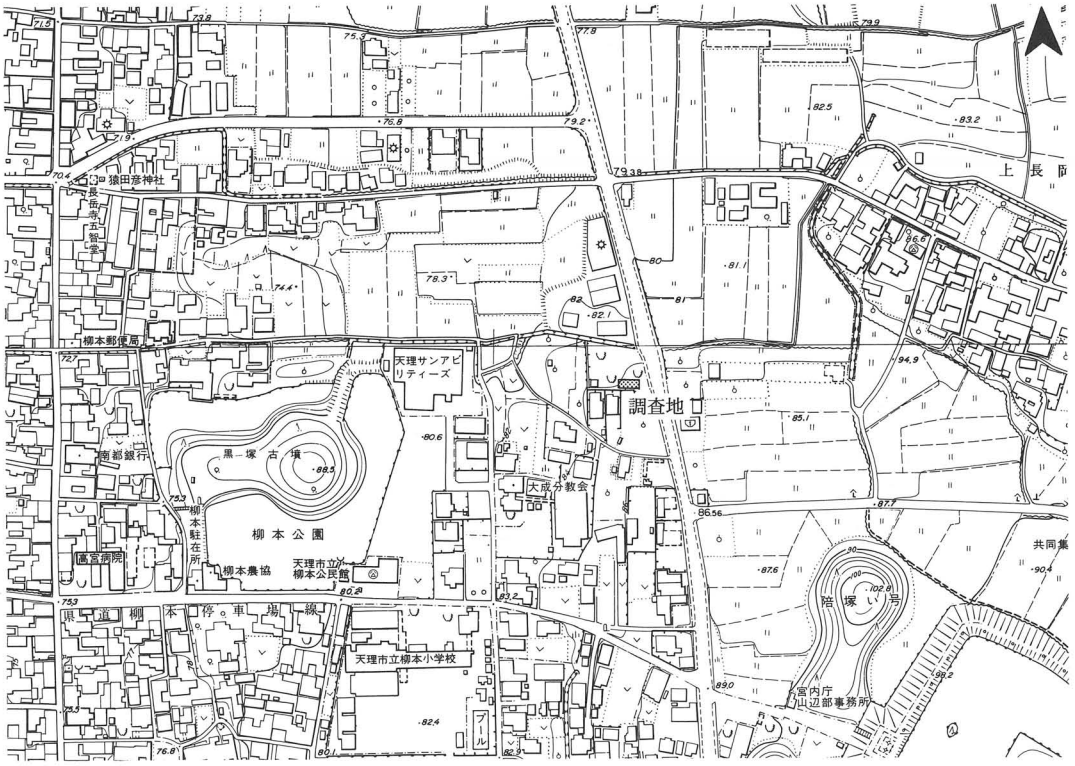


図１　調査地位置図（S＝1／5000）

を混じ得ない砂層が検出された。このことから、土器を包含するのは砂層の上面部分と考えられる。また、トレンチ内では東端部分に限られ、あまり広い範囲の出土はない模様である。

試掘調査で出土した古墳時代初頭の土器を包含している層位は、トレンチ東端で部分的に検出した黒灰色粘質土層が確認されるが、西側へは広がっていない。

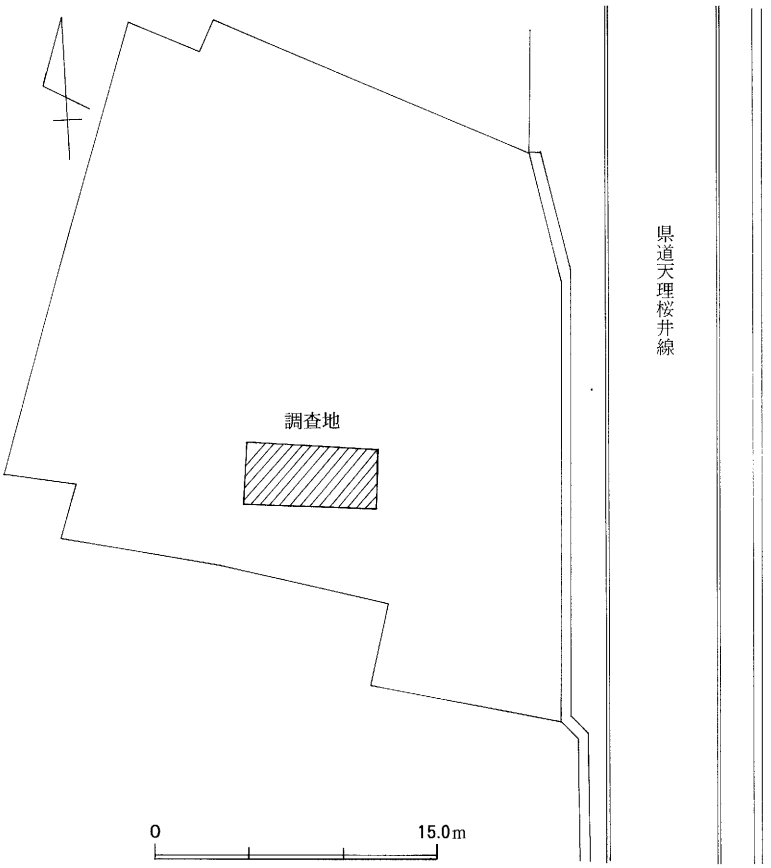


図2　ベベノ木地点調査区位置図（S＝1／200）

Ⅲ　出土遺物

今回の調査では、遺構の存在は認められなかったが、遺物包含層より縄文中期～後期前半の土器や瓦器、瓦質土器、土師質羽釜等の中世土器類がそれぞれ異なった層位で出土している。以下、出土層位毎の出土土器について概観し、併せて試掘調査時出土の土器についても記すことにする。

試掘調査時出土の土器（黒灰色粘質土層出土）

試掘調査では、弥生後期終末～古墳前期初頭のいわゆる庄内併行期の高坏の完形品（1）が1点出土している。坏部と坏底部の間に明瞭な段をもち、脚柱部は中実で脚裾の器壁もやや厚く成型されている。口径19.2㎝で器高12.6㎝を測り底径11.4㎝である。

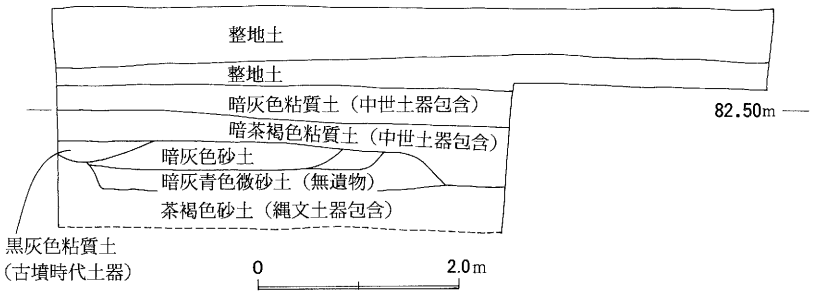


図3　調査区南壁土層図

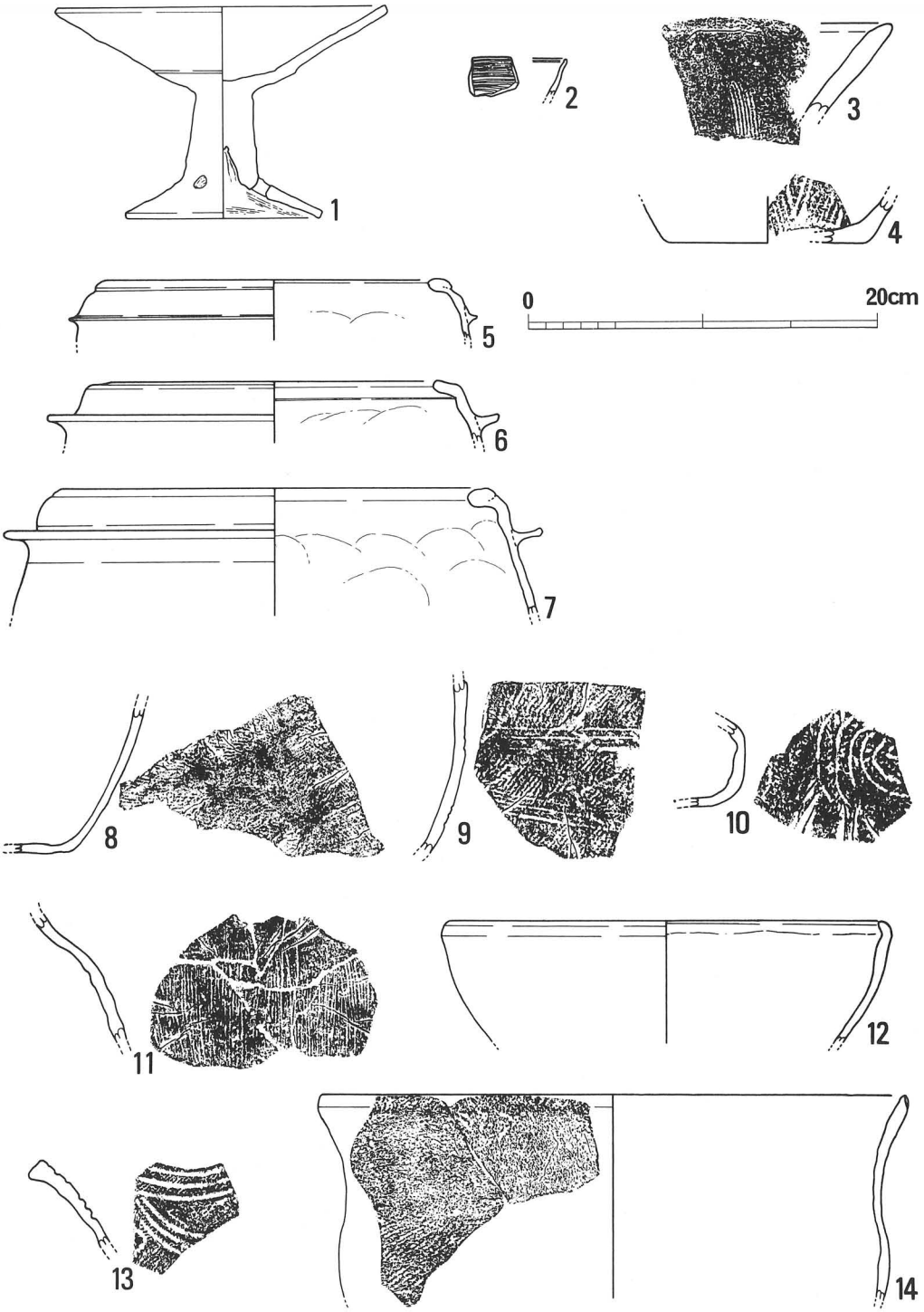


図４　出土土器実測図（S＝1／4）

淡赤褐色の色調を呈し、胎土な精良なものでは無く小石や砂粒を粗製品である。おおむね庄内期古相の時期が考えられる。

上部包含層（暗灰褐色～暗茶褐色粘土質）出土土器

2は瓦器腕口縁部の小片である。口縁端部には一条の浅い沈線が見られる。内外面ともにヨコ方向の丁寧なヘラミガキ調整が施される。3・4は瓦質土器摺鉢の破片である。口縁部のみ残る3は端部か丸く、内面側には内傾した面をもつことが特徴的である。内面に7～8条を一単位とした摺り目が残る。底部小片の4には内面の摺り目のみ看取できる。他は、摩擦のため調査手法は看取できない。5～7は土師器羽釜である。いずれも内傾した後に内方にのびて端部を折り返す口縁端部形態を示すもので、肩部に幅の狭い鍔を巡らしている。5の鍔は短く、断面三角形に突出するタイプである。6は口縁端部が内側に屈曲するものの先端に折り返しによる巻上げはみられない。7は口縁端部が5と共通するが、やや大型で鍔は長く突出し端部に面をもつ。これらの羽釜の内面はいずれも円形の輪郭を残す板ナデ調整が施され、薄く仕上げられる。また、胎土もキメの細かい黄白色を呈する点で共通し、3点とも概ね15世紀前後の時期に帰属するものと考えられる。

下部包含層（茶褐色砂土）出土土器

8～10は縄文土器である。若干量の中期の土器片を含むが、ほとんどは後期の擦り消し縄文の土器片で占められており、コンテナ1箱程度の量で出土している。8～11および14は深鉢、12と13は浅鉢である。いずれも部分的に残る破片である。

8は底部片である。外面にはタテ方向に細かい羽状縄文が施文されている。9は外面に三条を一単位とするヨコ・ナナメ方向に巡る沈線が施され、地文は斜行縄文である。10はキャリパー型の口縁部の中央に配置される文様が残る破片である。同心円に沈線を施し内部には地文の斜行縄文が残るが、この区画外は擦り消しにより縄文を消している。11は外面にタテ方向の刷毛目様の調整が残るが頸部付近ではヨコナデにより刷毛目様調整は消されている。おそらく植物の茎のようなものによる施文原体が推定できよう。12は無文仕上げの精製品である。内外面ともにヨコ方向のナデ、ヘラミガキによる調整が加えられている。13は関東地方の堀ノ内様式の影響が考えられるもので、斜行縄文による地文を施した後直線あるいは弧状の深い沈線によって区画をおこない、区画外を擦り消し仕上げするものである。14は口縁端部に刻み目、外面頸部以下を斜行縄文の施文で仕上げた粗製品である。（青木）

まとめ

今回の調査では遺構は検出されなかったが、小面積ながらも各時期の資料を得ることができた。特に縄文中期末～後期の遺物包含層の確認は、当該時期の遺物の散布が東方の東部山麓の尾根上にまで及ぶことを示唆する資料として評価できよう。今後も丘陵上の調査の際に留意しておく必要がある。（青木）

柳本藩邸遺跡（第５次）――柳本町

Ⅰ　調査の契機

天理市の南部、柳本町には織田有楽斎を初代藩主とする織田藩の陣屋跡がある。現在は柳本小学校の校庭に利用され、藩邸屋敷が残っていた頃の面影を見るよしもないが、僅かに残る石垣にかつてを偲ばせてくれる。ところで昭和63年度に調査した第４次調査地点では藩邸に伴う石垣の跡を検出し、築造が19世紀の天保年間にあたる可能性を指摘した。しかも石垣を構築する以前には谷筋状の落ち込みがあり、17～18世紀にかけて藩邸の景観が石垣を築いた19世紀以降とはかなり違う点が求められ、また谷筋状の落ち込みが柳本黒塚古墳の南側を区画した周濠部とも地形的に見合

図１　調査区位置図（S＝1／2500）　※数字は調査次数を表わす
1. 昭和56年度調査地点　2. 昭和59年度調査地点　3. 昭和61年度調査地点　4. 昭和63年度調査地点　5. 平成２年度調査地点

い、旧地形の把握が同遺跡の検討に極めて憂慮すべき問題であった。調査は第4次調査区の北側に隣接する公園で遊具を設置するため、平成2年8月6日～8月30日まで発掘を行った。

Ⅱ　調査の結果

長さ31m、幅6mの調査区を南北に設定した。調査区の南端は、第4次調査で検出した石垣まで延ばした。土層断面による観察では公園を造成する際に1mの盛土をおこなっていた。その直下から旧地表面を検出した。調査区は公園の地表面からおよそ3.5m（標高77.7m）まで掘り下げをおこない、旧地表面から掘り下げまでの間に厚く堆積した黒色粘土層とおびただしい砂層を検出した。

第4次調査区で検出した藩邸屋敷が標高80mの尾根筋地形に立地していたのに対して、第5次調査地点は標高77.7mまで掘り下げても黒色粘土層と砂層が堆積しており、谷筋状の地形であることが断定できる。しかし調査区では谷底まで掘り下げることができず、近世より古い時代の堆積層や包含層を検出することができなかった。かなり深い落ち込みであることが指摘できる。

出土遺物は全て近世の遺物に限られ、土器では伊万里の染め付け椀や皿、土師器、木製品では下駄、組物の部材、水生昆虫の遺体などがある。

ところで第5次調査から判明した谷筋状の地形は、藩邸屋敷が立地する尾根筋と柳本黒塚古墳が立地する尾根筋（図2）との間に位置する。石垣を備えた陣屋を構築する際に地形を改変しており、18世紀までは起伏の険しい地形の状態であったらしい。また谷筋には厚く粘土層が堆積しており、溜池に利用していた可能性がある。柳本黒塚古墳には周濠の存在が指摘されているが、現状の景観は19世紀以降のものである。おそらくは尾根筋を断ち割った掘り割りで後円部を区画し、墳丘の両側面は谷筋地形で区画していた可能性が強い。

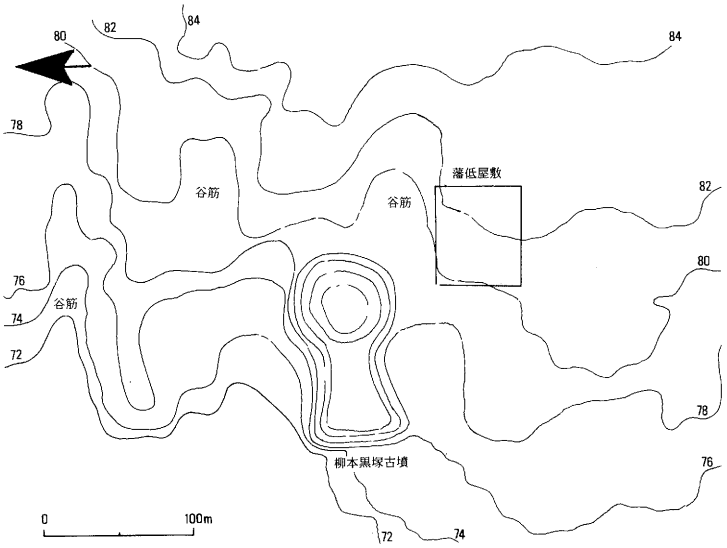


図2　17・18世紀の柳本藩邸と柳本黒塚古墳の旧地形推定図（S＝1／5000）

平成3年度
(1991年)

石上・豊田古墳群狐ケ尾6・7号墳――石上町

Ⅰ　調査の契機と経過

本調査は、天理市水道ガス局による天理市石上町1212番地の2に所在する、県水石上区配水池の拡張工事に伴う発掘報告である。

工事面積は2694㎡におよび、当該地の踏査により円墳2基、古墳状隆起1基が確認された。このため平成3年度事業として、平成3年6月3日に調査を開始し、平成4年2月19日に終了した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

石上・豊田古墳群は、これまで名阪国道岩屋インターチェンジ工事等により約30基近くの古墳が調査され、同古墳群についての理解が進んだ。

今回の調査地点は、豊田山丘陵の一角に築造された狐ケ尾支群の東端に位置し、尾根最上部には、東西に主軸を持つ全長約30mの前方後円墳が所在する。

古墳の名称については、同支群が昭和25年に奈良県教育委員会により、1号墳から5号墳まで調査が実施された。このため、奈良県遺跡地図登載の8B－240を6号墳とし、新たに確認された古墳を7号墳とする。古墳状隆起は調査の結果、自然丘陵であった。

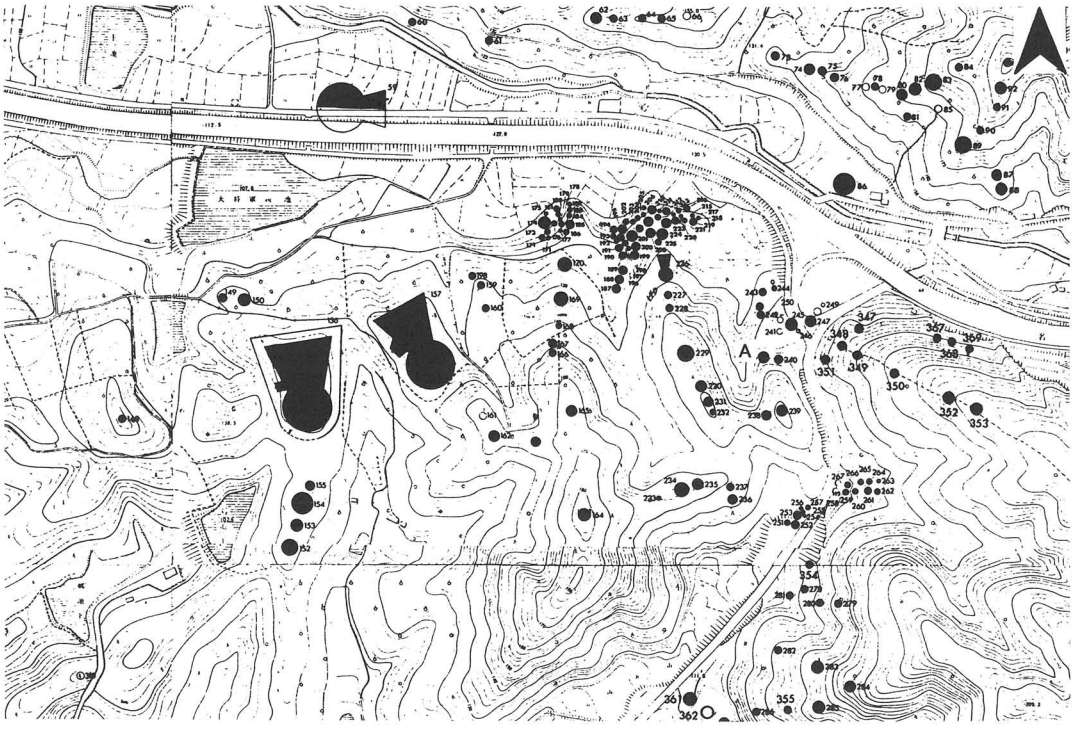


図1　石上・豊田古墳と調査古墳（240 A）位置図

Ⅲ　調査の概要

6号墳

丘陵頂部より北に延びる尾根筋に築かれ、標高は墳頂部で153mを測り裾部では149mである。

調査前の古墳の状況は、東西約20m、南北約17m、高さ約4mの円墳である。尾根筋を切断して整形しているため、南側は円周を描かず直線的なラインを呈している。墳丘中央部は、盗掘によると思われる大きい凹地が南方向に開口し、奥には石材が露出している。

調査は墳丘中央に東西南北に観察用土堤を残して、墳丘盛土を露出させ、あわせて凹地に堆積した土砂を取り除いて石室の検出に努めた。この結果、南に開口する横穴式石室を確認し、さらに墳丘上において西南区では竪穴系小石室を2基確認することができた。

そして、石室および墳丘の検出作業後、石室の撤去および盛土の除去を進めて古墳築造の工程について検討を行った。

横穴式石室は、南へ開口する片袖式石室である。このため開口方向が山側を向くという特異な方向をもつことになる。

石室は全長約8.1m、玄室長約4.2m、幅約1.7mである。高さは床面石敷から2.1mを測る。羨道

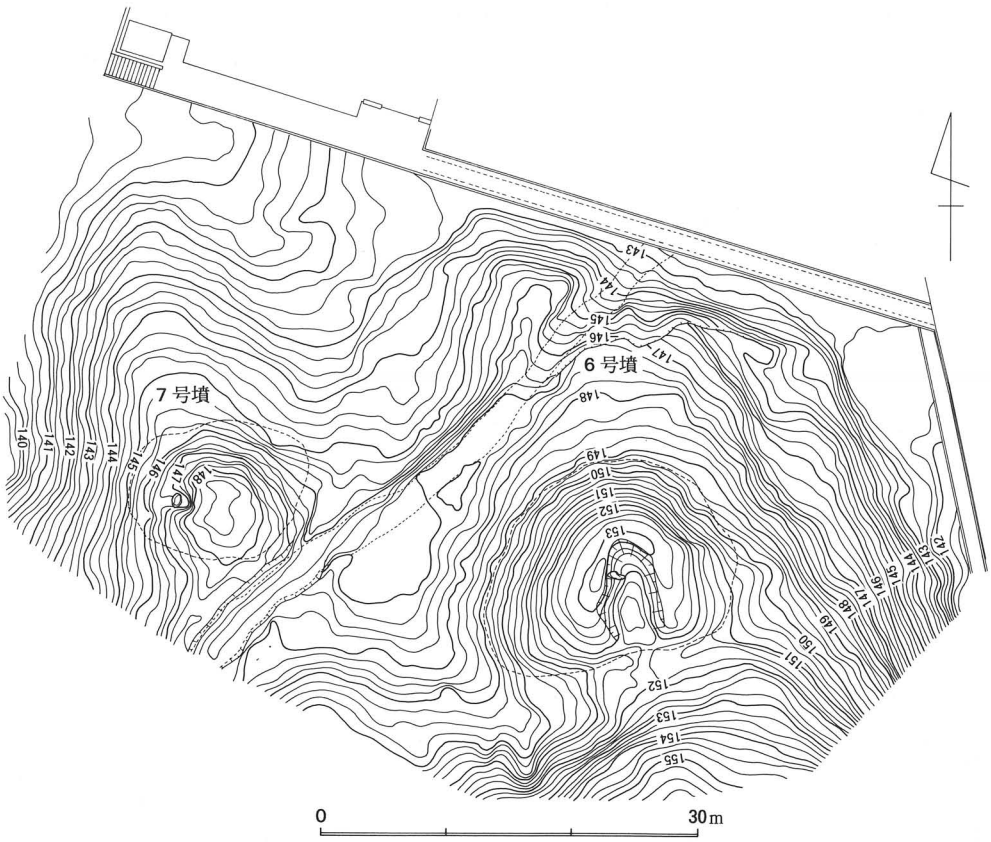


図2　石上・豊田古墳群6, 7号墳現況実測図　(S＝1／600)

部では約3.9m、幅1mあり入口部で広がる。天井石は2枚残る。石積みは玄室奥壁、側壁部は完存し、基底部から1～2段目は大型の石材を用いるが、これより上部は小型石材で積まれる。石材は自然礫そのものであり、加工は加えられていない。床面は玄室部全面に、偏平な石材で敷かれているが、羨道部については明らかではない。また敷石を除去すると墓坑底部とのあいだに約20～30㎝の整地土が充塡されている。

排水施設：石室内羨道部のほぼ中間地点より南へ延びる暗渠排水溝と、さらに墳丘裾部に沿うように東西の2方向にも同類の施設が検出された。いずれも自然礫石を使用して、両側面と天井石を蓋石としていた。石室内の溝の長さは約4mである。この溝と東西方向の溝が交差する地点には一回り大きい石材を蓋石として使用されている。東側の長さは約12mあり、これよりさらに東方向へは素掘溝が八字状にひろがりつつ、谷間へと落ち込んでいる。

図3　6号墳石室平面図　(S＝1／80)

西側の排水溝は長さ約14m以上あり、これより以西については素掘溝となっている。また、羨道から延びてきた溝との交点から西へ約5mで2つの流れに分岐し、9m地点付近でまた合流し、一本の溝となるといった特異な構築方法をとっている。

東西に分岐した石組溝底の高低差は西側の方が約30㎝程度低く、排水の実際上の機能は西側のも

のによっていると考えられる。また、この高低差は、排水溝の施置が西側から構築されたことを示している。

墓坑と墳丘：墓坑は丘陵尾根の、石室を構築する部分について、約2mの高さで削り出され中央部に、南北7.2m、東西4.2m、深さ2mの長方形に穿たれていることが判明した。これは、見かけ上の墳丘高が4mであることと比較すると、墳丘盛土を事実上2mに抑制することができる工法上の技術であろう。

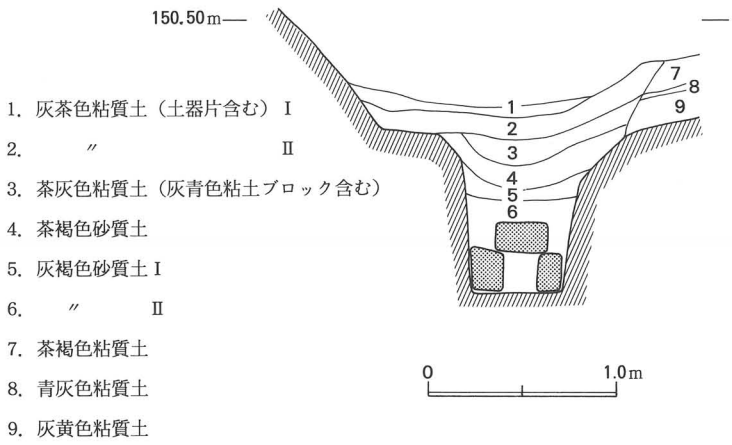


図4　石室前部暗渠排水溝断面図　（S＝1／80）

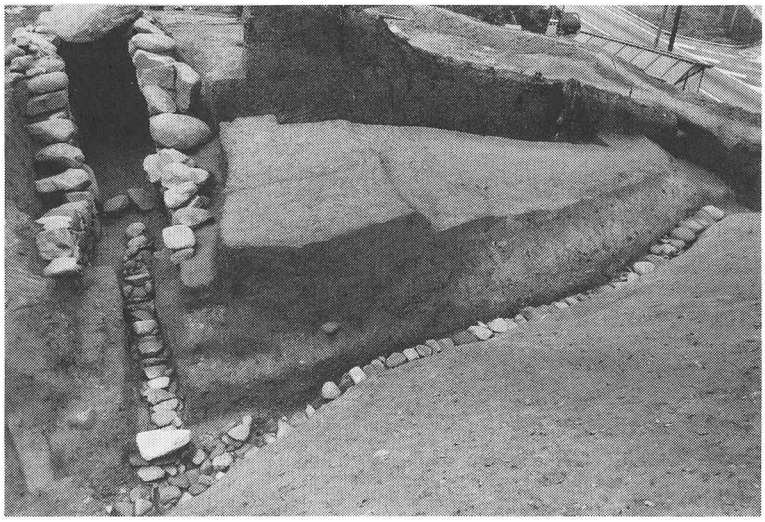


写真1　　石室内排水溝と東側排水溝

墳丘の状況は、奥壁部でみると、奥壁を構成する石材のうち基底石から3段分は、墓坑掘形内に据え置かれ、これより上部については、墳丘盛土により覆土されている。両側壁についても同様の工程が観察されている。

また、墓坑のラインと奥壁および両側壁の据え置かれた地点をみると、西側で余裕のある空間が存在しており、石室石材は西側より搬入されたものと推測される。

盛土の状況は、墳丘墳頂部までは約2.5mの高さであるが、この間は10層程度に分層でき、各々は30～40㎝の厚みにより砂を交えた粘質土と、粘質土の互層積である。盛土は手作業により上部から排土を行ったが、盛土内および、地山検出面からは焼土や祭祀跡などは確認されなかった。

墳丘裾部は各辺に残した観察土堤における状況と現状の裾部が良く一致しており、旧状を保存しているものと判断される。

遺物出土状態：玄室部両側壁側と袖部において須恵器高杯、長頸壷、蓋杯身、土師器椀が集中して出土した。奥壁部においては土器類は少量で、馬具轡部分が出土した。しかしこの他の鉄製品は

小破片である。

羨道部においては、須恵器高杯、蓋杯身、長頸壷などが出土した。また埋土中および羨道入口、閉塞石付近からも須恵器、土師器類、鉄釘、耳環、鉄滓などが出土した。これらは原況を留めるものはない様である。

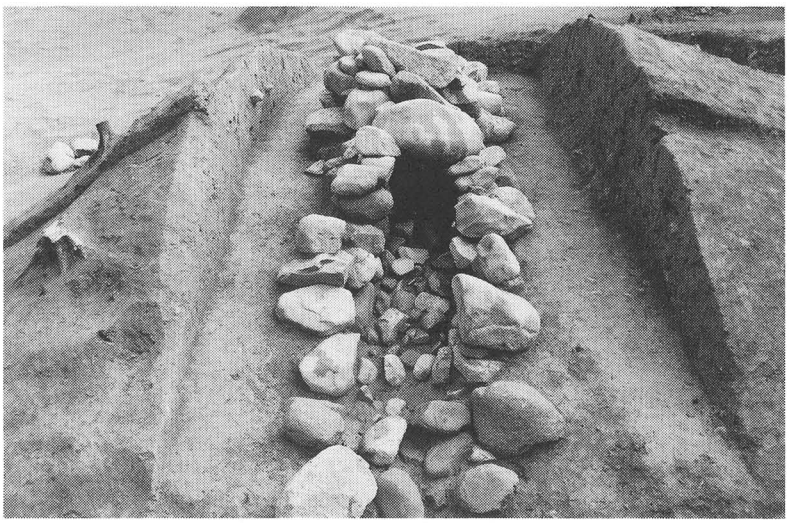


写真 2　　7 号墳石室検出状況

出土遺物：石室内および埋土内から以下の種類と数量が出土した。

須恵器蓋杯身とも 39、壷 5、脚付壷 4、高杯 4、瑕1、土師器高杯 4、杯・椀類 7、耳環 3 などがあり、この他に鉄滓 20 個以上と鉄釘も多数出土した。

また須恵器は 2 型式が認められ、追葬は TK209 型式に比定される。

竪穴系小石室：墳丘西南区の頂部付近くで築かれていることが、盛土排土作業中に確認された。2 基とも 6 号墳の盛土が完成した後に墳丘上面より石室土坑を穿っていることが判明した。

1 号小石室は南北 1.5m、幅 50㎝あり、小礫石の 2 段積である。天井石の確認はできなかった。

2 号小石室は南北 2.3m、幅 75㎝あり 4 段の石積みが行われている。1 号、2 号小石室とも遺物は出土していない。

7 号墳

7 号墳は 6 号墳の西側に隣接するが、今回の踏査によって新たに確認された古墳である。標高 146 m の地点に位置し、墳形は改変を受けて旧状を留めていない。

石室は西側に開口する横穴式石室が認められ、墳頂部も石材が露出する。現況測量によると、東西約 15m、南北約 13m を測り、高さは約 2.7m である。

検出された横穴式石室は、全長約 6.5m あり、玄室部長 2.6m、幅 1.5m である。羨道部は、長さ 3.8 m、幅 1m あり、平面形態は長さに比べて幅が狭いため長細い形態を呈している。

石室内床面は敷石はなく、玄室内に北側に偏して上面を平坦にした細長い石材が 3 個置かれていた。

遺物出土状態：遺物は、須恵器杯、壷、瑕が奥壁際に集中して置かれ、また、玄室袖部、羨道部でも若干見られた。

出土遺物：須恵器類では、蓋杯身7、鐙2、壷1、提瓶1、土師器壷2、椀5などがあり、この他鉄釘などがある。須恵器はTK 43型式に比定され6号墳と同時期に見られる。

Ⅳ まとめ

以上が6・7号墳の調査の概要である。両古墳の築造時期はTK 43型式に比定され、6号墳は追葬されている。また、6号墳は石上・豊田古墳群の中で調査されたもののうち、最大規模の石室である。石室内部の床面敷石や暗渠排水施設も石組によっていて、丁寧な作業である。

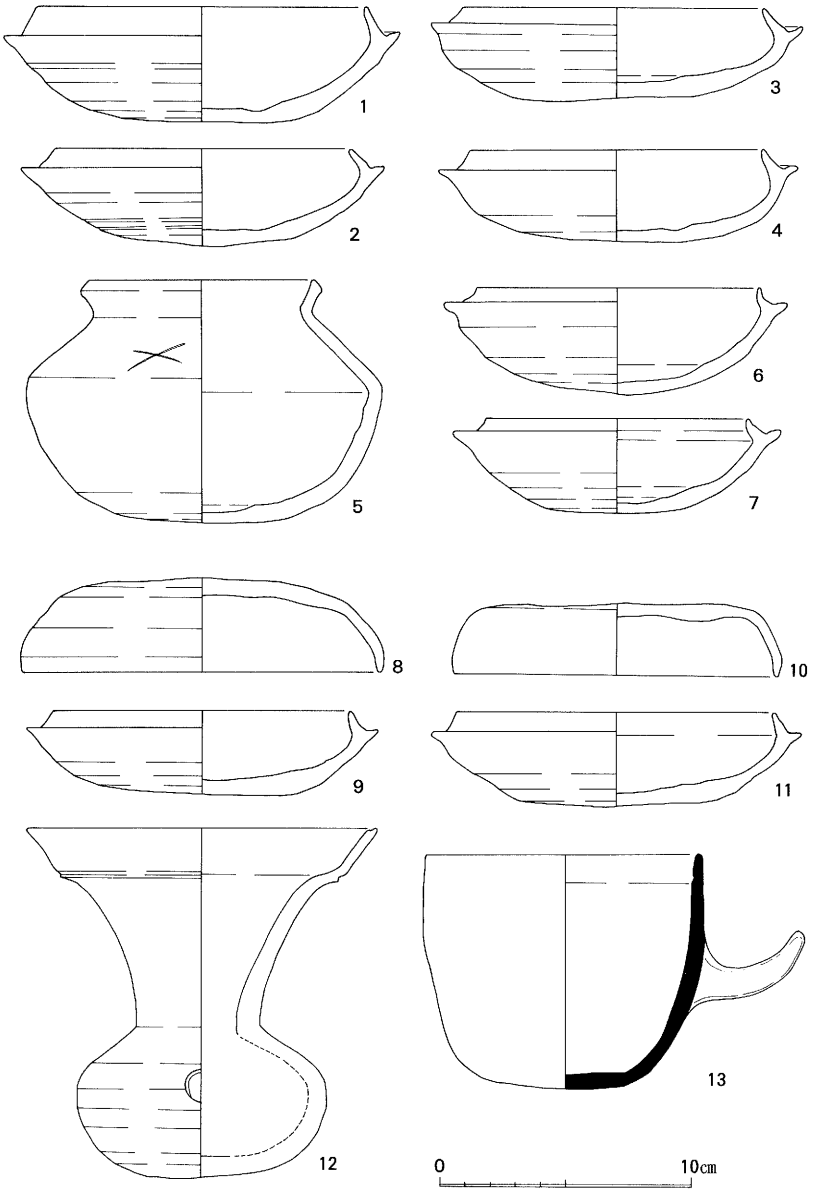


図5　6号墳石室内出土土器（1～7）、7号墳石室内出土土器（8～13）（S＝1／3）

出土遺物では鉄滓の存在が上げられる。同古墳群内では石上支群北B9号墳に次ぐ出土量で古墳被葬者、あるいは造墓集団の性格を追求する有力な遺物と考えられる。また墳丘盛土について、上部から除去し、盛土の状況および石室築造過程の資料を得ることができた。詳細については報告書に依りたい。

別所遺跡（第２次）――別所町

Ⅰ　調査の契機と経過

天理市立北中学校の校舎増改築工事に伴う事前調査を、別所遺跡第２次調査として平成２年５月10日から同月21日まで実施した。当該地は、校舎の北側にあたり、用務員室と自転車置き場に挟まれた約250㎡の面積を有する。整地土が相当あるものと予想されたため、東西10m、南北4mで40㎡の小面積の調査区を設定し、他は土砂置場とした。

Ⅱ　調査の概要

調査は、地表面から手掘り作業で進めたが、非常に堅く締まった整地であり遺構検出まで困難を極めた。土層は、地表面から60～70㎝までは３回の整地土があり、下部からは木材の破片などが出土した。そして第４層は、灰青色粘質土の旧耕作土層である。このことは、当校建設に際しては土の掘り返しなどは行われていないことが明らかである。第５層は床土である。この面を取り除くと黄褐色粘質土の地山面が検出された。

遺構は、図示したように南北方向の素掘溝８本と東西溝１本を検出した。

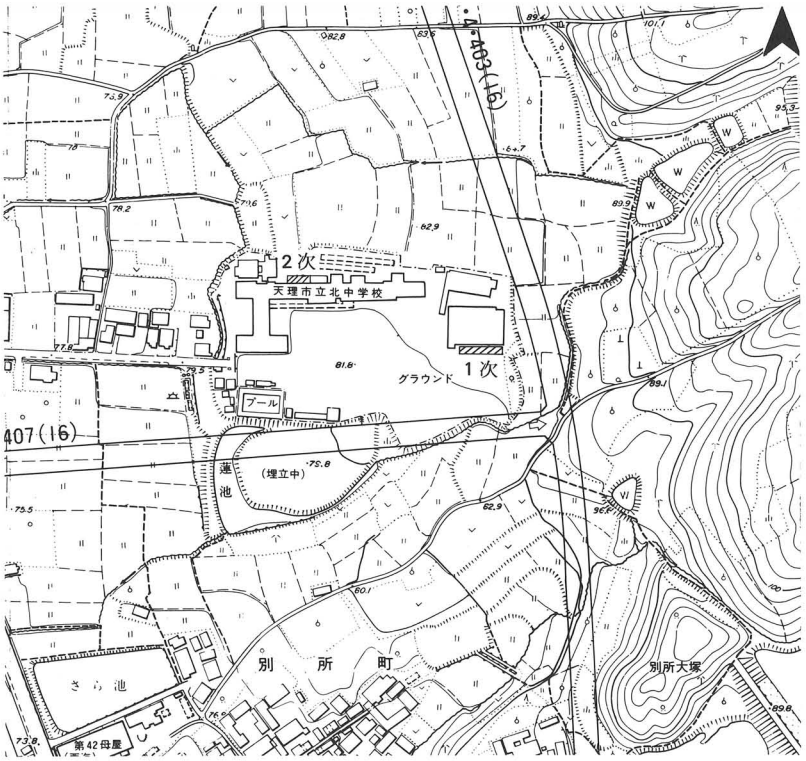


図１　別所遺跡調査地　（S＝1／2000）

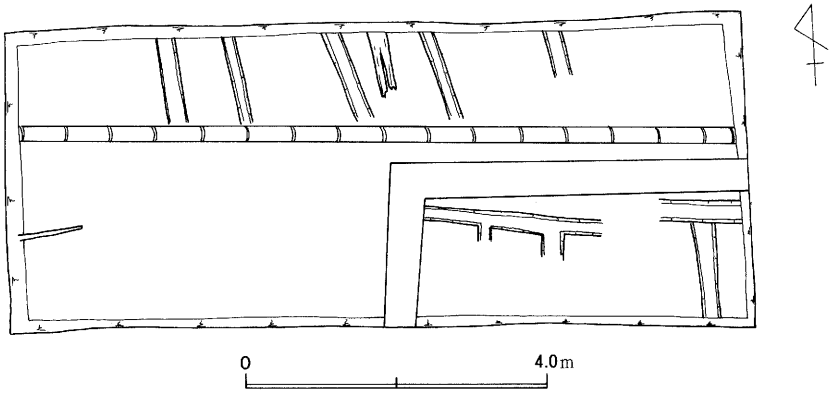


図２　別所遺跡（第２次）検出遺構平面図　（S＝1／100）

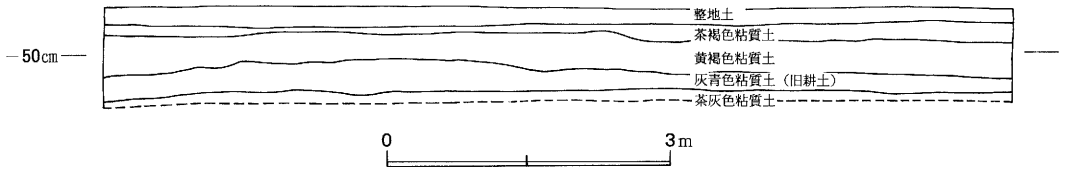


図３　トレンチ北面土層図（S＝1／40）

遺物は、床土内の包含層から円筒埴輪片、土師器、須恵器片などが少量出土した。

Ⅲ　ま　と　め

別所遺跡の第２次調査は小面積であったため、素掘溝以外の遺構は検出されなかったが、当校建設時には旧表土を掘削せず盛土による整地であるため、遺構が存在すれば破壊されず残っていることが十分予想された。特に今回埴輪片が出土したことにより、古墳が存在していたことは明らかであろう。

平等坊・岩室遺跡（第8～10次試掘）――平等坊町・岩室町

Ⅰ　はじめに

平等坊・岩室遺跡は、平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生時代の前期間を通じて営まれた集落遺跡である。これまでの調査により、弥生前・中・後期の各時期に集落の周囲を囲郭する環濠の存在が確認されており、奈良盆地東部における拠点的な弥生集落として確認されている。

平成3年度、当遺跡地内において開発面積約1000㎡のこれまでにない大規模なマンション建設に伴う調査（第8次調査）が実施されることになり、より一層集落内部の状況や環濠集落の変遷過程等を追求可能な状況となった。次いで公共事業や民間開発も活発化し、当遺跡における調査件数は年々増加しつつあるため今後も継続的な調査により遺跡の様相が明瞭となるものと思われる。

Ⅱ　第8次調査（西調査区西半地区）

調査地：平等坊町176番地他　　**調査原因**：大規模マンション建設

調査期間：平成3年4月12日～平成3年12月25日　**調査面積**：約2000㎡

平成3年度は、調査地の西半分について実施し、年内はその北半の調査を進めた。

主要な検出遺構：弥生前期後半～後期末の各時期の環濠を形成する大溝群（計11条）や井戸・土

図1　各次調査位置図（S＝1／5000）

坑・柱穴・貯蔵穴・竪穴住居等の生活関連遺構が検出されている。大溝には、掘り返しや溝浚いがされたものもあり中期に顕著に認められる。後期では、内堀相当の溝のみに断面V字形が見られるが、外堀担当の溝は逆台形の断面形状となり最終埋没時期も若干時期的に下るという違いを見せている。

出土遺物：各大溝の様相のみ記す。前期末～中期初頭では土器の出土はまばらである。中期全般では群単位での遺物の出土が目立ち前代と同様に完形品は少なく破片主体である。また、獣骨や木製品が多くなる傾向を示す。後期には大溝の上半部に完形土器が大量に廃棄された状況で出土している。これら各時期の土器には、他地域からの搬入品や外来影響のものも多く見られる。時期的には中期後半以降に多くなると考えられる。ほかに、大量の石器類や木製品が出土している。

Ⅲ　第9次調査

調査地：岩室町 42-1 番地　　**調査原因**：溜め池改修

調査期間：平成3年11月5日～19日　　**調査面積**：約 120㎡

第9次調査は、当遺跡推定範囲の東端部に該当するため範囲確認の必要から実施した。調査はヒライ池の南岸に幅 1.5m、長さ 60m の東西に長いトレンチを設定しておこなった。現状の堤の下方で池の南縁辺に沿っての調査であったため、遺構面は大幅に削平を受けており、遺存状態も極めて悪い状況であった。調査区の東側で幅約 6m の大溝を検出しているが、深さ約 20cm 程度の遺存であり遺物も若干量の土器片の出土のみで明確な時期は不明である。この大溝のすぐ東側から東端にかけて基盤層である黄褐色粘土層が緩やかに下降し、途中から砂・シルトからなる低湿地の様相を呈していた。その上部に堆積した淡灰色粘土層からは弥生中期後半～末の土器片が出土している。

Ⅳ　第10次調査（試掘）

調査地：平等坊町 217-2 番地　　**調査原因**：集合住宅建設

調査期間：平成3年12月8日～27日　　**調査面積**：約 260㎡

第10次調査（試掘）は、遺跡の北辺部における範囲確認調査として実施した。調査は、調査地の東西に幅約 2m を基調とした南北 50m のトレンチを掘削し、遺物包含量の有無確認を目的として進め当該地における層序確認のみに務めた。しかしながら、東側トレンチでは湧水が著しく調査途中で断念せざるを得ない状況であった。西側トレンチでは、現地表面下約 0.5m で飛鳥・奈良～平安時代前半期を主体とし、若干の弥生前期および後期の土器片を含む厚さ約 25cm 程の遺物包含層を確認した。また、この包含層の直下で黄褐色粘土の遺構面を確認している。他に、トレンチ南端では自然河道を検出しており、土器片等は出土しなかったものの太型蛤刃石斧の完形品が1点出土している。これらの結果から当該地については平成4年度に本調査を実施し、すでに概報を刊行している。

海知遺跡――海知町・遠田町

Ⅰ　はじめに

天理市の西南部、海知町、遠田町、岸田町、長柄町にかけては旧海軍飛行場の敷地跡が残っている。太平洋戦争の勃発によって昭和18年に飛行場が敷設され、従来の条里水田が崩壊する一方で、地盤改良による土地改良からも多くの遺跡や古墳が破壊された事実がある。その土地改良がなされる際に、長柄町では弥生時代前期の遺跡が発見されていたが、所在地が未確認状態のままであった。

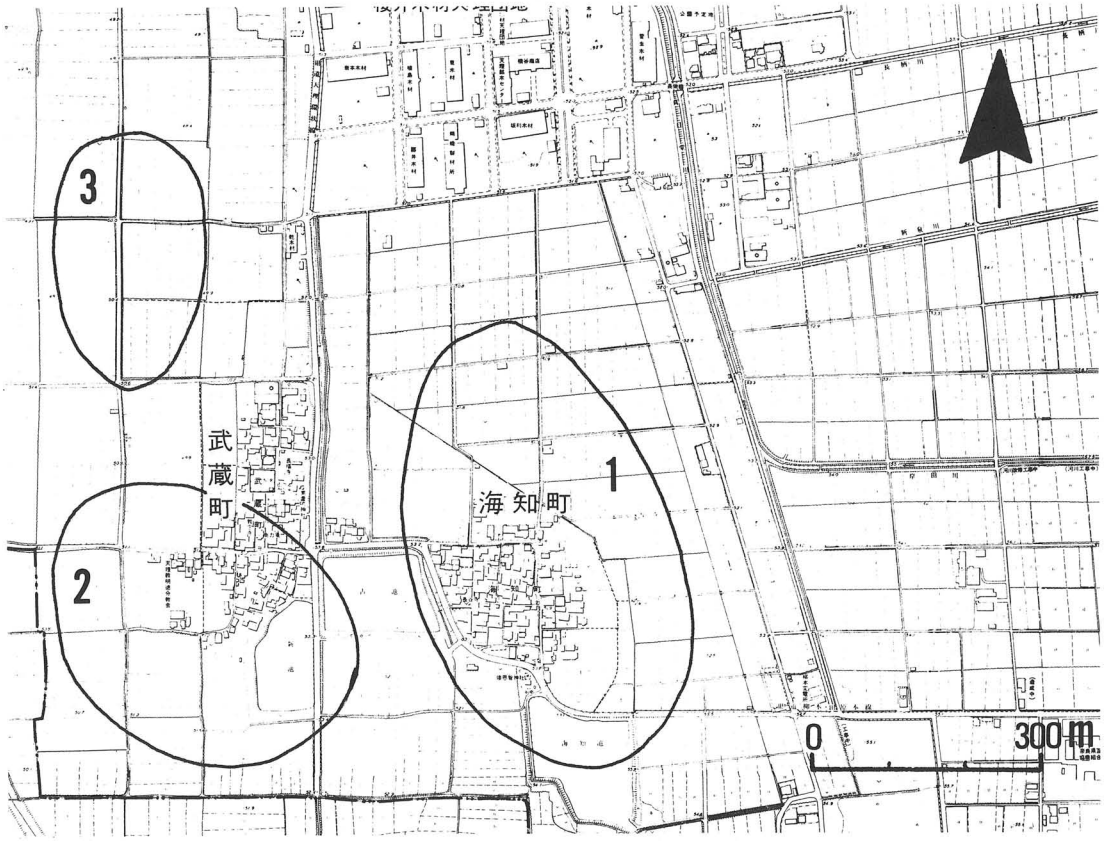


図1　遺跡の位置図（S＝1／10000）
1．海知遺跡(弥生)　2．武蔵遺跡(弥生)　3．散布地(平安)

旧飛行場の跡地に弥生時代前期の集落が存在していたのか、どうか伝承でしかなかった。天理市は平成３年度に海知町集落と旧飛行場の滑走路跡との間（遠田町）で、およそ30000㎡にわたる福祉ゾーンの計画を起こし、市教委が埋蔵文化財にともなう試掘調査を平成３年７月16日～10月15日まで実施した。調査では弥生時代前期を主体とする海知遺跡の存在が確認された。

Ⅱ　調査の概要

（１）　遺跡の立地と調査区の設定

海知遺跡は標高52mの水田地帯で見つかった奈良盆地のいわゆる低地性遺跡である。遺跡から西方2kmには田原本町唐古・鍵遺跡が所在する。また東方2kmでは盆地の東山麓に大和古墳群がある。唐古・鍵遺跡より平均して2～3m高い低地部で、現状は一面の水田地帯で視界が広らけている。大和川水系の初瀬川流域に立地した唐古・鍵遺跡に対して、海知遺跡は初瀬川流域の東側に位置しているため、はたして初瀬川流域の弥生集落なのか定かでない。旧飛行場が敷設されるまでは龍王山麓から派生した西門川が流れていた。遺跡が初瀬川の流域に立地しているのか、東側山麓から派生した小河川によって形成した地域なのか、検討材料である。よって調査区の設定は地形復元の検証を目的とし、南北300m、東西150mの予定地に第１調査区から第６調査区まで設定した。

（２）　基本土層

調査地点は標高52m前後の水田地帯で、東から西に向かって地形が傾斜しており、階段状に区画されている。試掘調査では開発予定地内の西部から南西部にかけて微高地を検出し、弥生時代前期の包含層を確認した。また敷地の東半部は弥生時代以前から古墳時代にあたる地形の落ち込みを検出し、自然河川の存在が明らかになった。

a）微高地　微高地は第１調査区の全域、第３調査区の西端部、第４－Ａ調査区の全域、第５調査区の西半部で検出した。基本土層図（第Ⅳ－Ａ調査区・柱状断面図）にしたがって説明すると、微高

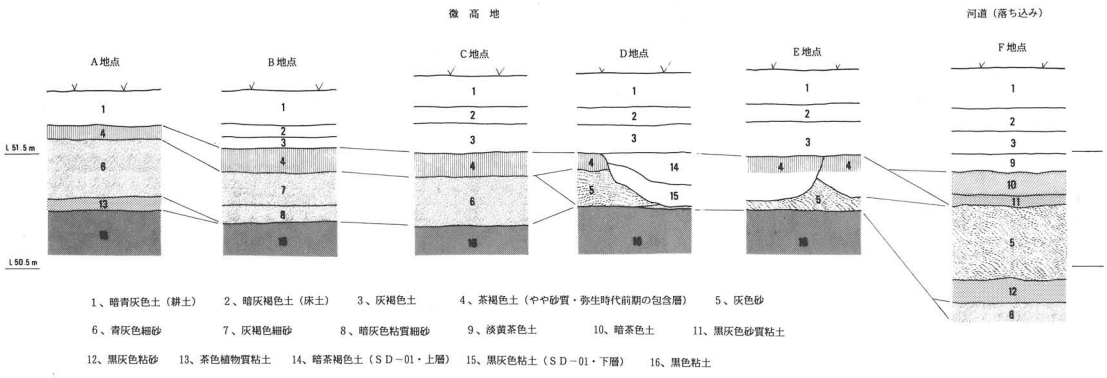


図２　基本土層図（第４－Ａ調査区断面）

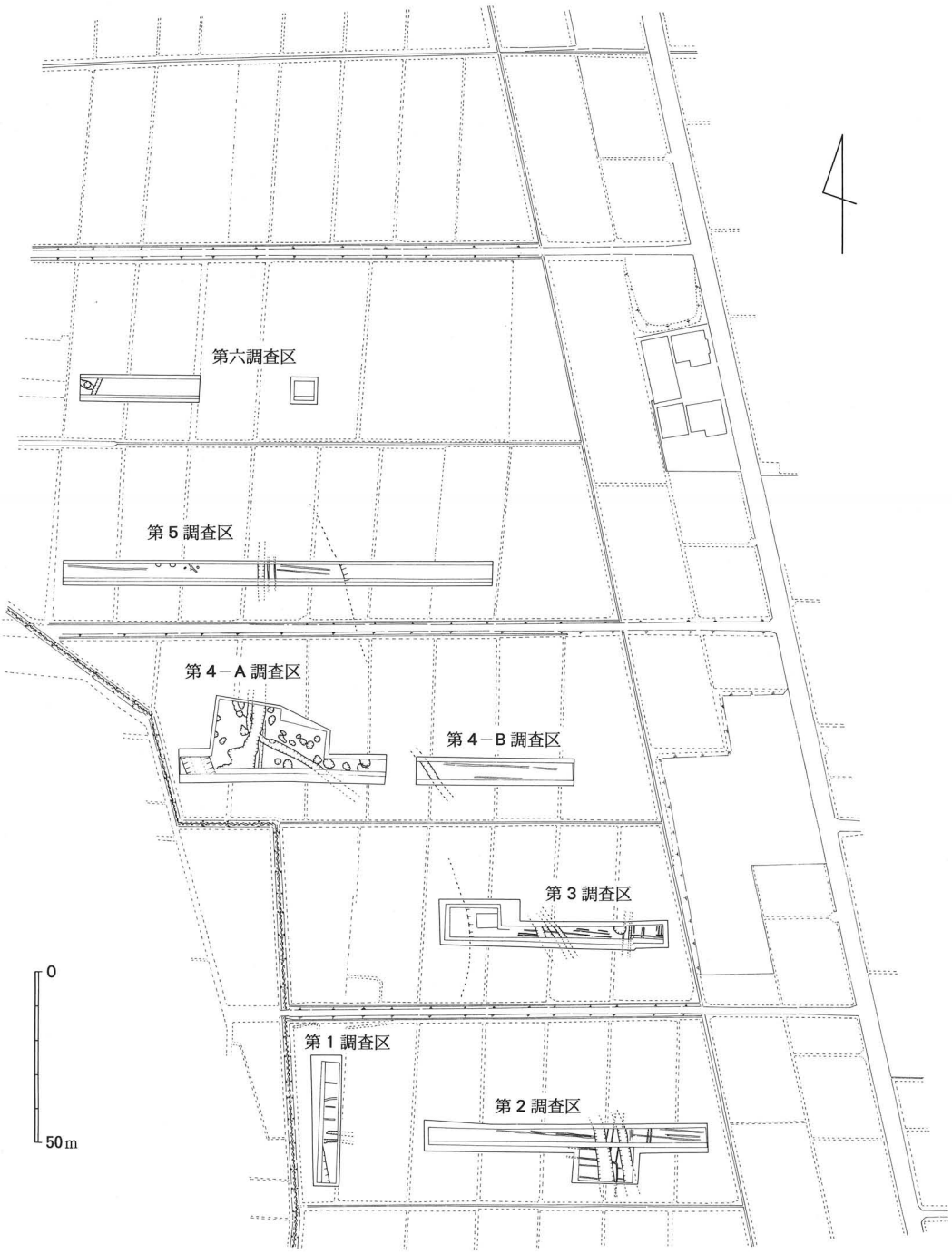


図3　調査区の位置図（S＝1／2000）

地では標高51m前後のレベルで粘りの強い硬質な黒色粘土（図2－16）が広がっている。その上に50cmほどの厚さで青灰色細砂（図2－6）を主体とする細砂層（図2－6～8）が形成している。弥生時代前期の包含量は細砂層を基盤にして、その直上にあり標高51.5～51.7mのレベルで検出している。また微高地の東側には自然河川が流れているため、基盤層が東に向かって緩やかに傾斜し包含層も基盤にしたがって下がっていく。第Ⅳ調査区の西端部（A地点）では黒色粘土と青灰色細砂との間に茶色植物質粘土（図2－13）が堆積しており、青灰色細砂が堆積する以前に腐葉土の形成を指摘することができる。黒色粘土（図2－16）を基盤にして樹林の存在が推測される。集落が立地する良好な地形は第1・4・5調査区からその西側に広がっている。特に第4調査区から第5調査区にかけては弥生時代前期の土器が多く含まれる包含層を検出した。遺跡の中心が同調査区の付近で広がっているものと推測する。

b）自然河川　微高地に沿って流れる弥生時代前期から古墳時代におけて自然河川の跡を第2調査区の全域、第3調査区のほぼ全域、第4－B調査区の全域、第5調査区の東半部、第6調査区で検出した。自然河川にはおびただしい砂層（図2－5）や砂を混じる粘土層が堆積し、第3・4・5調査区では弥生時代前期と古墳時代にかけての土器類が局部的に出土している。微高地の基盤をなしていた黒色粘土（図2－16）は河川部になく、むしろ同粘土層を方にして谷筋状の地形が落ち込んでいたように思われる。

第3調査区から第4調査区にかけて微高地が最も東へ張り出し、第1調査区から第2調査区にかけては逆に自然河川にともなう落ち込みが西より広がっている。また第6調査区では古墳時代の遺構を検出しているが、弥生時代前期の段階には全域が落ち込み、おびただしい砂層堆積をなしている。自然河川の水流部が蛇行しながら流れていた景観が推測される。

（3）　調査区について

A）第1調査区

開発予定地の南西部、幅7m、長さ38mにわたって南北に設定した調査区である。調査区の南端では飛行場が敷設されるまで流れていた旧西門川の跡を検出した。川跡は南西から北西方向に流れ、昭和初期の遺物が少量出土している。また調査区の中央部では東西に延びる東15条4里28坪と29坪との坪界を検出し、かつての水田地割り跡を確認した。坪界には2本の溝が並行して出土し、農道の両側を区画していた水路の跡と考えられる。溝は昭和初期の遺構と思われる。

地形的には青灰色細砂を基盤とする良好な微高地が広がり、わずかに弥生時代前期の土器片が出土している。

B）第2調査区

開発予定地の南部、幅8m、長さ82mにわたって東西に設定した調査区である。調査区の中央部で幅3～4m、深さ50cmの南北に延びる溝2本（図4、条里施行以前の溝）を検出した。よって調査区の南側を拡張した。溝は東15条4里29坪の南北坪界に偶然にも一致していたため、当初は条

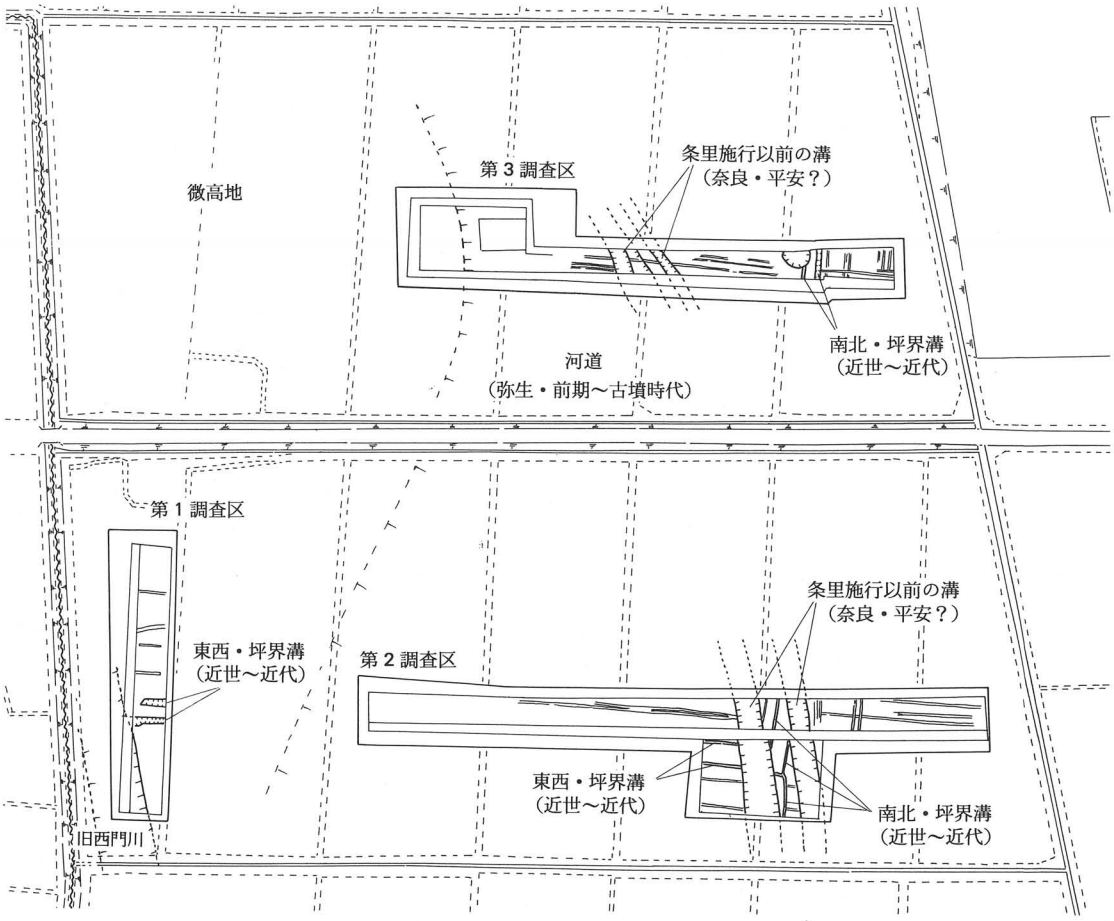


図 4　第 1～3 調査区遺構図（S＝1／1000）

里遺構かと思われた。しかし第 3 調査区から同溝が北西方向に流れる条里施行以前の遺構であることを確認した。溝から古墳時代から奈良時代にかけての遺物が出土している。条里遺構は第 1 調査区で検出した東西坪界溝の延長としてそれに直行する 29 坪と 32 坪との南北坪界溝を検出し、坪界の交差地点も出土した。遺構は坪界を区画する農道の両側に掘り込まれた溝で、昭和初期の遺構と思われる。古代・中世の条里遺構は検出していない。

地形的には調査区全域が落ち込み状の地形をなし、おびただしい砂層堆積は検出していないが、自然河川に含まれる。弥生時代前期の土器片は出土していない。

C）第 3 調査区

第 2 調査区から 50m ほど北側で幅 8m、長さ 68m にわたって東西に設定した調査区である。調査区の中央部では条里施行以前の溝を 2 本検出し、同溝が第 2 調査区から北西方向にカーブしながら流れていることを確認した。調査区の東部では東 15 条 4 里 28 坪と 33 坪の南北坪界を検出した。坪界には農道があり、その両側を溝で区画していた。昭和初期と思われる。

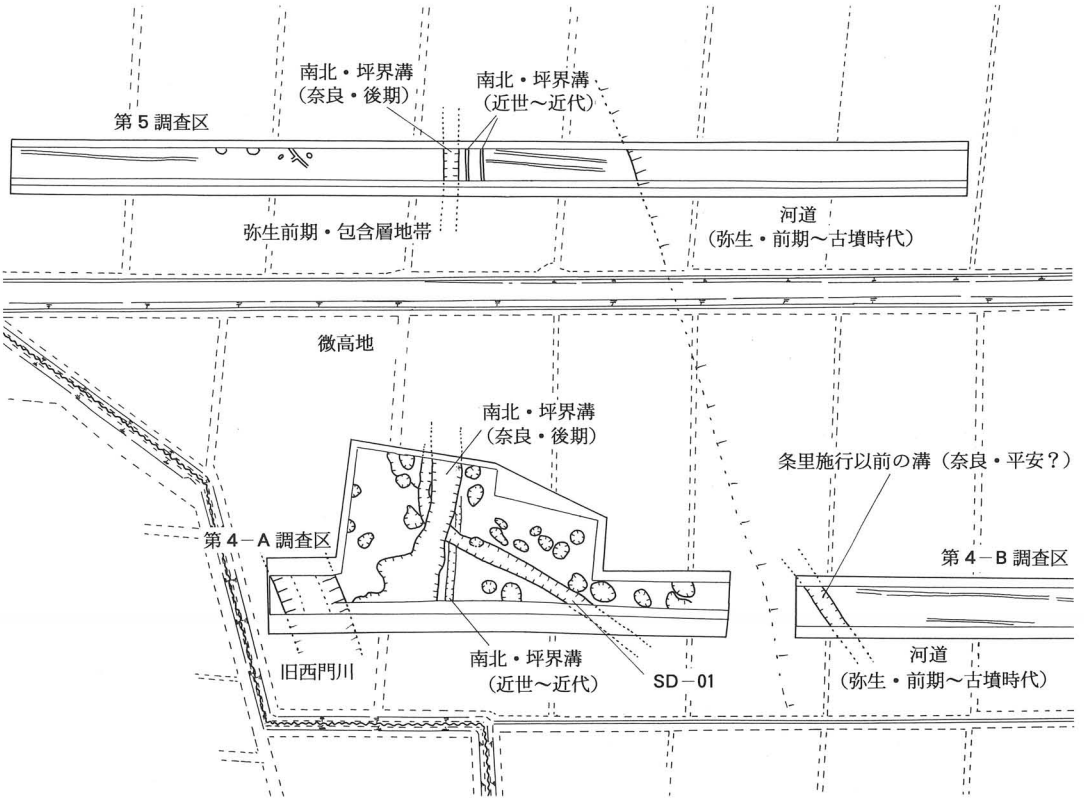


図５　第４～５調査区・遺構図（S＝1／1000）

地形的には調査区の全域でおびただしい砂層を検出した。第２調査区では砂層がほとんど目立たなかった点を考えると、第３調査区では河川にともなう水流部を検出したものと思われる。調査区の西端部では弥生時代前期の土器破片を含む粘土層を検出し、微高地の一部も確認した。また自然河川の様子を知るために、調査区を拡張し深く掘り下げ実施した。掘り下げ調査については報告書で明らかにしたい。

D）第４調査区

開発予定地の中央部、第３調査区から 40m ほど北側で幅 10m、長さ 60m の第４－Ａ調査区と幅 8m、長さ 45m の第４－Ｂ調査区を２カ所東西に設定した。第４－Ａ調査区では西端部で旧西門川の跡を検出した。また調査区の中央部では条里制にともなう東 15 条４里 22 坪と 27 坪の南北坪界を検出した。坪界の溝遺構には飛行場が敷設される直前まで機能していた幅 1m ほどの溝と、奈良時代の遺構と考えられる幅 4m、深さ 1m の大溝を検出した。

第４－Ａ調査区では良好な弥生時代前期の包含層を検出し、また同時期の溝（SD－01）や土坑を検出した。調査区を拡張し、遺跡の特徴を求めることにした。

第４－Ｂ調査区では調査区の西端で条里施行以前の溝を検出、第３調査区で検出した同溝の連なりを確認した。微高地とともに弥生時代前期の包含層を検出した第４－Ａ調査区とは違って、第４

－B 調査区では微高地を示す良好な地盤がなく、砂層堆積を主体にした自然河川にあることが明らかになった。

E）第 5 調査区

開発予定地の中央部、第 4 調査区から北方 50m に設定した幅 8m、長さ 125m にわたって東西に設定した調査区である。調査区の中央部では第 4－A 調査区で検出した奈良時代の坪界溝と近世から昭和初期まで使われていた坪界溝の延長を検出した。第 2・3・4 調査区で検出した条里施行以前の溝は第 5 調査区で出土していない。

地形的には調査区の東半部が自然河川にともない落ち込み、弥生時代前期や古墳時代にかけて土器が出土している。微高地は調査区の中央部から西端部にかけて広がり、弥生時代前期の包含層が広がっていた。調査区の西端付近は基盤層が徐々に高くなるため、後世の水田開発から削平をうけ、弥生時代前期の包含層は残っていなかった。

F）第 6 調査区

開発予定地の北部、第 5 調査区から北方 50m に設定した幅 8m、長さ 70m にわたる東西に設定した調査区である。地形的には第 4・5 調査区で検出した黒色粘土（図 2－16）を基盤とする歴然とした地盤がなく、弥生時代前期の微高地は同調査区までおよんでいない。逆に砂層堆積が目立ち自然河川地帯が広がっている。しかし調査区の西端部では古墳時代前期の溝と井戸が出土しており、地形の変化し従って生活可能な地盤へ発達している。井戸からは庄内期から布留期にかけての一括土器が出土している。同時期の集落が第 6 調査区の西端付近に立地している可能性がある。

（4） 弥生時代の遺構と遺物

A）第 4－A 調査区

第 4－A 調査区で弥生時代前期の SD－01 溝と土坑多数を検出した。よって試掘調査では同調査区の北側に東西 35m、南北 15m にわって拡張し、弥生時代の遺構について検討することにした。弥生時代前期の遺構は土坑 32 基、溝 1 本、地形にともなう落ち込みを 1 カ所、Pit52 基を検出した。検出した遺構から住居跡や柱並びを求めることは難しいが集落にともなう遺構と考える。

遺物整理中であるため遺構の全てを記述できないが、判明している遺構について時期を説明すると、弥生時代前期の中葉にあたる大和第Ⅰ－2 様式は SD－02・10・24・25、前期末の大和第Ⅱ－1 様式が SD－01、SK－03・17・19・20・22・23 で、SK－21・26 からは遠賀川系土器に混じって櫛描文を施文した広口長頸壺の破片が出土しており大和第Ⅱ－2 様式に位置ずけられる。弥生時代前期・前葉にあたる大和第Ⅰ－1 様式の土器は出土していない。おそらくは弥生時代の前期後半から前期末～中期初頭にかけて展開した集落遺跡と思われる。

a）SD－01・溝　調査区の中央部で南東から北西に延びる幅 2m、検出した深さ 40cm ほどの溝で、北西方向から北方へ溝の向きが曲がる。溝内の土層は暗灰色砂質土の上層と黒灰色砂質土の下層に大別でき、土器は上・下層から出土している。出土した土器には頸部に無文または 4～7 条の箆描

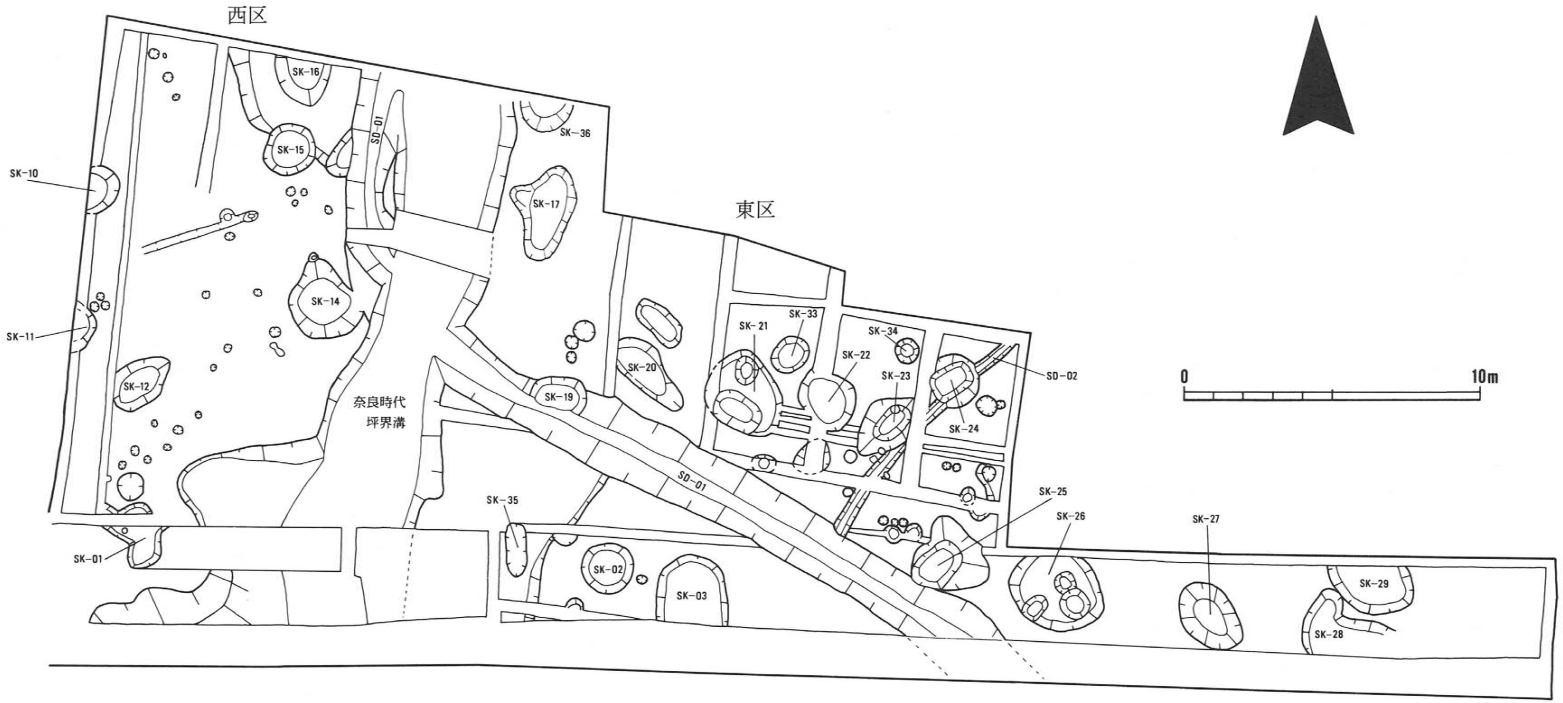


図6　第4－A調査区・弥生時代遺構図（S＝　1／200）

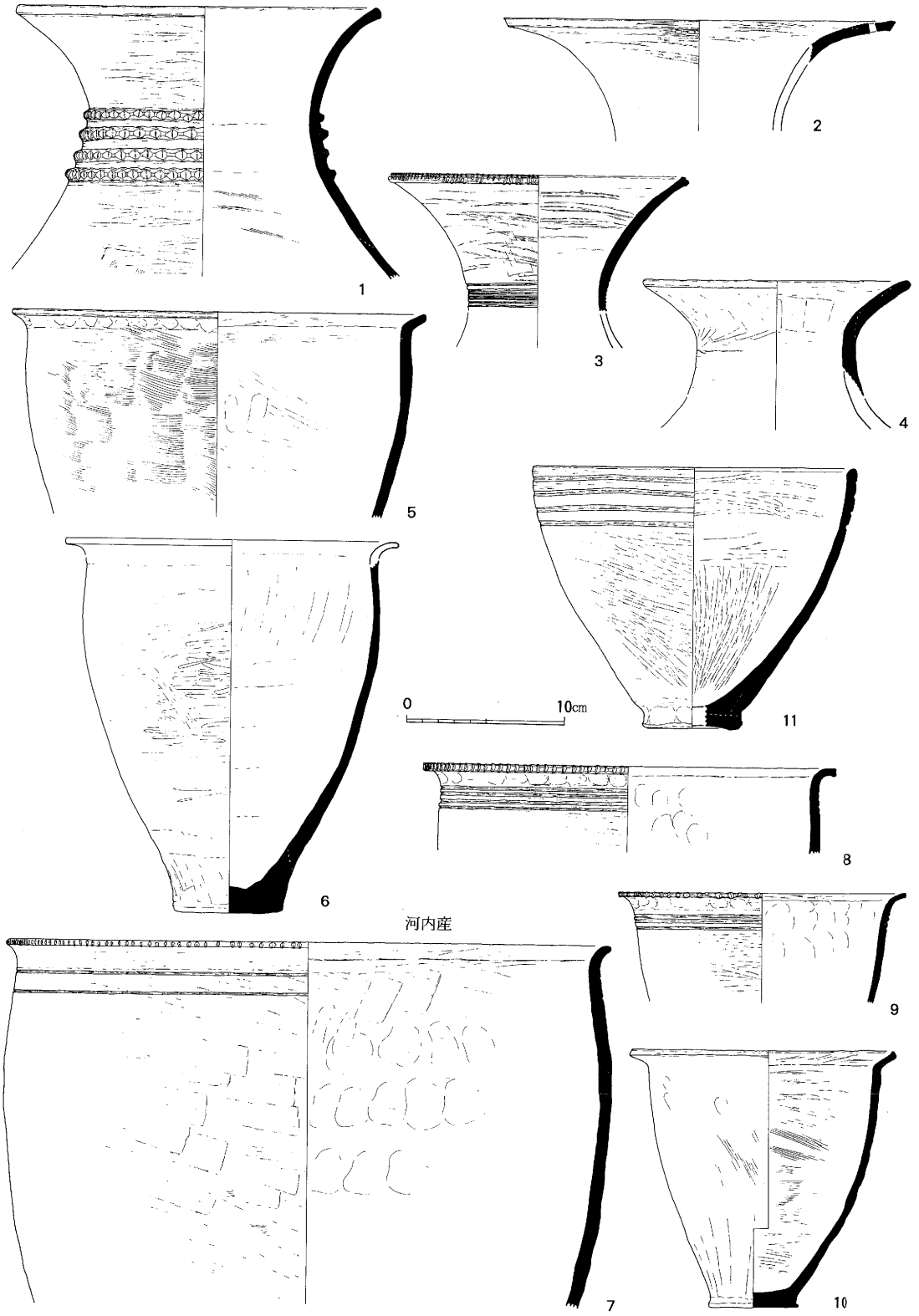


図7　SD-01 下層出土土器（S＝1／4）東区

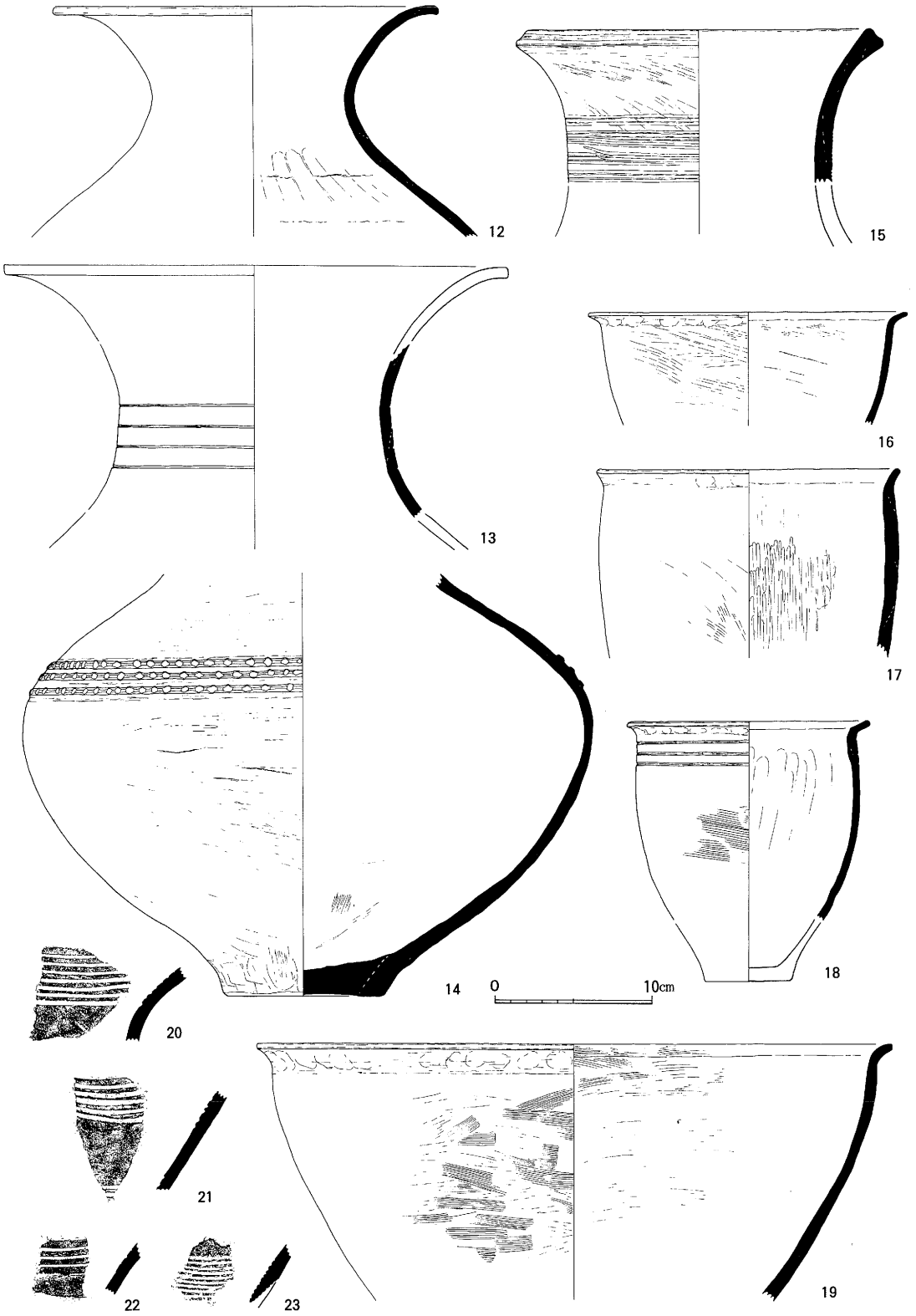


図8　SD—01 上層出土土器（S=1／4）東区

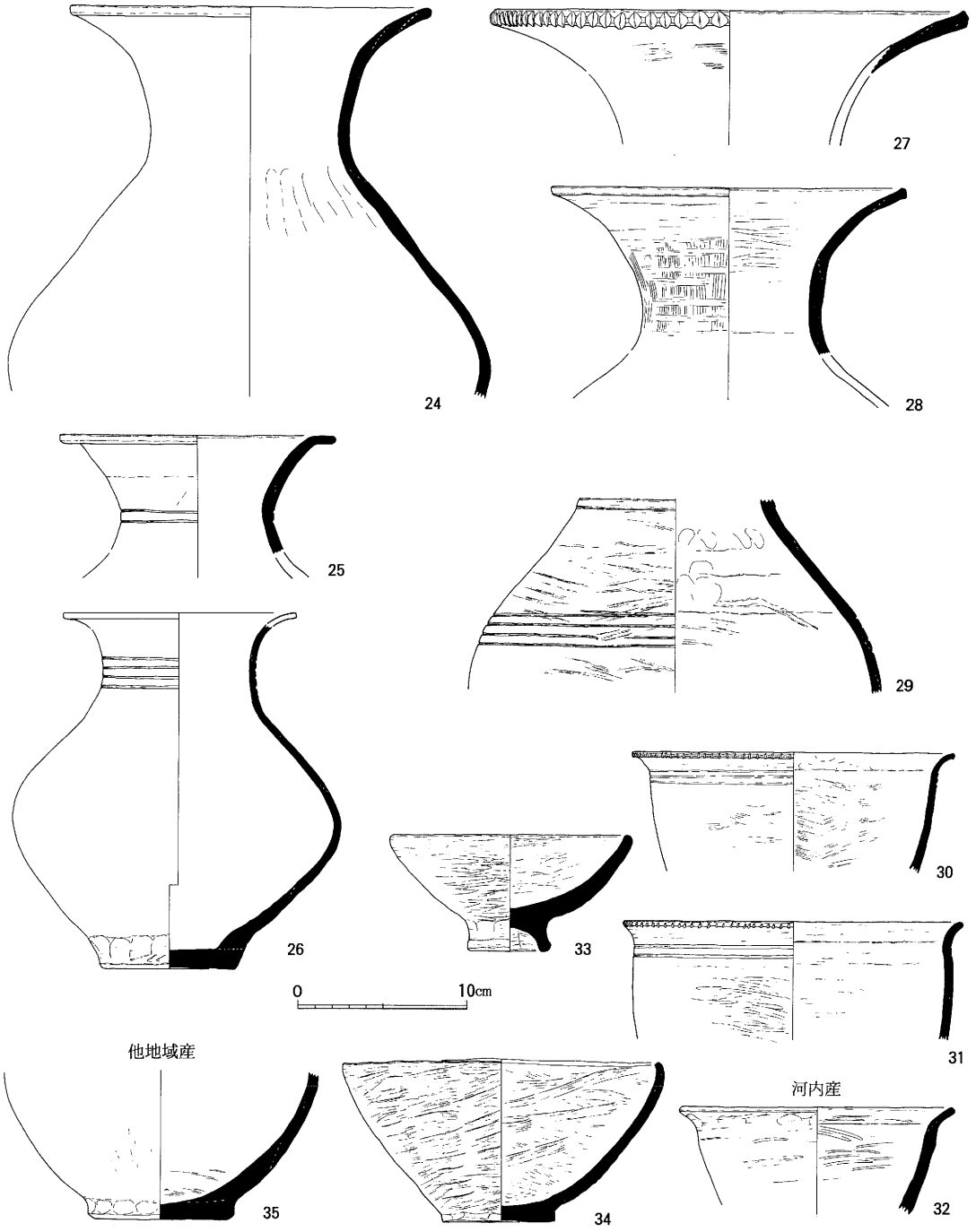


図9　SD—01 上・下層出土土器（S＝1／4）西区　24～28、上層
29～35、下層

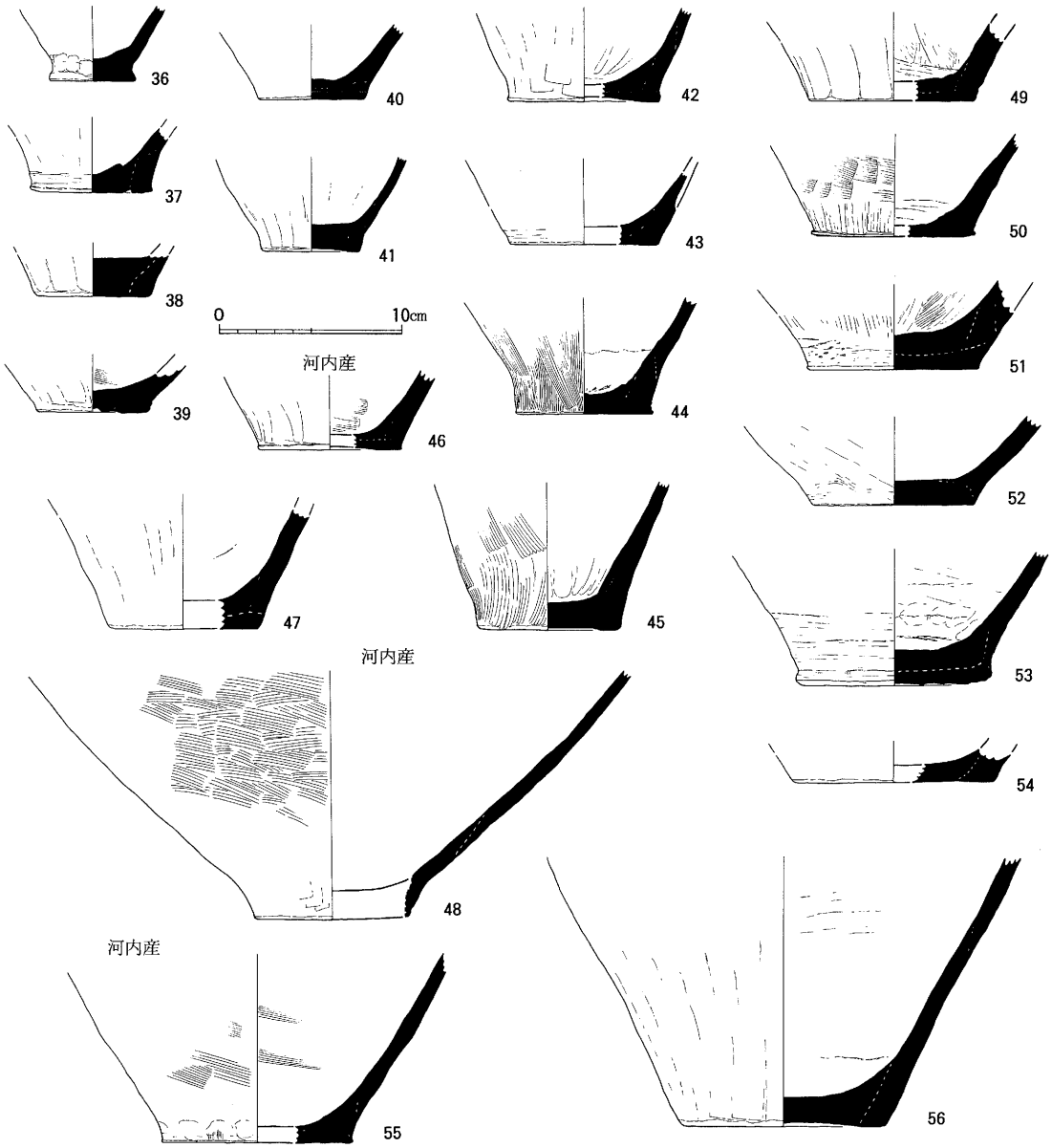


図10　SD—01 上・下層出土土器（S＝1／4）
東区上層　36、37、39、40、43～47、52、54、55　　東区下層　48～51、53
西区上層　41、42　　西区下層　38、56

沈線文、あるいは箆描沈線を施文した後、張り付け突帯文を施文する広口長頸壺などが目立ち、松本・藤田編年による大和第Ⅱ－1様式、佐原分類による第1様式・新段階の前期末の資料にあたる。出土した遠賀川系土器から層位的な違いを見つけるのは難しいが、上層から大和型甕の小破片が1点、また頸部に櫛描で施文した広口長頸壺（図8－15）が出土している。四分遺跡SK－1440を典型とする大和第Ⅱ－2様式の場合は、頸部を長く発達させた広口長頸壺が出現する。文様は箆描沈線文を主体とするが、櫛描文の出現が指摘される。甕は遠賀川系の甕とともに大和型甕が目立ちはじめる。上層は大和第Ⅱ－2様式まで下がる可能性もある。

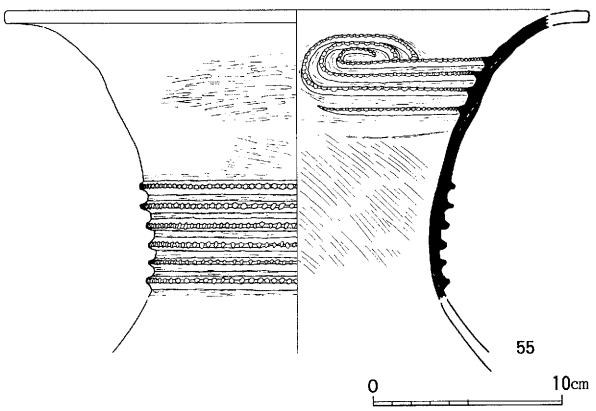


図11　第5調査区・自然河川出土（S＝1／4）

b) SK－26・土坑　試掘調査区の東部、SD－01に隣接して検出した長径3.3m、短径2.7m、深さ10cmの浅い落ち込みで、底面に径0.7～1mの小土坑が3カ所ある。規模の大きな浅い落ち込みと3カ所の土坑とは別で切り合っていた可能性がある。浅い落ち込みの上層から櫛描文を施文した広口長頸壺と縄文系の土器で知られる紀伊型甕が1点が出土している。広口長頸壺は頸部から胴部にかけて12帯条の櫛描直線文と下部に櫛描波状文を施文し、頸部が長く発達している。また紀伊型甕は

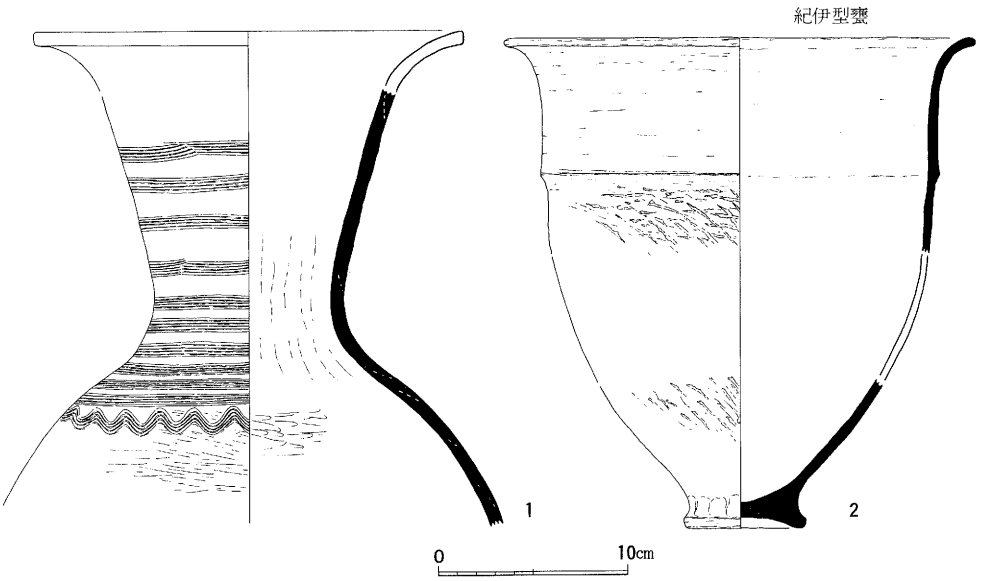
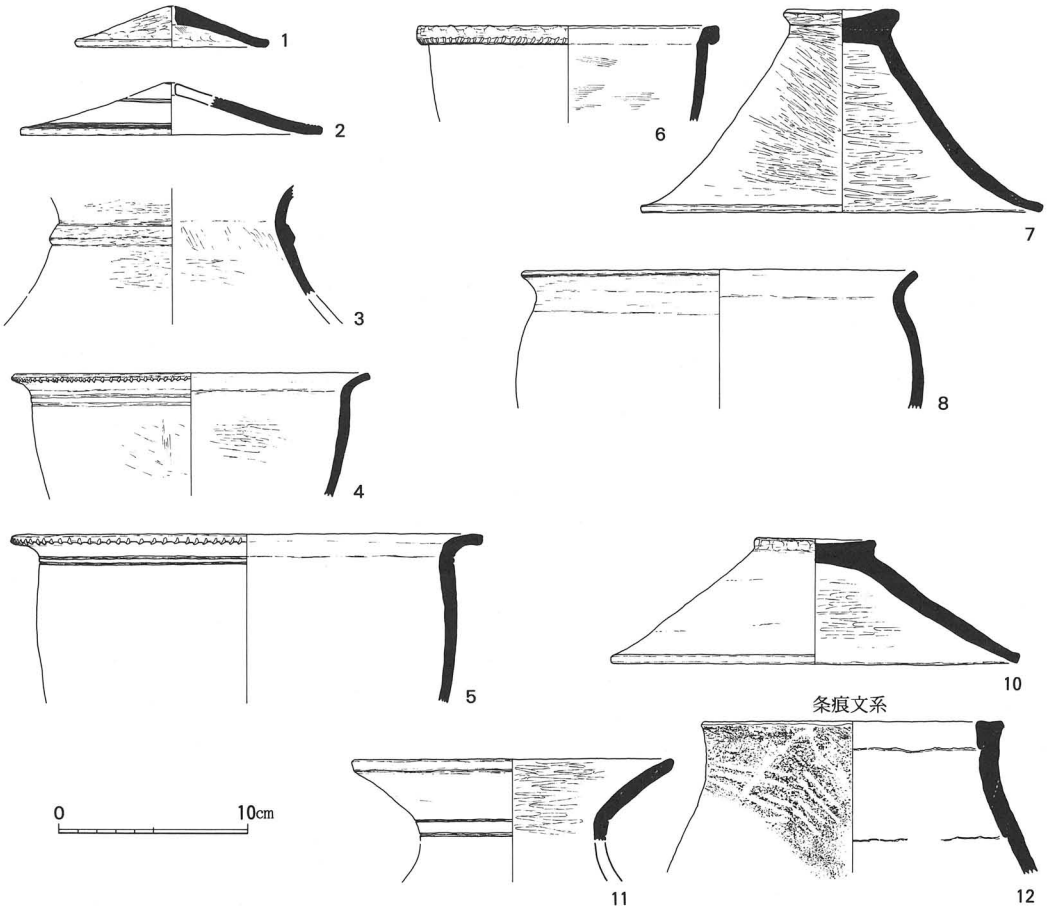


図12　SK－26出土土器（S＝1／4）



1 ～ 8　…SK－36
9～11　…SK－23

図13　SK－23・36出土土器（S＝1／4）

器高が推定26cm、口径25cmの倒鐘形に近い形態である。滑らかに外湾した口縁部は内外面ともナデ仕上げし、ケズリ調整で仕上げた胴部は肩部に段を成形して縄文晩期・突帯文土器のなごりをとどめている。胎土中には結晶片岩の砂粒が含まれる。

c) SK－23・土坑　拡張区の東部に位置し、長径2.5m、短径1.7m、検出した深さ25cmで検出した土坑である。遺構の性格は定かでない。出土遺物は遺構の上部から前期・大和第Ⅰ－2様式の遠賀川系土器が出土している。その内、縄痕文系の土器（図13－11）が1点含まれている。

d) SK－36・土坑　拡張区の北端部で検出した径2m、検出した深さ30cmほどの土坑である。性格は不明。遺構の上部と下部にわかれて土器類が出土している。いずれも弥生時代前期・大和第Ⅰ－2様式の遠賀川系土器の破片が出土している。その内、下層からは口縁端部に粘土紐を張り付けて成形した刻み目を施すがいわゆる無文土器に類似した土器が1点出土している。

e) 落ち込み　調査区の南部、奈良時代の坪界溝に接して地形にともなう不定型な落ち込みを検出し

た。落ち込みを内には粘土層が堆積し、下層から弥生時代前期の土器が出土している。

f）石器　耳成山から産出する安山岩の石包丁1点が包含層から、石包丁形に荒割りした結晶片岩の未製品がSK－17から出土している。

（5）奈良時代の遺構と遺物

a）坪界溝　第4－A調査区から第5調査区にかけて東15条4里22坪と27坪との間で南北に延びる溝を検出した。第4調査区では幅4m、深さ60cmの大溝で、砂層でおおわれている。第5調査区では幅2m、深さ1mほどの逆台形状になり、第4調査区の場合と比較して溝幅が半分に縮小している。いずれの調査区でも近世から昭和初期にかけて使用されていた坪界溝とは西へ2～3mずれて平行している。砂層中には弥生時代前期や古墳時代の土器に混じって奈良時代後期の土器類（図14）が出土している。条里制に沿って溝が南北に延びている点は条里制の施行にともなう遺構と推測され、出土した土器から奈良時代の条里遺構と判断する。同時代より新しい時期の遺物が出土していないため、遺構は奈良時代の単一時期に限定できる。

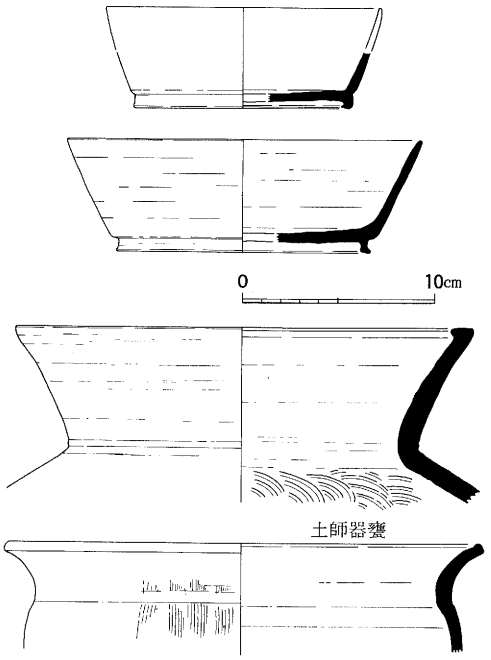


図14　奈良時代の坪界溝出土土器（S＝1／4）

第2・3・4調査区にかけて検出した条里施行以前の溝は、2本の溝が平行して南東から北西にゆるやかにカーブしながら流れている。2本の溝が平行する人工的な水路と思われる。出土遺物は古墳時代の土器が目立つものの、わずかに奈良時代の土師器片が出土している。第4・5調査区で検出した奈良時代の坪界溝とは対照的に地形的な流れを示している。弥生時代・以前～古墳時代にかけ谷筋状の地形をなしてきた自然河川に沿って掘り混まれた溝と考える。その場合、本遺跡では条里制を施行した溝と未だ自然地形に頼る流路をみたことになり、奈良時代の条里遺構を検討するに興味深い資料である。

第1・2・3調査区では飛行場が築かれるまで使用されていた坪界溝を検出している。第4・5調査区で検出した坪界溝には18世紀中葉以降の伊万里椀などが出土し、水路が近世から昭和初期にかけて使用されていた可能性がある。しかし中世や近世前半の坪界は検出していない。第3・5調査区で検出した近世から昭和初期の坪界溝は、農道の両側を区画した水路の跡で、坪界を堺に水田を階段状に区画していた。

Ⅲ　まとめ

海知遺跡の試掘調査から弥生時代前期の集落跡、奈良時代の条里遺構を検出した。以下、時代ごとにまとめておく。

(1) 弥生時代

第1・3・4・5調査区において、微高地を検出した。そのうち第4・5調査区では弥生時代前期の遺物包含層を微高地地帯から検出し、集落跡を確認した。第4－A調査区において調査区を拡張したところ土坑多数、溝2本などを検出、特にSD－01溝からは多数の前期末～中期初頭の土器が出土している。残念ながら住居跡を検出していないが、集落にともなう遺構と判断する。また包含層中において土器破片が集中的に出土したところがあった。調査では包含層を除去して基盤層まで掘り下げ遺構の検出をおこなったため、おそらくは基盤層まで達しない浅い落ち込みなどが多数存在したものと予測される。

出土した土器は大和第Ⅰ－2様式から大和第Ⅱ－2様式（弥生時代前期中葉～中期初頭）にかけて、篦描沈線文を施文したいわゆる遠賀川系土器が主体である。特に大和第Ⅱ－1様式（弥生時代前期末・前期新段階）の土器が出土する遺構が目立つ。SD－01溝から出土している弥生時代前期の土器には数点の生駒山西麓の特徴をもつ土器、SK－26土坑からは大和第Ⅱ－2様式の紀伊型甕が出土している。結晶片岩の石包丁未製品も出土しており、河内地域や紀ノ川地域からの遺物の搬入が目立つ。またSK－23土坑から大和第Ⅰ－2様式の遠賀川系土器に混じって条痕文を施した水神平系土器が出土している。唐古・鍵遺跡の調査でも条痕文系の土器片が出土例が報告されており興味深い。

集落の東側には自然河川があり、川岸に面して展開した集落であることが推測される。大和第Ⅱ－1様式になると、いわゆる拠点的集落は環濠の出現が指摘される。海知遺跡では同時期の遺構にSD－01溝を検出しているが、環濠に相当するような大溝は確認していない。拠点的集落に代表されるような大規模な遺跡ではなく、海知遺跡は規模の小さな集落であることが推測され、環濠をもたない川岸の弥生時代前期・小集落の存在がクローズアップされる。

(2) 古墳時代

開発予定地の北部、第6調査区において古墳時代前期（庄内期～布留期）の溝と井戸を検出している。第4・5調査区でも自然河川から布留式の甕など破片が出土している。第6調査区の西端部付近において、同時期の集落の存在が予想される。

(3) 奈良時代

東15条4里22坪と27坪との南北坪界に沿って、奈良時代の土器を包含する大溝を検出している。奈良時代の条里制にともなう坪界・大溝と思われる。しかし一方では第2・3・4調査区にかけて、自然地形に従って流れる条里施行以前の溝を検出している。溝からは古墳時代の土器に混じって、わずかに奈良時代の土器片も出土している。おそらくは条里制が施行されるまで流れていた溝と思われるが、奈良時代の条里制にともなう坪界・大溝との関わりが興味深い。

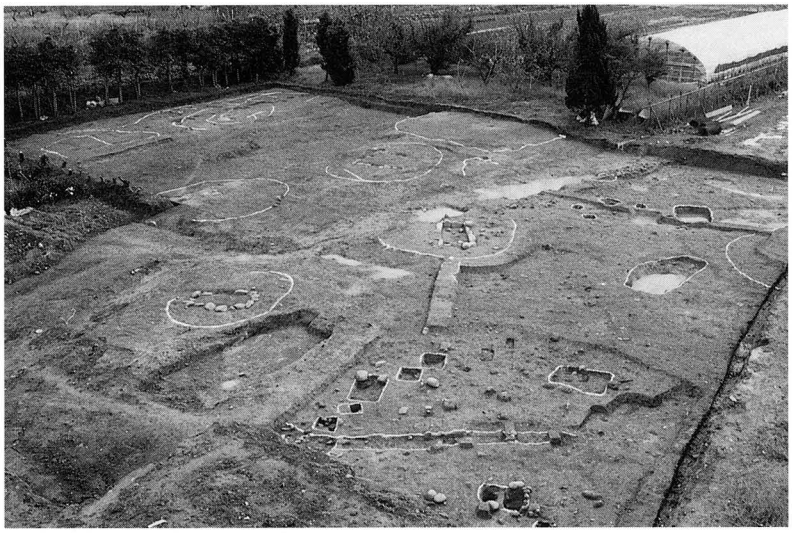
寺山遺跡の全景（西方から）

第４次調査区全景（天・西、地・東）

図版2　寺山遺跡・第3次調査

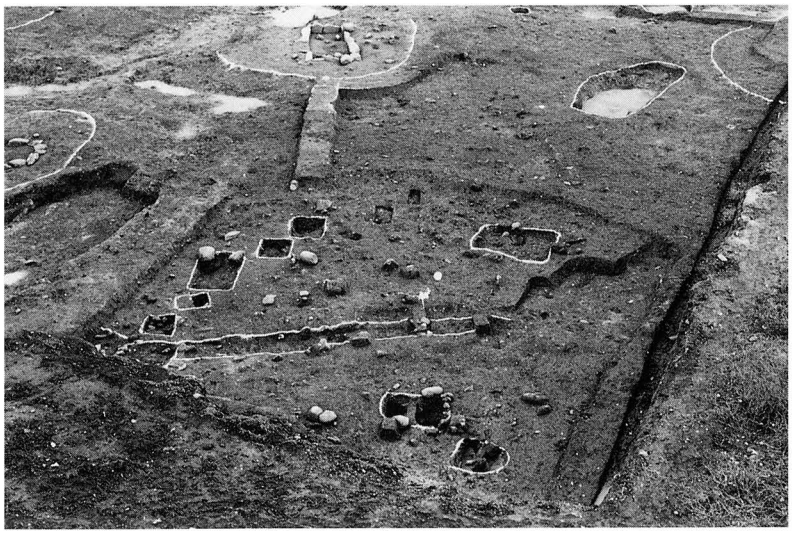
寺山31号墳・第3次調査区全景（南方から）

寺山31号墳・埴輪出土状況（南西から）



第4次調査区全景
（北西から）

第4次調査区全景
（北方から）

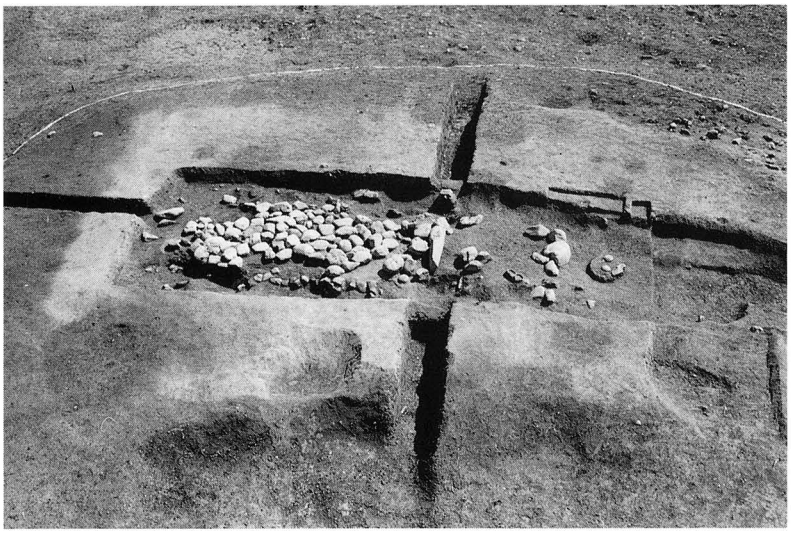


第4次調査区
中世墓群
（北方から）

図版4　寺山遺跡・第4次調査

寺山24号墳・石室
（東方から）

寺山25号墳・石室
（北東から）



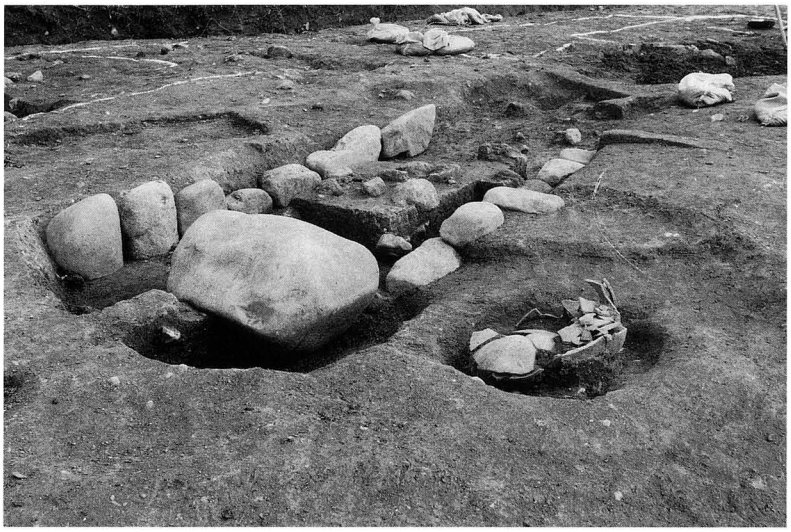
寺山26号墳・石室
（西方から）

寺山27号墳・全景
（西方から）

寺山27号墳・北石室
（西方から）

寺山28号墳・石室
（南方から）

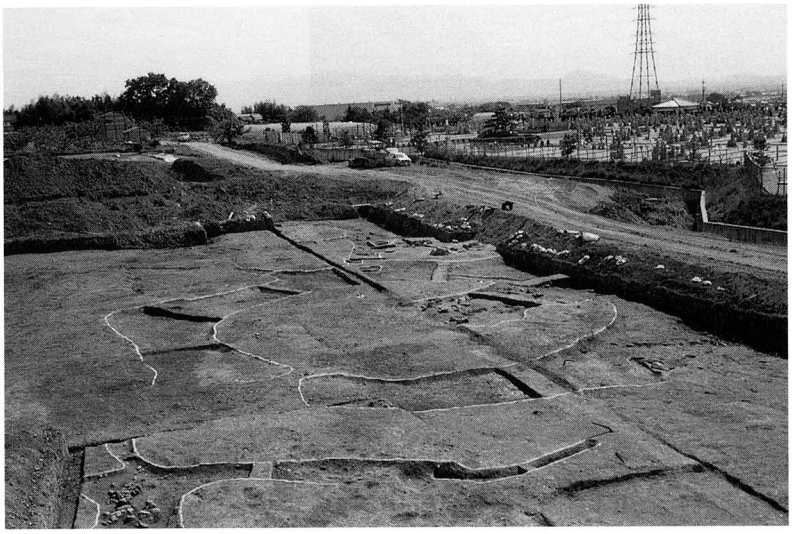
図版6　寺山遺跡・第4次調査



寺山29号墳・石室
（北西から）

中世墓
白磁椀出土状況

中世墓
青磁椀出土状況



寺山32・33号墳全景
（北方から）

寺山32・33号墳全景
（南方から）

中世墓
青磁椀出土状況

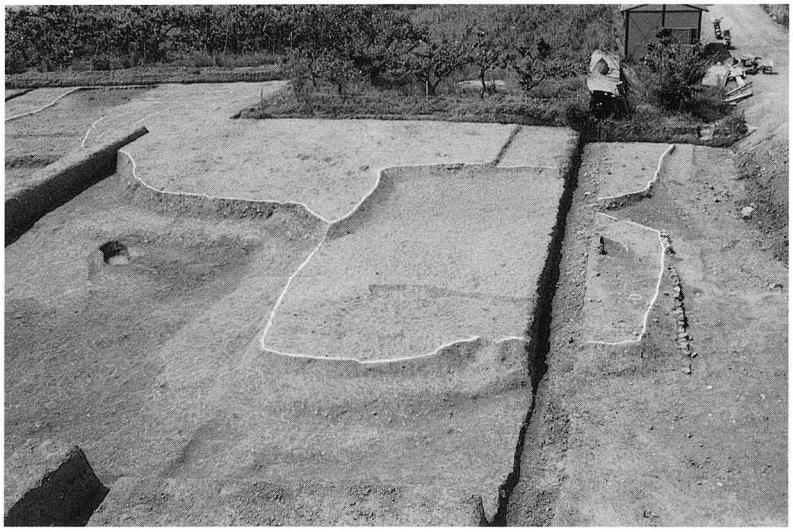
図版8　寺山遺跡・第5次調査

寺山33号墳・南北石室
（北方から）

寺山33号墳・北石室
（北方から）

寺山33号墳・南石室
（北東から）

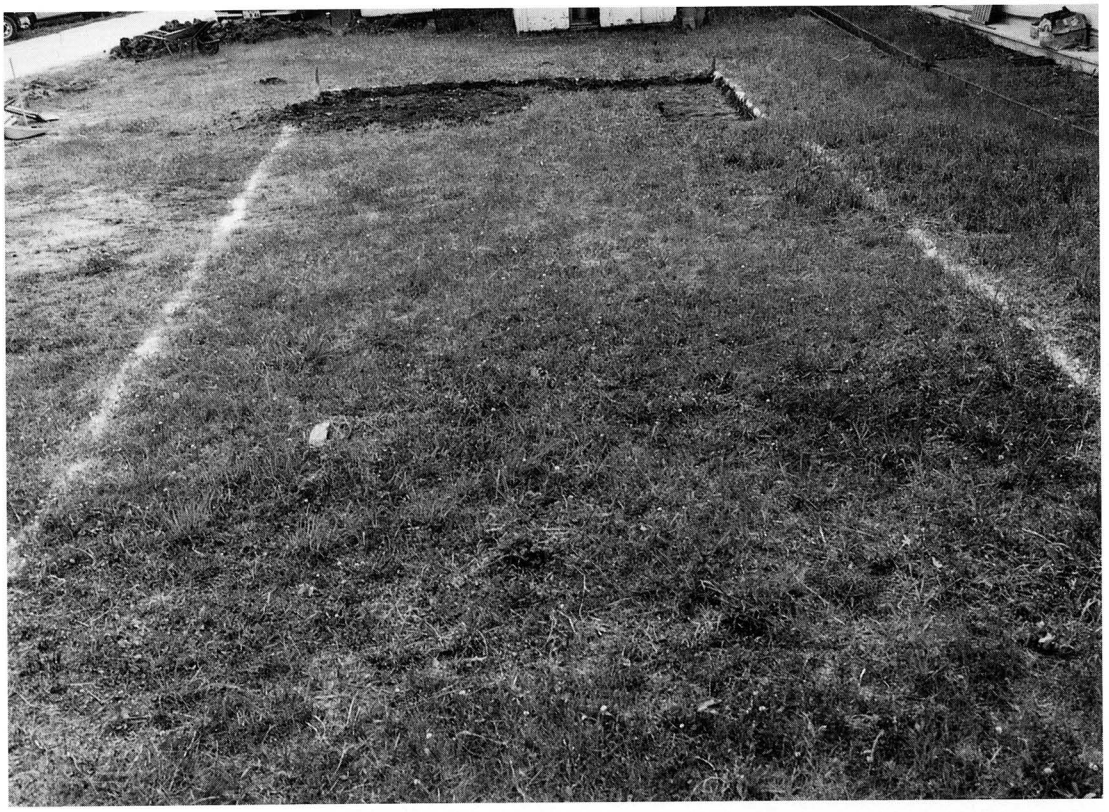
寺山30号墳・全景
（東方から）



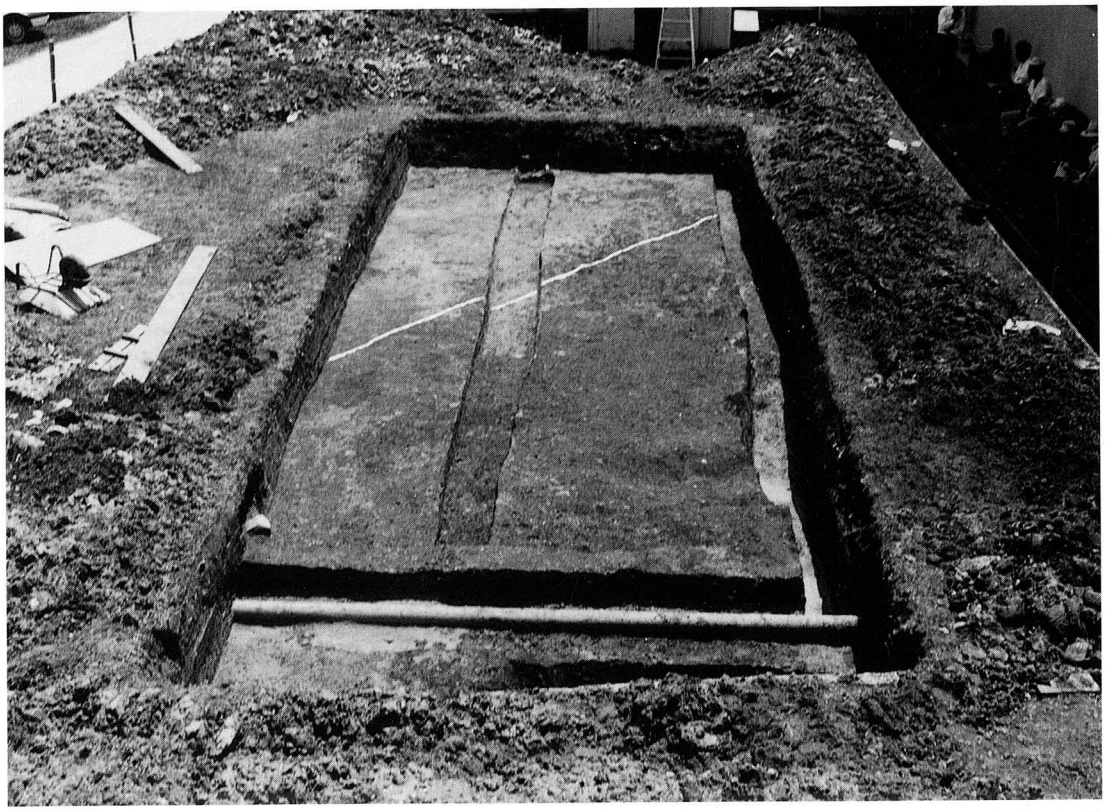
寺山30号墳
手前が前方部
（北方から）

野田古墳と
周濠の検出
（北西から）

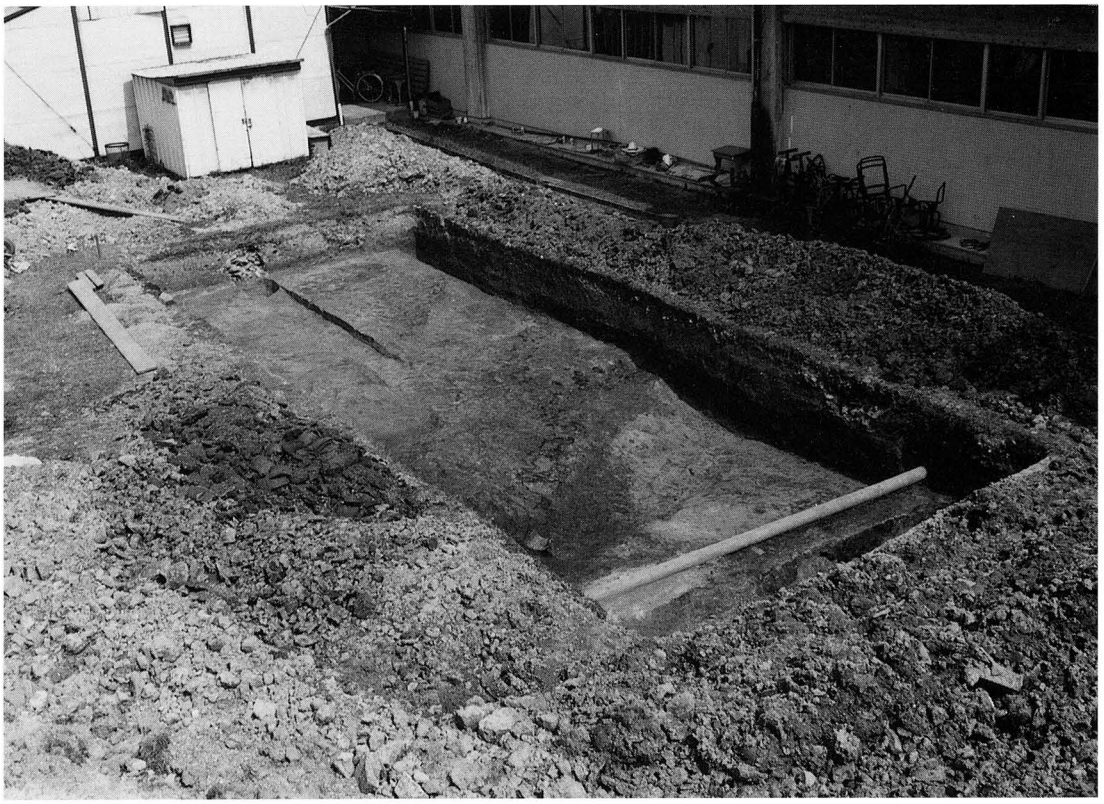
図版10　塚山古墳（1）



1. 調査地（西から）



2. 遺構（白線濠外側）（西から）



1. 遺構（西北から）

2. 遺構（西から）

1. 調査地（南から）

2. 調査地（東北から）